資料

（平成十二年十月）

第四十五回「合宿教室」（阿蘇）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

社団法人　国民文化研究会

—“合宿教室”45年の歩み—　　累計・参加人員　12,378名

回数	年度	開催地	参加人員	主要講師
1	昭和31年	霧島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲仙	332	木内信胤・衛藤瀋吉・高木尚一
23	〃 53年	阿蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥冨修一
38	〃 5年	厚木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義

第四十五回〝合宿教室（阿蘇）〟全参加者の感想文と短歌詠草

とき　平成十二年八月三日（木）から七日（月）まで四泊五日間

ところ　熊本県「国立・阿蘇青年の家」

参加総数　一五四名

目　次

〝はしがき〟に代へて　……理事長・上村和男…2

大学別参加者数・その他の人数の内訳　……5

〝合宿教室〟の日程表（四泊五日）……6

第45回〝合宿教室〟のあらまし　……7

走り書きの〝感想文〟と第三回目の〝短歌詠草〟……参加者全員…27

短歌詠草　……合宿中の第一回目と第二回目の創作作品　……参加者全員…87

あとがき　……110

カメラ・レポート26枚（29ページから79ページの左頁に掲載）

″はしがき″に代へて

上村和男
（本会理事長・㈱千代田コンサルタント相談役）

今年は大阿蘇の麓にある「国立・阿蘇青年の家」で、八月三日から七日までの五日間、第四十五回の「合宿教室」が行はれた。根子岳、高岳、中岳、烏帽子岳の大阿蘇の山々を間近に望みつつ、標高七百米の大自然の中での四泊五日の「合宿教室」は、実に楽しく、充実したものであった。また都会の猛暑をよそに、快適な「合宿教室」でもあった。

「合宿教室」の朝は、他の団体と一緒に、清々しい大自然の空気を胸一杯吸ひ、国旗掲揚・国歌「君が代」を斉唱し、体操を行ひ、各々の団体の紹介が行はれ、なごやかな雰囲気ではじまった。

参加者総人数（一五四名）は、都会生活から解放され、大自然に囲まれ「学問・祖国・人生」について真剣に語り、頭を使ふだけの理論討議ではなしに、誠心誠意、人間として生きてゐる自己をしっかりとみつめながら、抽象的に流れないやうに努力しての討論であった。全参加者の熱心な姿勢は、今年も、この「合宿教室」を見事に結実させてくれた。併せて合宿運営委員長の中島繁樹さんをはじめ運営委員の方々のご苦労に感謝申し上げる。

お招きした講師は、第二日目の明星大学教授・東京大学名誉教授小堀桂一郎先生で、本会の顧問でもあらせられる。

先生は「国際的視野から見た日本の国柄」について、ご講義され、戦後失はれた「国体」について、水戸学派をはじめとし、慈円や北畠親房の歴史哲学について触れられ「我々の祖先は皇室を中心として生き、日本の国柄を守ってきたところに日本のアイデンティティーがあり、この国柄を守るといふことを戦後おろそかにして来た。このことが現在の道徳心の崩壊を来たした」と厳しく鋭い指摘をなさった。

第三日目は、亜細亜大学教授・東中野修道先生が「戦後日本人の歴史認識―南京事件からみる―」の演題でご講義をされた。

先生は、東京裁判史観による南京虐殺事件の真実を求めて、真正面から立ち向ひ、歴史事実を解明せんと努力し続けてこられた。従って、歴史認識を異にする進歩的学者やマスコミと歴史事実の認識をめぐって、現在戦ってをられる。戦勝国アメリカが日本人に戦争贖罪意識――日本人は道徳的に劣った民族である――を植ゑつけるために巧妙に演出した事実を指摘され、「ある国民を消すには、その国民の記憶を消し去ることから始る」を紹介され、戦後我が国の歩みがこの言葉に集約されてゐることを訴へられた。

この夜は、満天の星空の下で、大阿蘇の山々に包まれて戦時・平時を問はず、祖国の為に命を捧げられた、祖先の御霊祭りが静謐の中、厳粛に行はれ、参加者全員に、すばらしい感動を与へた。

日程が進むに従ひ、講義や班別討論、さらに和歌創作とその相互批評などによって、この合宿の目指すものが生活実践の中で体験的に把へられていった。ここでは、年齢の差も、学問の深浅も、大学の社会的優劣の差も、上級生下級生の差も、先輩後輩の差も、さらに職域の差も、社会経験の差も、要するに社会生活における差別感に価値をおかず、お互ひに、一人の人間として〝まごころ〟を披瀝し合ふ経験が積まれていった。大ぜいの人たちが心をひとつにして生きるといふことは、一体どういふことなのか、それについて体験的理解が生まれていったのである。そして、日本民族が世界の平和と人類の幸福について寄与する道が、その角度から明るく指向されていった。

なほ、ここに編したこの「感想文集」は、参加者全員が帰りがけに走り書きで書いてくれたもので、見方によっては大変稚拙なものもあるが、いまの日本のただならぬ行き詰まり状況に当面してゐる中で、精魂を傾けて、自分の思ひの丈を書きとめてくれたものである。紙面の都合上全文をそのまま載せ得なかったことは残念だが、なにとぞご容赦いただきたいと存じます。この文集全体の編集に、十余名の会員（編集後記に記載）が仕事の余暇をさいて取り組んでくれたことにも心から感謝したい。

また、最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当り、本年もまた、朝野からお寄せ下さった得難い御支援の数々に対し、会員一同に代り、心から厚く御礼申し上げます。

来年（平成十三年）の「第四十六回合宿教室」は、八月二日（木）～八月六日（月）までの四泊五日間「富士のさと・国立中央青年の家」（静岡県御殿場市）で開催することが決定、「合宿運営委員長」には、本会理事の山口秀範氏（五十二歳）を煩はすことになりました。改めて会員各位に格段のご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

第45回全国学生青年合宿教室夏季セミナー（平成12年８／３～８／７）於「国立阿蘇青年の家」

参加者

（学生班　三十四大学）（洋数字は参加学生数）

東北女子大２　東北女子短大４　亜細亜大６　慶應大２
国学院大１　芝浦工大１　大正大１　帝京大１
東京大２　東京農工大１　明治短大１　明星大２
立教大１　早稲田大３　京都大１　同志社大１
神戸大１　愛媛大１　島根大１　山口大１
近畿大１　九州工１　九州工業大２　福岡教育大３
麻生工科専門学校１　九州大４　西南学院大１
中村学園大１　福岡女学院短大１　佐賀大２　長崎大４
熊本大２　崇城大１　志学館１　Lyndon Institute１

計　五十九名（うち女子二十名）

（社会人・教員参加者）　十九名

（招聘講師）　二名　**（国民文化研究会）**　六十八名

（事務局）　五名　**（写真）**　一名

総計　一五四名

（社）国民文化研究会・大学教官有志協議会　主催

第４５回（平成１２年）“全国学生青年合宿教室” 日程表

	8月3日（木）	8月4日（金）	8月5日（土）	8月6日（日）	8月7日（月）
6:30		（起床）	（起床）	（起床）	（起床）
7:00		洗面・清掃	洗面・清掃	洗面・清掃	洗面・清掃
		（7:10）	（7:10）	（7:10）	（7:10）
8:00	（注意）↓ 学生の班編成で、一班七名前後を確認のこと。会場入口受付で、所属する班	朝の集い（国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食	朝の集い（国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食	朝の集い（国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食	朝の集い（国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 地区別連絡 朝食 清掃
		（8:40）	（8:40）	（8:40）	（9:30）
9:00		講義 明星大学教授、東京大学名誉教授 小堀桂一郎　先生	講義 亜細亜大学教授 東中野修道先生	講義 神奈川県立厚木南高校教諭 山内健生　先生	合宿を顧みて 国文研会長　小田村四郎氏 合宿運営委員長　中島繁樹氏
10:00		（10:10） （10:20） 質疑応答 （10:50）	（10:10） （10:20） 質疑応答 （10:50）	（10:10） 「天皇陛下御即位10年奉祝式典」ビデオ上映 （10:50）	（10:00） 参加者による全体感想自由発表
11:00		記念写真撮影 （11:10） （11:20） 班別研修	（11:00） 班別研修	（11:00） 班別研修	（11:00） （11:10） 感想文執筆及び第三回短歌創作
12:00		（12:10） 昼食 休憩	（12:10） 昼食 休憩	（12:10） 昼食 休憩	（12:10） 班別懇談 （12:40） 昼食
1:00	随時受付	（1:30） 短歌創作導入講義 山口県立下松高校教諭 寶邊矢太郎　先生	（1:30） 創作短歌全体批評 久留米大学附設高校教諭 名和長泰　先生	（1:30） 講義 国民文化研究会・副理事長 小柳陽太郎　先生	（1:30） 閉会式（挨拶）国民文化研究会・副理事長 柳寶邊商店 会長 寶邊正久 氏
2:00	（3:00） 開会式（挨拶）国民文化研究会・理事長 上村和男氏 オリエンテーション（合宿趣旨説明） 中島法律事務所 合宿運営委員長　中島繁樹氏 （諸注意伝達） ・青年の家からの注意 ・福岡労働局総務部 合宿指揮班長　古川広治氏	（2:30） （2:40） レクリエーション オリエンテーリング 第一回短歌創作	（2:30） （2:40） 第一回班別 短歌相互批評 （短歌提出）	（2:30） 班別輪読	（2:00） 解散
3:00					
4:00	（4:20） （4:30） 班別自己紹介 事務連絡打ち合せ			（4:30） 第二回短歌創作 （短歌提出）	
5:00	（5:30） 夕食 入浴 休憩	（5:30） 夕食 入浴 休憩 （短歌提出）	（5:30） 夕食 入浴 休憩	（5:30） 夕食 入浴 休憩	
6:00				（7:00）	
7:00	（7:30） 合宿導入講義 住友電工（株）生産技術部 生産システム技術部長 布瀬雅義　先生	（7:30） 古典講義 昭和音楽大学講師 國武忠彦　先生	（7:30） 体験発表 三菱自動車（株）　山口花子氏 神奈川県立厚木東高校教諭 大日方学氏 慰霊祭の説明（8:20） 大牟田市立橋中学校教諭 西原正博氏	夜の集い	
8:00				（8:45） 清掃・移動	
9:00	（9:00） （9:10） 班別研修	（9:00） （9:10） 班別輪読	（8:50） （9:00） 慰霊祭 （9:30） （9:40） 班別懇談	（9:00） 第二回 班別短歌相互批評	
10:00	（10:00） 就床 （10:30） 消灯	（10:30） 就床 （11:00） 消灯	（10:30） 就床 （11:00） 消灯	（10:30） 就床 （11:00） 消灯	
11:00					

＊社会人特別コース……集合8月3日午後9:30
解散8月6日午後3:30

第四十五回〝合宿教室〟のあらまし

第一日目

（八月三日・木曜日）

第四十五回全国学生青年合宿教室は、熊本県阿蘇郡一の宮町「国立阿蘇青年の家」において開催された。ここでの合宿教室開催は二度目である。「阿蘇青年の家」は、四方を雄大な阿蘇の外輪山に囲まれ、また前方にはなだらかな草原の広がる景勝の地に位置してゐる。中岳をはじめとする阿蘇五岳が眼前に広がる素晴しい環境のもとで、四泊五日の合宿教室はスタートした。北は北海道から南は九州に至る全国各地から集ひ来た参加者は、長旅の疲れもものともせず、受付を済ませると、ただちに宿泊棟の各班室に入り、初めて会った班員たちと挨拶を交はして、開会式に臨んだ。

開会式

九州工業大学四年・桑木康宏君の開会宣言の後、主催者を代表して本会理事長・上村和男氏は「戦後の日本国の有様は祖国を守らうといふ気迫が全く消え失せたと言っても過言でない」「日本の国を本来の国家にする為に悠久の国家理念の追憶からスタートするしかない」との故小田村寅二郎前理事長の言葉を紹介され「親兄弟や学校を思ふと同様に、自然な気持ちで国を愛するといふことを学んでいただきたい。そして、命を懸けて祖国を支へてこられた方々の意志を継ぐ決意を固めることが、人生の

第一歩ではないか」と語られた。続いて、参加者を代表して福岡教育大学三年・小林国平君は「共に学び、共に語り会ふ喜びをこの合宿で感じて欲しい」と挨拶した。

次に、合宿運営委員長・中島繁樹氏は「私達の希望することは、先生方の話を全て受け入れて欲しいといふことではありません。心の底から感動したことのみが、私達の人生にとって一番の力となるのです。この合宿の中でこれはと思ふことを一つでも二つでも感じ取って欲しい」と合宿の趣旨を語られた。

合宿導入講義　「国際社会で自分自身を語れますか？」

住友電工㈱生産技術部　布瀬雅義先生

先生はまづご自身の海外体験から外国訪問のときの三つの礼儀、つまりその国の言葉での挨拶を覚える、その国の食べ物・飲み物を賞味する、その国の誇りとする人物を知ることが外国の人との上手な付き合ひのために重要であると述べられた。次に日本の素晴らしい歴史について説明された。さらに日本が近代世界システムの中でどの様な道を歩んできたかを、いつもは見落とされがちな様々な事実に基づいて丁寧に説明され、世界で果たした役割について述べられた。その中で日本が古来から大切にしてゐる伝統や理想が国際社会に大きな貢献を果たしてをり、近代世界システム崩壊後に現れてきた様々な問題に取り組む必要があると述べられた。

最後に先生は、「事実を一つ一つ自分の目で見て、心で感じ取って何が自分にとって正しいものかを勉強してほしい、それがないと一流の日本人とはいへない。我々はどういふ歴史を歩んできた国民で、どういふ理想を持って、何をするのかといふ知恵を皆さんにも持っていただくことが私の願ひである」と訴へられ、講義を終へられた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひが進められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後に続いて行はれた。お互ひに初対面のせゐか、最初は緊張して意見も少なく、発言も限られてゐたが、班員がお互ひに打ち解けるに従ひ、次第に討論も活発となり、時には反論し、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていった。

第二日目　（八月四日・金曜日）

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「青年の家」合同の朝の集ひに参加して、他団体と共に行はれた。すがすがしい空気の中、国旗掲揚の後、体操を行って、一日の研修を新たに迎へた。

講　義　「国際的視野から見た日本の国柄」

明星大学教授・東京大学名誉教授　小堀桂一郎　先生

先生はまづ、「国柄」、換言すると「国体」といふ言葉が明確な輪郭をもって人々の意識に上るやうになったのは、会沢正志斎の『新論』に代表される水戸学派の活動においてであると前置きされた後、幕末において、西洋列強の艦船が日本の海域に出没する中で、当時のエリートたちの中に、このままでは国を保てないといふ危機意識が広がり、徳川将軍家の祖法や藩に対する忠義を越えた、さらに大きな忠義の対象があるといふ認識が起るとともに、このやうな「アイデンティティ・クライシス」ともいふべき危機的状況に臨んで、国民的なアイデンティティをいかに確立するか、これが国体論の起った背景で

あると述べられた。そして、慈円の『愚管抄』や北畠親房の『神皇正統記』などの歴史哲学書に触れ、また、支那やヨーロッパ諸国との国際的な比較の観点から、わが国の国柄の特徴を明らかにしていかれた。

すなはち、慈円は、支那大陸における放伐と革命の反復といふ血なまぐさい歴史に対比して、日本の皇室は、常に道理を重んじて道理の支へによって連綿たる地位を保ってきたと述べ、北畠親房も、万世一系の皇統の連続性の根拠は、天竺（インド）震旦（支那）と比較しても、皇位の継承が正しく行はれてきたことにあると結論づけてゐると指摘された。

また、「ヨーロッパ諸国にしても、その歴史は我が国より遥かに若く、祖先であるゲルマン人の信仰や神々の物語も、キリスト教によって滅ぼされ、現在の生活とは何の関係もない伝説の世界のものになってしまってゐる。ヨーロッパから見ると、日本の皇統の連続性、万世一系の皇統の持続といふそれ自体が、すでに奇跡のやうな話である」と述べられた。

それに対して、日本では、「神話の中で活躍する神々が現実に現在の皇室の祖先であり、これらの神々と今上天皇との血縁関係が歴史に残ってゐる皇統譜によって文献的に立証されてをり、外来の文化要素を寛大に熱心に輸入して自分を豊かにしていく努力をしながらも、ヨーロッパのやうに外来の要素に圧倒されて自分の原型を見失ってしまふことはなかった」と述べられ、「自然界の森羅万象に宿る神々への畏敬の念、祖霊崇拝の敬虔さといふものが日本人の道徳の根元であり、祖霊崇拝の政（まつりごと）の様式を司る役割が皇室の最も重要な役目の一つである。この皇室を戴いてゐるといふことが、日本の国柄の最大の特徴である」と結論づけられた。

最後に、「現在の諸々の道徳の崩壊現象は、国柄を守るといふことをおろそかにしてきた結果であり、私どもの国柄を守るといふ努力に油断があったことへの厳しい警告である」と述べて講義を終へられた。

短歌創作導入講義

山口県立下松高校教諭　寶　邉　矢太郎　先生

先生の短歌との出会ひは、大学一年の時参加された短歌の会であった。友と批評し合ふことによって「自分の心に沿って言葉

が整へられ」ていく経験をされ、歌をつくる喜びを発見し、「大変新鮮に感じられた」と述べられた。友の短歌をよまれて、「短歌を作った人の思ひが溢れてゐる」ことが感じられ、それによって「一人の個人的な経験を他の人と共有」できる喜びを語られた。また、短歌創作を通じて、経験を「言葉にしようと努力をする」ことで、その経験は「忘れ難いリズムとなって心に定着」する。「経験の意味といふものが自分でわかる」のだと、短歌創作の意義を述べられた。ご自身の短歌創作の経験を交へながら、創作上の留意点を、具体的に、懇切に説かれた。最後に、「自分の心を、正直に、正確に、のびやかに五七五七七に託して下さい」と述べられ講義を終へられた。

レクリエーション

講義後、心待ちにしてゐたレクリエーションの時が来た。幸ひに天候にも恵まれ、阿蘇青年の家の周辺の散策を行った。雄大な阿蘇の景色を眺めながら、班ごとに楽しく語らひつつ、しばしさはやかな一時を過ごすことができた。合宿地に戻った参加者は、散策の折りに心にとどめた情景を、また、これまでの日程の中で心揺さぶられたことを思ひ起し、短歌創作に余念がなかった。

古典講義　『古事記』―神々の生成―

昭和音楽大学講師　國　武　忠　彦　先生

先生は、まづ日本人のアイデンティティは何かを考へたときに、『古事記』こそが、日本人の本質を表現してをり、その源であることを指摘され、早速『古事記』の冒頭部である「天地のはじめ」から読んでゆかれた。そして、始めに出てくる「高御産（たかみむ）

巣日の神」について、本居宣長の言葉を引用されながら、「産巣といふ言葉は、ものが次から次へ産まれ出ることを表す。農耕社会の匂ひが強くしてくる神様の登場である。『古事記』の言葉は、日本の古代人の貴重な生活の経験から生み出されてゐるのです」と語られた。

また、「水母なす漂へる時に」の言葉について、『古事記』では、「久羅下那洲多陀用幣琉」と表記したが、このやうに語り伝へてゐたことを文章化するのは並大抵のことではなかったことを説明してゆかれた。

稗田阿礼が暗誦してゐた氏族の歴史や朝廷の歴史は一字一句もおろそかにすることはできない。三十余年後元明天皇の命により、太安万侶はこの古代の何百年に亙って日本人が大和言葉として練り上げてきた大事な言葉をそのままに、その語り言葉としてのリズムも大切にして伝へようとした。とても漢文化することはできない。そのために文字化するときにこのやうな漢字の訓読みと音読みを当てる独特な漢字仮名混り文で書き上げるといふ大変な苦心をしたと語られた。

先生は、「神々の生成」を読み進めてゆく中で、日本人の宗教観にも触れられ、「周囲のものは全て神である。さういふ神々が親しく側にいらっしゃって生活を送ってゐる。だから、生産に安心して勤しむ事ができる。これが日本人の宗教心である。祖先の霊も身近にあるといふ信仰がある。この宗教は素晴らしいものであり、『古事記』を読むことでそれを感じてほしい」と語られて講義を終へられた。

班別輪読

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読研修を行った。國武先生のご講義を振り返りながら、紹介された『古事記』の文章を、皆で声に出して読み味はっていった。古代の人たちの思想や息吹を直接感じることのできるひとときであった。

第三日目

（八月五日・土曜日）

講　義

戦後日本人の歴史認識—南京事件からみる

亜細亜大学教授　東中野　修　道　先生

先生は冒頭、戦勝国アメリカが日本人に戦争贖罪意識（＝日本人は道徳的に劣った民族であるといふ）を植ゑつけるため巧妙に演出した事実を指摘された。東京裁判のやり方はそれを如実に示してゐる。また連合軍司令部提供の「太平洋戦争史——真実なき軍国日本の崩壊」が昭和二十一年の朝日新聞に堂々と、日本人が近代史最大の虐殺事件を起したとの内容で掲載された。南京事件も、当時（昭和十二年十二月）南京には朝日、毎日新聞の報道者が計百三十人も居たのにも拘はらず、南京虐殺を報じた記事は一つもなかった、といふ重大な事実を紹介された。

一九八〇年代以降、日本を巡る情報戦が活発化し、それ以来日本の政治が外国の影響を受けて自己決定できないといふ自信と誇りを失った状況を、明治以降の日本の歩み、戦後世界第二位の産業国家を確立したことと照らして深い憂慮を表明された。一方新しい歴史教科書をつくる会編纂による中学歴史教科書の白表紙本は、従来の教科書が常に誰かを攻撃してゐる姿勢と違って事実を偏りなく伝へ、わが国の困難な状況をありのまま捉へてゐるとして高く評価された。戦前の支那大陸は内乱、内戦の最中で、常に中国共産党が日本軍を戦争に引きずり込もうと策略した事実を具体例をもって示され、更に南京事件については「南京安全地帯の記録」をはじめとする当時の第一級史料を中心に、意図的に作られた虚偽情報と事実とを、明確に見分ける研究の必要性を強調された。最後にミラン・ヒューブルの言葉、「ある国民を消すには、その国民の記憶を消し去ることから始まる」を紹介され、戦後のわが国の歩みがこの言葉に集約されることを訴へられて講義を終へられた。

創作短歌全体批評

久留米大学附設高校教諭　名和長泰先生

先生は先づ、切実な感動から短歌は生れるといふこと、五七五七七といふ定型、文語調及び一首一文といふ決りに則って作ってゆくことを話された。そして理屈に陥らず、感動した源を正確に見つめてゆくことや言葉を整へることの大切さなどについて話をされ、二百三十五首を収めた歌稿から約四十首の歌を選ばれ懇切丁寧に添削してゆかれた。御講義は、作者への落ち着いた思ひやりに満ちてゐたが、時折さはやかな笑ひも起きた。終りに、短歌の修練には驚くべき深みがあること、お互ひに感動を共感する世界が現実にあること、「日本人がずっと大事にして来たものがそこにあるのです」と話された。

班別短歌相互批評

全体批評の後、各班に分かれて短歌相互批評が行はれた。歌をつくったのは初めてといふ参加者が多かったが、皆、一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに沿った正確な表現を求めて心を砕いていった。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを伝へることが如何に難しいかを実感させられたが、お互ひの心が通ひ合ふ充実したひとときであった。

青年体験発表

最初に、三菱自動車㈱に勤められてゐる**山口花子**氏が登壇された。氏はまづ二年間の会社生活の中で自分の会社や会社の製品について正確に知り、誇りを持つことの大切さを話された。続いて八年間の海外生活での体験を語られ、本当の国際人となって

いくためには母国である日本のことをもっと勉強していかなければならないと思ひ、学生時代から合宿教室に参加、この合宿教室を通じて吉田松陰や楠木正成といった歴史上の人物や特攻隊で散っていった方々の文書や和歌に触れることで、日本を支へてこられた先人の方々が何を思ひどのやうに生きてこられたかといふ生きた歴史に出会ふことができたと話され、生きた歴史を勉強し、先人達の生き方に心を動かされ感性を養ふことの大切さを語られた。氏は合宿を通じて出会った友人と主催してゐる「元気が出る人物講座」等を通してこれからも女性として社会人として日本人として私らしく頑張っていきたいと力強く語られた。

次に神奈川県立厚木東高校教諭**大日方学**氏が登壇された。最初に氏は自分の教師生活における信念を語られ、その信念を支へてゐる学生時代から参加してきた合宿教室での経験や学生時代に経験した輪読での体験を話された。氏は合宿教室を通じてそれまで知識でしかなかった大東亜戦争が昭和天皇と先人達の我が身を捨てて祖国と祖国の国民を守らんとされるお心のうちに終結したことを知り、かうした歴史の真実を知ることで自分の命が本当に生きた日本の歴史の中に繋がってゐるのだといふことを実感することができたと語られた。また、記紀万葉の世界から日本人がこのうへもなく大切にしてきたその生き方が表現されてゐる教育勅語の精神が今の教育には必要と語られ、現代に生きる若者がこの歴史に培ってこられた日本人本来の生き方を取り戻して豊かな生を送れるやうに教育勅語の精神を教へていきたいと熱く語られた。

慰霊祭

慰霊祭に先立ち、大牟田市立勝立中学校教諭の西原正博氏が慰霊祭の意義と次第について説明された。

そして、先の大戦で特攻隊員として戦死された植村眞久大尉の遺書と挿話を紹介。参加者一同その御心をお偲びした。

続いて屋外に設へられた斎庭（ゆには）で慰霊祭が行はれた。折田豊生本会理事が祭文を奏上、次いで小柳左門氏による御製拝誦、小田村四郎本会会長、上村和男理事長、中島繁樹合宿運営委員長により玉串が奏奠され、一同拝礼の後、「海ゆかば」を斉唱。冴え渡る星空の下、祭りは滞りなく終了した。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

祭文

社団法人国民文化研究会　大学教官有志協議会の催せる　第四十五回全国学生青年合宿教室に集ひし我らは　ここ　大阿蘇の山ふところなる「国立阿蘇青年の家」において　樫の実のひとつごころに研鑽をかさね　はや三日目の夜を迎へぬ

今し天つ日は遠き西の山にかくりて　涼風（すずかぜ）のさやけき今宵　合宿地の麗しき草原（くさはら）を齋庭（ゆには）と定めまつり　浄めまつりて　とこしへにみ国を守りたまへる遠つみ祖（おや）たち　また　み国のために尊きいのちを捧げまししし　あまたのはらからのみ霊を招（を）ぎまつり　なぐさめまつらむとして　ここに　み祭り仕へまつらむとす

顧みれば　過ぎし大御軍（おほみいくさ）の敗れし後　わが国の思潮は久しくも　ちぢに乱るる麻のごとく混迷を極め　おぞましき自虐史観はいよいよ世にはびこり　み祖たちが培ひたまひたるわが国の美風はことごとに地を払ひ　日本国民たるの誇りと独立の気概もまた甚だしく薄れ　憂ひはますます深まりきたれり

さはあれど　昭和天皇　今上天皇の御聖徳を仰ぎまつりつつ　また汝（いまし）み祖たちの踏みたまひし道を辿りまつりつつ　やまとしまねのまことなる道を求むる思ひのやみがたければ　我ら　四十五年を連ね営みきたるこの学びのにはに相集ひ小堀

桂一郎・東中野修道両先生をはじめとする諸先生の御講義に耳を傾け　天皇（すめらみこと）の大みうた或いは古典の言の葉を仰ぎ　輪読にはたまた短歌の創作に心を注ぎ心を開きて語りかはし　老いも若きももろともに心を鍛へ　言葉を修め　わが国の良き伝統を学び　ともに祖国のいのちを担ふべき友がらとなり　み祖たちに連なりてみ国を守りゆきなむと誓ひまつらむ

畏こかれども　汝（いまし）み祖たちのみ霊よ　願はくは　この麗しきやまとしまねの内外（うちと）に満つるまがごとのことごとを打ちそけ　み国のゆくてを守らせたまひ　我らが上をもみそなはし導きたまへと　第四十五回全国学生青年合宿教室参加者一同に代はり　折田豊生　謹み敬ひ恐（かしこ）み恐みも白す

御製拝誦

明治天皇御製

述懐

照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと

夢

今も世にあらばと思ふ人をしもこの暁の夢に見しかな

をりにふれたる

世とともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを

いつかわが心にかかる雲はれてすずしき月のかげにむかはむ

国

ちはやぶる神の御代よりうけつぎし国をおろそかに守るべしやは

昭和天皇御製

松上雪

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

八月十五日那須にて

夢さめて旅寝の床に十とせてふむかし思へばむねせまりくる

稚内公園

樺太に命をすてしたをやめのこころを思へば胸せまりくる

光

さしのぼる朝日の光へだてなく世を照らさむぞわがねがひなる

雲仙岳仁田峠

大阿蘇は波路はるかにあらはれて山なみうすく霞たなびく

今上天皇御製

沖縄平和祈念堂前

激しかりし戦場の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

戦後五十年遺族の上を思ひてよめる

国がためあまた逝きしを悼みつつ平らけき世を願ひあゆまむ

平成十二年八月五日　謹選　小柳　左門

第四日目　（八月六日・日曜日）

講　義　太古から一貫する「国の姿」　―連綿と続く「祈り」の系譜―

神奈川県立厚木南高校教諭　山内健生先生

先生は、まづ私達は金魚鉢の中に入れられた状態で、あまりにも色々な枠が多すぎる。それらの枠を取り払って、伸び伸びと物事を見る潑剌とした精神を復活させたいと語り、日本人が日本人らしくなることこそ、これからの国際交流の時代の必須の要件であると指摘された。次いで、占領下のＧＨＱによる検閲に触れられた。日本を無力化するため、厳しい言論統制が行はれ、さらに検閲隠しが行はれたこと。憲法制定にＧＨＱが関与したこと。教育勅語を廃止したこと。大東亜戦争といふ言葉の使用を禁止したことなど次々と例を挙げながら問題点を指摘された。日本人の自立する精神を奪ひ、歴史の連続性を断ち切ることが占領政策のねらひであったことを明らかにされ、その結果、悲しむべき国家意識の喪失の状態に陥ってゐることを指摘された。自らの歴史を他人事としてではなく、我がこととして感じ取ること。それが健全なるセルフイメージだと思ふと語られた。次に先生は、日本の歴史の特性としての連綿性について触れられ、神話的系譜に繋がる皇統の連綿性、人から人へ、世代から世代へバトンタッチされてきた文化財（伝世古）の代表的なものとして、法隆寺や正倉院について語られた。続いて、神宮の式年遷宮の永き歴史を明はす表を示して、お社（やしろ）の建物が続いてきた背景には、目に見えない心の継承があったことを指摘され、この表は太古から続く連綿性を示す一番わかりやすい表ではないかと語られた。そして、最後に歴代天皇の御製を詠み味はひながら、祈りと内省の大御心が皇室に継承されてきてゐることを感動深く話されて講義を終へられた。

映画「奉祝の灯（ともしび）」上映

ご講義に引き続き、天皇陛下のご即位十年をお祝ひして制作された映画「奉祝の灯」を約四十分鑑賞した。多忙なご公務にいそしまれる陛下。北海道奥尻島や福島県など大規模な自然災害に遭はれた人々を励まされる両陛下。ご慰問を受けた人々の感動。全国各地で繰り広げられた奉迎運動や奉祝行事の様子。そして、皇居前広場で行はれた国民祭典。ＹＯＳＨＩＫＩさんの荘厳な奉祝曲、そして陛下のお言葉と、次々と両陛下のご慈愛溢れるお姿が画面に写し出され、参加看一同深い感銘を受けた。

輪読導入講義　「聖徳太子憲法十七條を中心に」

国民文化研究会副理事長　小柳陽太郎　先生

先生は、「十七條憲法といへば、誰もが知ってゐる『和を以って貴しと為す』といふ言葉について、仲よくすることが大事だといふ程度に理解するに留め、聖徳太子が、『和』といふ言葉の中に、どのやうな深い意味を込めてをられるかに心を寄せようとはしてゐないのではないか」と指摘された。更に、小林秀雄氏の「美を求める心」の一節「菫の花だと解るといふ事は、花の姿や色の美しい感じを言葉で置き換へて了ふことです」といふ文章を引用されて、実態を見続けずにすぐ観念に置き換へて了ひがちであることを戒められた。「輪読とは己の心を裸にし、友と心を通はせながら、共に古典の文章に立ち向かっていくことである」と語られ、更に「先人の言葉を『胸中の温気』で溶かしていかうとする熱い思ひが班室に充満するやうであって欲しい」と述べられた。続いて、十七條憲法の各條を丁寧に解説されていった。特に、太子が党派心を持った人間の本性を洞察される中から、「和」を重視されたことについて、桑原暁一先生の「上和下睦してともに議を尽くすこと、そのことが党心あって達（さと）りなきままに、それを超える方途である」といふ言葉に言及され、「その精神は『五箇條の御誓文』にも継承さ

れてゐると思ひます」と強調された。

第二回短歌創作・相互批評

夕食をはさんで、第二回短歌創作と班別の相互批評が行はれた。参加者の歌もさすがに二回目となると、自分の思ひを素直に表現した素晴らしいものが多く、相互批評でも相手の気持ちを良く味はひながら言葉を求めてゆくといった話し合ひが行はれ、お互ひの気持ちが通ひ合ふなごやかなひとときとなった。

夜の集ひ

厳しい日程を送ってきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」は屋外でのキャンプファイヤーとなった。満天の星の下、各班ごとの様々に趣向を凝らした出し物に合宿参加者はひとときの楽しい時間を過ごした。

第五日目　（八月七日・月曜日）

合宿を顧みて

国民文化研究会会長　小田村　四　郎　先生

先生はまづ、導入講義の「国際社会において自分自身を語れますか」といふ問題が合宿全体を貫くテーマであったと指摘された。

更に、講義を振り返って『愚管抄』以来の祖先の探求した民族の歴史が敗戦による占領政策によつて切断されてしまったが、占領政策の枠を取り払ひ、客観的に事実に即して物事を見て欲しいと指摘された。

最後に、客観的には現在の日本は決して安泰ではなく、我々の先人が幕末の危機においてさまざまな勉強をしたことをもう一回振り返って、山を下りてからまた新しく出発していただきたい、と締めくくられた。

合宿運営委員長　中島繁樹

合宿運営委員長中島繁樹氏はまづ、本合宿の三つの研修テーマを振り返り、氏自身が初めて参加した時の経験をもとに、一つでも自分の心に強く響いた確実なものをつかんでほしいと述べられた。更に、各講師が訴へられたやうに日本のナショナルアイデンティティが失はれやうとしてゐることが、社会・経済のさまざまな混乱の原因の源ではないか、といふことを心に留めて欲しいと訴へられ、最後に、合宿で学んだことが自分自身の確信にいたるまでの体験と短歌創作の工夫と楽しみを紹介された。

全体感想自由発表

続いて四泊五日を振り返って思ひのたけを発表する時間に移った。

「日本のよさを英語で伝へられる真の日本人になりたい」「慰霊祭に最も感動した」「今の憲法は心の中の平和が欠けてゐる」

「班別相互批評で自分の歌がよくなってゆくのに感動した」「けんか別れをした友人と仲直りできずにゐるが、十七條憲法を学んで本当に仲良くするといふのはかういふことかとわかった」「日本人として世代を越えて伝はってゐるものがあることを感じた」「班別討論で、講義も表面的にとらへるのではなく真実を見極めるための学問をすべきではないのか、と気付かされた」「学問に対する姿勢を考へなほすいい機会を得た。短歌の相互批評で深夜まで真実を皆で追求した体験は貴重であった」「短歌相互批評で感動を共有できた」「合宿で出会った友人が自分を支へてきた。合宿で得た友人が人生の幅を広げてくれる」など紹介しきれないほどの心のこもった所懐がつぎつぎと表明され、一同感銘を新たにした。

閉会式

主催者を代表して国文研副理事長寶邉正久氏は、慰霊祭で拝誦された御製を引かれ、国柄の特色を強調されて「ここで学んだことを味はって勉強してほしい」と挨拶された。続いて学生を代表して亜細亜大学修士一年清田直紀君が挨拶し、自分の短歌を紹介しながら、参加のきっかけと感想を述べた。最後に、東京大学二年石村善之亮君が閉会を宣言し、全日程を終へた。

助言者の紹介

㈻拓殖大学　総長　小田村四郎
㈱千代田コンサルタント　相談役　上村　和男
㈱宝辺商店　代表取締役会長　寶邉　正久
元・九州造形短期大学　教授　小柳陽太郎
昭和音楽大学　講師　國武　忠彦
新日本製鐵㈱　プラント事業部次長（嘱託）　今林　賢郁
講談社　資料センター室長　磯貝　保博
神奈川県立厚木南高校　教諭　山内　健生
東急建設㈱　調達部長　奥冨　修一
福岡県立嘉穂高校　教諭　小野　吉宣
中島法律事務所　弁護士　中島　繁樹
㈳国民文化研究会　事務局長　山口　秀範
熊本市役所　東部環境工場長補佐　折田　豊生
熊本県立教育センター　指導主事　白濱　裕
住友電気工業㈱　生産技術部　布瀬　雅義
山口県立下松高校　教諭　寶邉矢太郎
日章工業㈱　代表取締役社長　藤新　成信
㈱中央塩ビ製作所　取締役会長　星野　貢
舞岡八幡宮　宮司　關　正臣
元・佐賀県立佐賀商業高校　教諭　末次　祐司
元・サンデン交通㈱　取締役　加藤　善之
㈱経営管理センター福岡本部　代表取締役　稲田　健二
乃木神社　宮司　松吉　宣和
楠田幹人事務所　楠田　幹人
新潟工科大学　工学部建築学科　教授　大岡　弘
神奈川県立小田原城内高校（定時制）教諭　原川　猛雄
国立病院九州医療センター　臨床研究部長　小柳　左門
富士通㈱　パートナー支援統括部課長　浜田　實
戸田建設㈱　東京支店開発営業部開発課長　青山　直幸
福岡県立太宰府高校　教諭　占部　賢志
北海道立札幌西陵高校　教諭　本田　格
鹿児島県信用保証協会　業務部業務一課　野間口俊行
防衛庁　調達実施本部長崎支部　鎹　信弘
鹿児島信用金庫　融資管理部　月野木勝彦
大牟田市立勝立中学校　教諭　西原　正博
鳥栖市役所　経済部農林課　西山　八郎
久留米大学附設高校　教諭　名和　長泰
北九州市立医療センター　放射線科技師　森田　仁士
鹿児島信用金庫　融資管理部　神野　辰郎
福岡県立筑紫高校　教諭　黒岩　真一
福岡市立大原小学校　事務主査　奈田　明憲
広島防衛施設局　施設部施設企画課　課長　山根　清
浜の町病院　内科　安藤　洋志
㈱日立製作所　計測技術研究センター　松井　哲也
熊本製粉㈱　住宅事業本部　吉村　浩之
福岡県立久留米高校　教諭　與島　誠央

鹿児島市役所　都市再開発課
神奈川県立厚木東高校　教諭
熊本市立西原中学校　教諭
㈱日本教文社　第二編集部
熊本地方法務局　大津出張所
愛媛県保健福祉部同和対策課
熊本県立宇土高校　教諭
さわらび塾　塾長
福岡県労働局総務部労働保険徴収課
㈱ＲＫＫコンピューターサービス
久留米高等専門学校
大蔵省九州財務局主計一課
熊本県天草郡松島町立今津小学校　教諭
日本会議　事務総局
日本青年協議会
日本青年協議会
京都大学理学研究科研修生
熊本市役所　建設局管理部監理課
公務員
アサヒ飲料㈱
ギャラリー喫茶はえゆ
三菱自動車㈱
㈱フォーネット社　記者
岡山県立精研高校　講師

有村　浩明
大日方　学
山方富美子
坂本　芳明
徳田　恒稔
鳥生　秀雄
久保田　真
北村　公一
古川　広治
寺岡　伸純
高藤　誠
山下　哲也
宮田　正男
茅野　輝章
松岡　篤志
大葉勢清英
濱地賢太郎
濱口　知久
喜多村　純
澤部　和道
星野有佳子
山口　花子
小島　尚貴
横畑　雄基

合宿運営本部
中島　繁樹・山口　秀範・折田　豊生
輿島　誠央

指揮班
古川　広治・鳥生　秀雄・北村　公一
濱地賢太郎・吉村　浩之・寺岡　伸純

事務局
宮田　正男・高藤　誠
奥冨　修一・原川　猛雄・濱口　知久
坂本　芳明・亀井　正弘・鈴木　優子
福岡県鎮西敬愛高校二年　長畑　嘉宏
熊本県真和高校二年　松永　康彦
宮崎県立日向高校二年　竹下　文雄

放送・記録班
森田　仁士・徳田　恒稔

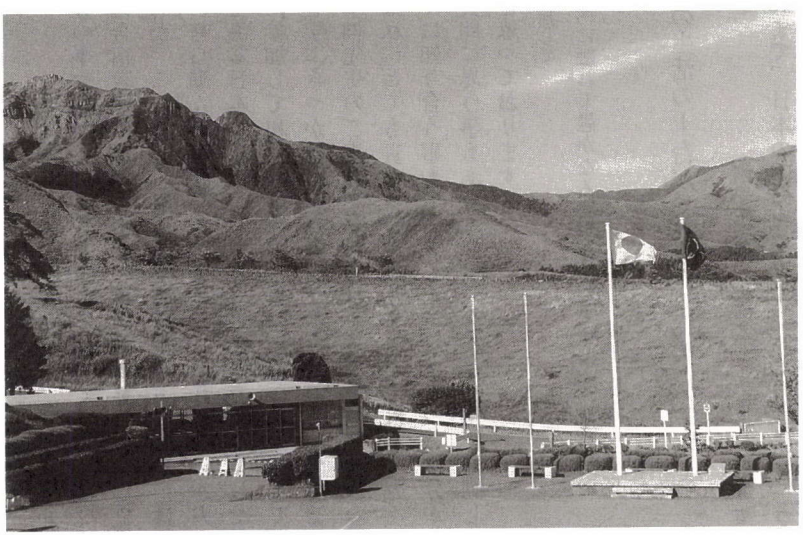
医務班
安藤　洋志・小柳　左門

写真班
中尾　国博

走り書きの〝感想文集〟

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第三回目のものです。



第一班―男子学生―

心の底から楽しいと思えた

（東京大学　文Ⅲ　二年　石村善之亮）

昨年の御殿場合宿は、人の勧めでの参加だったが、そのときの合宿教室での貴重な体験や感動が、今回参加への原動力になった。

四日目の、山内先生のご講義では、太古の昔から連綿と続く、天皇陛下の「祈り」について学んだ。その後のビデオの中で、皇后陛下の御言葉として語られていた、

「私共皇室の役割は、精神的に献身するものが多いと思はれます。」

という箇所は、「祈り」というものの本質を端的に言い表しているものとしてとらえる事ができた。

本合宿は、心の底から楽しいと思えるものだった。日本というものの理解を深めていくためにも、ずっと参加し続けたい。

みともらと共に学びし五日間短くもあり長くもありて
この五日思ひ起こせば様々な出来事ありてよき思ひ出となる

日本の文化を学ぶきっかけができた

（亜細亜大学　国際関係学部　一年　大橋広和）

私は自分の事を愛国心のある人間だと思ってきました。しかし、この合宿教室に参加してその事に疑問を持たざるを得ませんでした。これまでの私は時事問題や日本の歴史には興味があり、自ら進んで勉強していました。けれども日本人の精神の源である日本文化については全く無知でありました。この合宿に参加して和歌の創作、古典の講義などを通して日本の文化を学ぶきっかけとなる事ができたので良かったです。

また、小柳先生のご講義で学問に対する姿勢というものが学べたのは私にとても貴重な糧となりました。班員の方々や様々な方々に知り合う事もできました。私にとっては分からない事や疑問に思う事もあったので、合宿後も学問に勤しまなければと思っております。

合宿に参加して
新しき教へに触れて愚かなる我が考へのくつがへりたり

今後の生活の土台ができた

（国學院大学　法学部　一年　古川貫祐）

私はこれまで、日本の国の在り方について自分なりに考えてはいましたが、ただ漠然と自分の頭の中にあるだけで、それを文章や言葉で人に伝えるという事になると今一つ上手く

考えをまとめて述べるという事ができないでいました。

この合宿教室には初めての参加でしたが、多くの先生方の御講義を拝聴させて頂き、また同じ歳の学生同士や先輩方との語り合いの中で、様々な考え方を聞く機会ができました。そして自分としての考えも、漠然としたものから少しずつまとまってきた様に感じます。この合宿教室は今後の生活の上で、自分や自分の国を考えていく土台となるものを与えてくれました。

この合宿に参加された方々と出会えた事に感謝します。

合宿の最終日を迎へて

今思ふ時の流るるが早かりとそは我が糧となるが証しと

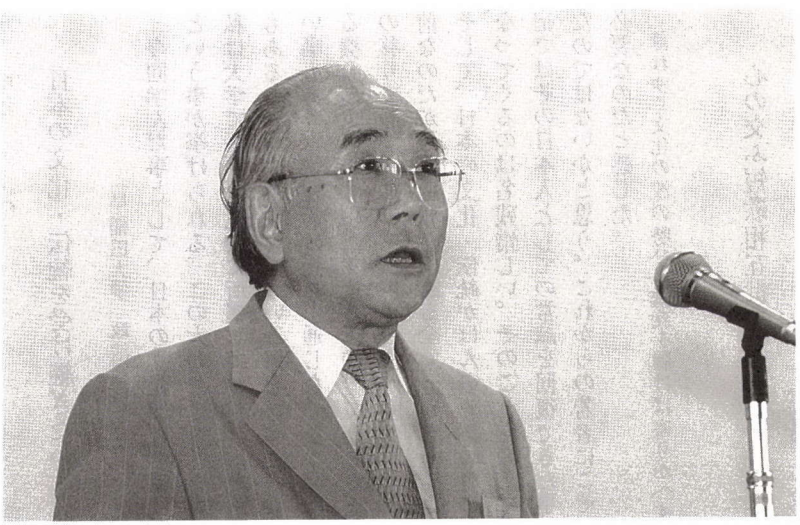
父に感謝

（芝浦工業大学　工学部　一年　安東克明）

私がこの合宿教室に参加したのは、父から勧められてきたという形でした。最初は和歌が詠めるかなどと不安ばかりが募っておりましたが、実際合宿が始まり、皆と学び、さらには語り合う事により、心強い連帯感が生まれました。決して一人ではできない体験であり、仲間の大切さを心から感じました。合宿に参加する前の不安は消え、今はこの合宿を勧めてくれた父に感謝しております。

私が大学生になった時、父は私に大学生活中にすべき事として三つのことをあげました。『旅をする事・親友を作る事・本を読む事』です。この事を合宿で感じてほしかったのかな

カメラ・レポート1



開会式。主催者を代表して、㈳国民文化研究会理事長・上村和男先生が「命を懸けて祖国を支へてこられた方々の意志を継ぐ決意を固めることが、人生の第一歩ではないか」と挨拶された。

と今、合宿を振り返り思っています。しかし合宿はこれで終わりではなく始まりだと思います。この合宿は私たちに道標を与えて下さったのだと思っています。この五日間で感じた疑問をどんなに時間を掛けても自分のものとし、自己の基礎となる思想を育てていきたいと思っています。

夜の集ひにてキャンプファイヤーを囲み
阿蘇の夜に同志立ちたり火を受けて燃ゆるが如く前に進まん

三度目で気付いた合宿の楽しさ

（慶應義塾大学　商学部　四年　斎藤一佐）

三度目の合宿参加にして初めて、「参加して良かった」と思う事ができました。私は、事前合宿から参加しましたが、與島先生をお囲みして、皆で十七条憲法の輪読を行いました。その場で、一昨年の合宿で出合った友人と旧交を暖められました。また短歌創作・相互批評を皆で真剣に行えた事も一つだと思います。私の大学生活を振り返った時、一年の時にこの合宿に参加した事が契機となり、人間関係が幅広くなった事が、学生生活の大きな柱になっていたんだと確信できました。年次の若い学生の皆さんには、この合宿を契機として広い交友関係を築き、大学生活を充実させる一つにしていってほしいと思います。私は、学生生活残り僅かですが、出会った友人との交流を深め、充実した生活を送ろうと思います。

緊張し思ひ述べたる心地は思ひの他に晴れわたるなり
先人の思ひに触れし各講義今も通ずと強く思はる

日本の文化・伝統を受け継ぎたい

（早稲田大学　政治経済学部　一年　伊藤大二郎）

今回学んだ事として、日本の文化伝統を受け継いでいこう、という事が挙げられる。この大切さは意外な所でも感じた。私は大学で落語研究会に所属しており、古典落語を演じる事もあるのだが、解説を見ないと何を言っているのか分からない噺もあり、現在では意味が通じなくなったため、演じられる機会の少ないものがある事を知って悲しさを覚えた。時代の移り変わりにより、風俗・習慣が変化していくのは当たり前なのだが、昔通じた常識も全く分からなくなりつつある。そして、日本の文化・伝統がほんの一部の者にしか扱えなくなってくるのは名残惜しい。そのことを考えても、今回の合宿ではその日本人としての常識を回復できた事に意義があったのではないかと思う。これからの若者にこそ、この合宿は必要なのだと感じた。

薄れゆく文化の波の勢ひも講義を聴けば盛りかへす思ひ

心の交ふ短歌相互批評

（岡山県立精研高等学校講師　横畑雄基）

過去二回の参加と違ひ、今回はＯＢとしての参加であった。

学生の気持ちを汲み取る立場であるはずの私は、一班七名の班長として合宿を迎へた。しかし一年生が多く、班別討論でもなかなか会話が弾まず不安になってしまった。だが逆に、一年生同士が仲良く語り合ってくれたおかげで、お互ひが徐々に打ち解けてくると、その不安も解消してしまった。

特に短歌相互批評では、一人の短歌に向き合ひ、その人の言葉や感動を受け止めたのだが、班員皆のそのまなざしの真剣さは、班長としてでなく、その場にゐた仲間として驚いた。そして、ある言葉を見出だす事ができた時の感嘆の声と同時にわき出る皆の笑顔により、つひには班員の心も一つになったと確信した。先人が折々に詠まれた短歌を偲んでゆけば、私たち日本国民も必ずや心を一つにできると思った。

先人の言葉しのべば自づから心通ひて和む心地す
班員と正大寮で共にまた国柄深く考へゆきたし

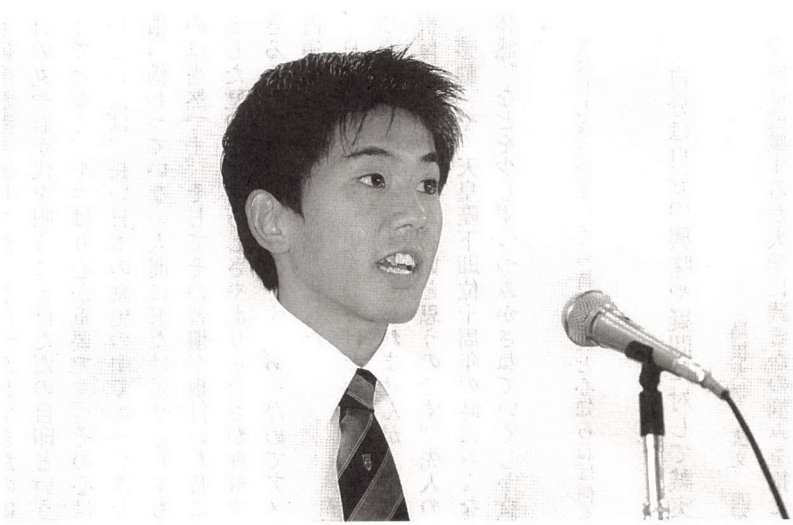
第二班—男子学生—

「学校名を取り除いた私」と議論して頂いた

（東京大学　教養　一年　坂口　洸）

私はこの合宿に、様々な友人を作りたいという思いと、何か一つでも学びとろうという思いを持って参加した。

まず私は、「東大」ということで、大学以外の友達から羨望のまなざしを受ける。まるで私は別世界の住人の様な扱い



参加学生を代表して、福岡教育大学教育学部３年・小林国平君が、「共に学び共に語り会ふ喜びをこの合宿で感じて欲しい」と参加者に呼びかけた。

をされる。しかし班員の方は、「学校名を取り除いた私」と議論して下さるので感銘を受けた。

次に、東中野先生の講義をお聞きして、歴史とは実証によって裏づけられた学問であると感じた。そこで私が自分に課したことは、書物に記されたことを自分で納得のいくまで検証してみる、ということだ。「この本にはこう載っているが、この本の出典となった史料を読んでも同じことがいえるか」と常に思い、史料の確かさを考慮して検証することだろう。

合宿を終えて日本を愛せるようになった。合宿を企画された国文研の方々に感謝している。

神代より幾千歳(いくせんざい)も連なりし歴史持ちたる日本愛さむ

受けつがれてきた心が重要

（立教大学　観光　二年　山本享央）

日本人なら君が代、日の丸は当たり前と思っていましたし、そういう人に反対もしませんし、むしろ賛成します。でも今回の合宿を通して僕自身は反発を覚えるようになりました。実際はどうかわかりませんが、表面的には日の丸をかかげたり君が代を唄ったりすることに反対する風潮が強いように思います。この合宿で朝の集いなどで行うことはそういう風潮に反発するため、意地になってやっているような気がしてならなかったのです。自然と、習慣としてそうされている方には失礼ですが、僕にはわざとらしく見えて、むしろ嫌気がさしました。その答えとして僕が見い出したのは、講義の中でも何度か聞きましたが、受けつがれてきたのは心なのです。日の丸や君が代を唄うことはただの目印というか、大事なことではなく、やっぱり心が重要です。その心はどこから来るかといえば、長い日本の歴史の中で培ってきた習慣です。習慣の備わっていない人間に形だけ見せられても理解できないのは当然です。そしてその習慣が根付いた時こそ日本の連綿とした歴史やすばらしさやありがたさが理解でき、実行もできるようになると思うのです。あらためてアメリカの行った占領政策のデカさを感じました。

日本がもう一度歴史をつなげたいと思うなら、今までと同じくらい時間がかかるかもしれませんが、そうやって習慣を根付かせていくしかないと思うのです。先人の行いに対する〝感動〟や、天皇陛下即位十周年の時にみんなが感じた〝一体感〟などを少しずつつみかさねていくしかないと思うのです。

すばらしき文化をいくら持ちたれど心知らねば何もわからじ

自分は自分の興味や疑問に対して誠実であったか

（島根大学　法文　四年　那須　参）

今回は就職するか大学に残るかの悩みを抱えての参加だった。私はこの合宿で自分の進路を決定するにあたってより正確に自分の心を見定めていきたいとの思いがあった。合宿で

は東中野修道先生の学問に対する誠実な姿勢に心打たれた。自らの疑問、関心などの心のゆらぎをないがしろにせず、真向かっていくお姿に、進路について考える時の自分の在り方を省みさせられ、自分は自分が培ってきた興味や疑問に対して誠実であったかということを考えさせられた。あと、班員の皆と進路や大学で何を学ぶかについて話をしたことが心に残った。互いが思うことをうちつけに語り合うことが出来たことで、例えその場で自分の在り方を決定づけることはないにしても、随分と心に余裕を持つことが出来た。

この合宿において、必ずしも将来どの進路を選ぶか心が整理されなかったけれども、良い合宿であったと思う。

東中野修道先生の講義

自らの思はれしことひとすぢに見定めゆかれし御姿尊し

「反日的」と思われるのは心外

（帝京大学　経済　四年　河見仁朗）

私は昔日本が好きになれませんでした。そして私の宗教は創価学会です。大学の先輩に知り合った機会で、こういった合宿に参加することとなりました。先輩のおかげで私の視野が広がったことについては感謝しています。ただ私の宗教のことがひっかかっているのかどうかは存じませんが、未だに冗談めかしてはいますが、「反日的」と言われます。私は、国文研の良さや、日本の良さを少なくとも今は理解している

カメラ・レポート3

オリエンテーション。合宿指揮班長の福岡県労働局総務部労働保険徴収課・古川広治氏から合宿生活を送る上での諸注意につき説明がなされた。

つもりです。そうでなければ合宿には来ません。おそらく私の宗教が先輩にそう思わせているのかも知れません。ですが、だからと言って私を「反日的」と思われるのは、はっきり言って心外です。もしも、国文研の主旨として創価学会が反日的だと仰るのでしたら、私としては残念である、としか言いようがありません。私としては日本の良さを知ろうとする気持ちに偽りはありません。どうかそこだけは是非ともご理解いただきたいと思います。

短歌相互批評

我がために多くの時が費やされ班の友らにすまなく思ふ

スタートラインに立てたことがとても嬉しい

（早稲田大学　政経　五年　伊藤俊介）

今年は私にとって学生時代最後となる合宿であり、また三度目の班長といふことで、自分にとって納得のいくものにしたいとの思ひがあった。今までは講義の内容について行くのが精一杯であったり、無理に「班長らしく」しようと意気込みすぎたりして、合宿後には後悔することばかりであったからだ。そこで今回、私は形にこだはらずに今の自分にできることをすることにした。講義をきちんと聞き、班別研修では自分の思ふことを班長としてでなく自分が感じたままに素直に言ってみた。また一方で、班運営では自分のすべき役目を決めてそれを果たし、心の届かぬ所は班員を信頼して任せ、班付の先生には謙虚に助けを求めることにした。

結果として、合宿を終へる今、体は疲れきってゐるのに、やりとげたといふ思ひで胸が軽々とした気分だ。人から見れば当然至らぬ所は多々あったと思ふ。今できないことは明日からの課題であり、今度はその課題に全力で当たる。それをこの先ずっと続けて行く。そのスタートラインに立てたことが今はとても嬉しい。私を助けてくれた諸先輩、そして友達のみんな、本当にありがたうございました。

学生時代最後の合宿

今年こそ素直な心で合宿をつとめあげむと心に決める
素直なる心をつくし班友と語りあへるは楽しかりけり
みづからのなすべきつとめ励みをれば合宿もはや最終日かな
力足りぬ我を助けくれし先輩と班友の支へありがたく思ふ

心が感じてわかるやうになるのは相当難しい

（亜細亜大学　大学院　法　一年　清田直紀）

昨年に続いて二回目の参加で、前回とは異なった感想を抱いてゐます。昨年はとにかく無我夢中で様々なご講義にとにかく感心し驚かされるだけでした。しかし、今年はただ驚くだけではなく、もう少し深く日本の伝統・歴史、そして短歌創作に取り組むことができました。そのことによって思はされたのは、「日本の伝統・歴史」などを表面的な知識としてのみ理解するのではなく、心が感じてそれらがわかるやうに

なるのは相当難しいのではないだらうかといふものでした。
確かに歴史・伝統を学び短歌を詠むことはしてゐます。しかし、それだけをするのでなく、心を籠め、想ひを寄せ、偲んでいくことをしなければ本当に学び・詠むといふことにはならないだらうと思ひました。
これからは表面的な知識だけではなく、心を働かせて、日本の歴史・伝統・短歌に触れていきたいと思ひ、自分で出来ることをしっかりと見つめて学んでいかうと思ひました。

自らの心をよせて我が国の歴史と伝統学んでゆきたし

日本とは何かという問いを持てた

（大正大学　大学院　文　二年　青野英海）

この合宿で得たものは、日本とは何かという問いを持てたことである。まさしく「日本への回帰」である。国家に対する思いはおぼろげながら持っていたが、それを学校であからさまにしては大変なことになるのでストレスを感じていた。だが昨年の合宿で「来年も行きたい」と思うほどの感動を受け、事実今年来た。
合宿でできた友達も貴重なものである。その中でとりわけ仲がいい人は横畑雄基君で、よく正大寮に遊びに行った。そこでまた新たな出会いがあり、僕にとって正大寮は出会いと学びの場となった。

この度の合宿に参加し新たなる発見ありて嬉しかりけり

合宿導入講義。住友電気工業㈱生産技術部生産システム部長・布瀬雅義氏は「我々はどういふ歴史を歩んできた国民で、どういふ理想を持って、何をするのかといふ知恵を皆さんに持って頂くことが私の願ひである」と訴へられた。

十七条憲法の真意にまだまだ迫りきれない

（国文研　㈱日立製作所勤務　松井哲也）

第二班の班付として合宿に参加した。第二班は、合宿の早い段階から素直な言葉で語ってくれる班員諸兄が多く、おほむね充実した語らひができたと思ふ。ただ、逆に合宿の流れに反する意見があまり出てこなかった点が若干気になる。（さういふ言葉をむしろ待ってゐたのだが）

合宿内容の中で特に心に残ったことは、東中野先生の南京問題に取り組まれた勇敢さ、真摯さであり、また、十七条憲法の言葉の深さであった。十七条憲法は何度も読んできた言葉であるが、十条の「我獨り得たりと雖も、衆に從ひて同じく擧へ」との御言葉の真意にまだまだ迫りきれない思ひがした。十七条憲法を含めた聖徳太子の研究は、私の学問の大きなテーマとして取り組んでいきたいと心を新たにした。

十七条憲法輪読

憲法の御言葉の意に迫らんとおのもおのもが思ひ語りぬ
迫らんとすれども未だ迫り切れぬ思ひするかなこの御言葉は
御言葉にこもれる深きみ思ひに迫りゆきたし心晴るるまで

第三班―男子学生―

歴史を〝見る〟ことから〝感じる〟ことへ変わった

（愛媛大学　工　一年　森垣愼治）

私は今回初めてこの合宿に参加し、自分の中で最も大きく変わったことは歴史の見方だった。というよりも歴史を見るということから〝感じる〟ということに変わった。日頃、時間があれば歴史についての本を読んだりしていたので歴史はある程度知っていた。そして御講義を受けた後は単に歴史への知識がまた増えたかとしか思っていなかった。それは、自分一人で歴史を学ぶいつもの態度と同じだった。

しかし、その後の班別研修で、班員皆で講義の内容について話し合ったときに自分の姿勢が全く間違っていることを痛感した。自分は当時の人がどのような考え、思いから行動したのか、を見ていなかった。歴史を生きたものとして感じていなかった。ユダヤ人を救った杉原千畝も単に良い人としか思っていなかった。そこに日本の建国の詔から延々として続く思想があることを考えもしなかった。今度の合宿で歴史を学ぶ上での最も大切なことを学んだ。

歴史への思ひ深まるその度に日本に生まれしうれしさ深まる

「ああ、僕は日本人で良かった」

（福岡教育大学　教育　一年　石山靖哲）

初めての参加でしたが、改めて、「ああ、僕は日本人で良かった」と思えました。日本人として代々受け継がれてきた「道理」「神話」「精神」。これは他の地域とは異なる日本独自のものであり、先人達はその精神を守って日本の国を思い守ってきたこと。

今の日本人にはこの精神が欠けているという現実に、僕はどうすればいいのか。やはり聖徳太子十七条憲法の一条「和を以って貴しと為す」の気持ちであるのだと思います。

これからその気持ちを忘れず、日本人として生きていこうと思います。

太子様は反発する心をも認めて十七条憲法を作られた

（明星大学　人文　二年　久田広光）

十七条憲法の「一に曰く、和を以って貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と為す」という言葉の解釈について、小柳先生は、人は和を貴しとしているが、どうしても反発する心が生まれる傾向がある。この傾向をしっかり認めながらも、和を貴しとしようではないかと言われている、と指摘されました。私はその言葉で、自分の今までの体験を振りかえりました。私

カメラ・レポート5

朝の集ひ。「青年の家」を利用してゐる他の団体と共に、国旗掲揚を行ひ体操をして一日の研修が始まる。

は、先輩や、学友、身近な人に対し、反発・逆らう心が生じた時、この様な感情が起こるようではまだまだ駄目な人間だなあと、自分の心をしっかりと認めず、真向かおうとしていませんでした。しかし、太子様は、私のこの様な心をも認めて、十七条憲法を作られていると思うと、本当にうれしかったです。

聖徳太子の言葉の力強さ、リズムに感動を覚えた

（同志社大学　法　二年　石井一賢）

憲法十七条の輪読がこの合宿中で最も良かった。輪読では、第一条をみんなで深め、そこで思うところが三点あった。

「一に曰く、和を以って貴しと為し、忤ふこと無きを宗と為す」と書かれている。決して「宗とせよ」とは述べられていない。私は法学部生であり、憲法を学んでいるが、憲法では、「～であるべきである」「～してはいけない」と断定調で書かれているのに対して、非常な違いを感じた。また、「人皆黨あり、亦達れる者少なし」と人間の心のあるがままの姿をお認めになり現実を認識した上で、そこから人間の心の弱い面を乗り越えていこうとされるご姿勢、そして「何事か成らざらむ」との言葉のもつ力強さ、以上三点が大変印象的であった。

これらのことは決して最初から感じとったことではない。班別輪読で深めていく中で感じてきたことである。心を寄せ続けていくと、こうも違った言葉の響きが実感できるのかと思い、太子の心がそのままに伝わってくる言葉の力強さ、言葉のリズムに感動を覚えた。

小掘先生の御講義の中で、日本の国柄は、自らを超えたもの、自分の利害にかかわりなく自分を生かしたもうているものを敬い、感謝するところにあると言われた。自分が自然や祖先に生かされて生きているとの思いが連綿と続いてきたことが日本の国柄であることがわかった。しかし、私はもう一つ日本の国柄があると思われた。それは言葉の言霊の力である。十七条憲法の輪読を通して、最初は全く感じとれなかった、太子の思い、言葉のリズムが実感でき、その言葉の中にこめられている言霊の力を感じた。この言葉が二千年の時空を越えて我々の心をうつことに日本語の一語一語の重みを感じた。

小柳陽太郎先生の御講義について詠める

学生に伝へむとして講義のばし師は力強く語りたまふも

「歴史」という言葉に様々な喜怒哀楽が込められていることを感じた

（佐賀大学　理工　二年　片岡正憲）

今回の合宿で、心に残ったのは、寶邉正久先生に入って戴いた短歌相互批評において、厳しい御指摘を受けて、いかに自分は小さいところまで感動を見つめていなかったか気づか

されたことです。そのときに正久先生が「かわいそうだ」とおっしゃられた言葉がどういうことなのかわからなかったのですが、陛下のお言葉をお聞きしてわかったような気がします。

それは、「過去に幾多の困難や障壁を乗り越えてきた日本の歴史を思い起こし国民一人一人の叡智と国際社会の協力により、これらの困難が立派に克服されていくことを信じています」という御言葉です。講義にもあったとおり、負けて強くなった日本、アイデンティティークライシスから日本の国柄とはいかなるものなのかを見つめてきた日本、神話のころから続く歴史を身に体しつつ相手の苦しみ悲しみを感じて連綿と続いてきた日本を、自らの内に刻むことで困難が立派に克服されることを信じていますと言われる中で、「歴史」という言葉にも様々な喜怒哀楽が込められていることを感じました。また「一人一人の叡智」という言葉をお聞きして自分のことも信じて下さっているんだと感じられました。

「きみはよくみていない。かわいそうだ」という御指摘を受け、自分の言葉に喜怒哀楽がこもっておらず、感動したことをしっかり見つめていなかったことに気づかされました。

歴代天皇の御製に感じいりて

国民の一人一人の生活を偲ばれ御製を詠みたまふかも

今上陛下の御言葉を聞きて

日の本の歴史とともに生きられし陛下の御姿みならひゆきたし

二日目の午前、明星大学教授・東京大学名誉教授・小堀桂一郎先生の「国際的視野から見た日本の国柄」と題する講義が行はれた。先生は「現在の諸々の道徳の崩壊現象は、国柄を守るといふことをおろそかにしてきた結果である」と語られた。

悠久の国のいのちにたちかえる内なる敵との戦い

（九州大学　経済　四年　石井英俊）

「国際的視野から見た日本の国柄」では、まず小堀先生のお話で、国体論は幕末ナショナルアイデンティティーの危機の中から危機克服の視座として生まれてきたとあった。合宿を顧みての時間でもあったが、今まさに、日本の国家的危機状況の中で必要なことは、個々別々の問題への対処だけではなく、国柄そのものにまで立ちかえっての議論であると思った。その国柄ということで、私が心に残ったのは、憲法十七条のお話だった。第十条で、「我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく擧へ」とあるが、小柳先生の御言葉で、聖徳太子は「獨り」ということをいましめられたのであり、「相共に」ということを非常に大事にされたのではなかろうか、とあった。大変考えさせられた。今日、さっそく「忿」「瞋」とまではいかなくても、いろいろ思ったりして、わかってないなあと自分自身をかえりみたりしたが、そう思うと「共に是れ凡夫のみ」との御言葉のやさしさというか温かさを感じ、聖徳太子様の深い御心に抱かれているような気持ちがしてきた。

昨日の夜の集いで、寶邉先生が「すすめこの道」の説明で、「戦いというのは、英米のことではなく、悠久の国のいのちにたちかえらむとする、内なる敵との戦いを言うのだ」とおっしゃられたが（歌を歌う時の気持ちが変わりました）、自己をかえりみつつ聖徳太子の御言葉を支えにしていきたいと思いました。

そして、もう一つ、班別討論ででたことだが、山内さんの資料にある皇后陛下の御言葉で、「役割は常に制約を伴い」とあるが、その制約の最たるものが現行憲法ではないか、とあった。まさにその通りだと思う。日本の国柄をあらわさむとする時にそこにたちはだかる最大の壁が憲法である。憲法の問題は本当に考えていかなければならないと思った。

最後に、小柳先生のお歌がとても心に残っています。

悠久の国のいのちにたちかへる外にすべなし国のゆくては

本当にそうだなあと思わされた。二年前の開会の挨拶で述べられた小田村先生の御言葉が、今改めて、深い御心があったのだと思われてきた。小柳先生の連作の最後に「そのみこころをつがでやむべき」とあったが、そのような気持ちを感じさせられました。

古人の豊かな想像力に魂が揺り動かされた

（班付　日本青年協議会　松岡篤志）

大君の遠（とほ）の朝廷（みかど）とあひ通ふ島門（しまと）を見れば神代し思ほゆ

國武先生は、古事記に描かれた島々の生成のくだりを実に生き生きと語られながら、右の柿本人麻呂の歌を紹介された。そしてかう述べられた。「日本の島々は、神の霊がこもった美しい島なんですよ」と。「神の霊がこもった美しい島」とは何と美しい言葉だらう。イザナギ・イザナミの神々から大

八島が生まれたといふいにしへの人の豊かな想像力に魂がゆり動かされる思ひがした。又、慰霊祭の時、満天に輝く星空の下、はるかかなたにうっすらと見える山々がとても神々しく感じられた。まさに神の霊がこもってゐる山なのだと。

昭和天皇御製

大阿蘇は波路はるかにあらはれて山なみうすく霞たなびく

御神前に拝誦されたこの御製を拝しつつ、神の如き大きな視野に立って大八島国をしろしめたまふた昭和天皇のお姿がしのばれ、人麻呂のやうな心ばえが一貫して受け継がれてゐることをしみじみと感じた。

慰霊祭

星うたふ阿蘇の夜空を仰ぎつつ神去りましし大人をしのびぬ

第四班―男子学生―

これからは相手の意見を聞く努力を

（東京農工大学　工　一年　藤波和寛）

今回の合宿で学んだことは多くありましたが、その中の一つについて述べたいと思います。小柳先生の講義を聞き、今までの姿勢ではいけないと思いました。今までは他の人の意見をただ批判するだけで、その人がどのような意味をこめて意見を言ったのかをほとんど考えていなかったのではないかと思いました。

カメラ・レポート7

先生のユーモア溢れる発言に笑ひの渦が起きた講堂。

これからは、相手の意見を聞く時には次のようにしようと思いました。相手の意見を聞き、できるだけ相手の気持ちを考え、相手の意見を理解しようと努力し、どうしても受け入れることができないところがあるならば、そこは自分の信念を貫く。この方法が正しいかは分かりませんが、今後も合宿等に参加し、追求していこうと思います。

小柳先生の講義を聞いて

自らの進むべき道見えてきて努力しようと決意固める

自らの学ぶ姿勢のおろかさを気付きて我も成長する

十七条憲法の十条の言葉が深まった

（熊本大学　教育　三年　米田匡彦）

三日目の東中野先生の南京事件についてのお話しから、事実を見定めて、現在の情報等に惑わされないしっかりとした知識を身に付けることの大切さを学びました。山内先生が「枠をとっぱらってタブーを無くす」ということを言われたように現在にとらわれずに知識を深めていきたく思います。

今回最も深まったところは、小柳陽太郎先生の話された十七条の憲法の十条の言葉でした。輪読の際、自分が腹を立てて怒っても、結局は腹を立てている相手と同じ人間なのだと思い、これまで他人に怒ってきた自らの心を省みさせられました。「誰でも私心を捨て去ることはできない。私心をわずかに押さえて公に尽くす」という言葉を胸にこれからの一日一日を大切にしていきたいと思います。

これまでの我が行ひを顧みつつ進むべき道を求めゆかなむ

心に残った慰霊祭

（長崎大学　教育　四年　益冨孝重）

今回は慰霊祭のことがとても心に残りました。いつもこの合宿で御製拝誦をされていた松吉基順先生がお亡くなりになられていたので、今年は先生のお声をお聞きできないことを残念に思いました。慰霊祭の御製拝誦の折、明治天皇御製に「今も世にあらばと思ふ人をしもこの暁の夢に見しかな」とあり、松吉先生が今、この世にいらっしゃったら、もっとお話しを伺い、いろいろと教えて戴きたかったとしみじみと思われました。「あなたたちのような若い人達と話をできるのはとてもありがたい」と先生が生前、何度もおっしゃっていたことを思いだしました。松吉先生の御霊や合宿教室で教えを戴いた先生方にお応えするためにも、ここで学んだことを伝えていけるように学問に励んでいこうと思います。

斎藤一佐君の発表を聞きて

合宿で小林君や吾に会ふを楽しみに来しとの言葉のうれしき

君と会ひし二年前の合宿で同じ班にて語るを思ひぬ

これからも場所は違へど連絡を取り合ひ仲を深めゆきなむ

學問に対する姿勢を考へさせられた

（九州大学　法　四年　星原大輔）

小堀先生、東中野先生の學問に対する御姿勢が印象に残りました。東中野先生が今回十年に渡って、南京事件の眞實とは何かと徹底して探究されてきたといふことを聞き驚かされました。その中で眞實を見極める力、「ものを觀る目」が強く問はれて来たのではないかと思ひます。そして小堀先生がアイデンティティーの探究が「學問」の根本であることを水戸學の起こりから指摘されました。それが歴史、つまり國柄を見つめることになっていくことを御説明されました。そのアイデンティティーの確立、構築の背後に、「よりよく生きたい」との先人たちの願ひがあったとの指摘にはっとしました。「よりよく生きたい」つまり「より日本人らしくなりたい」といふ氣持ちを忘れずに、日々學んでいきたいと思ひます。

慰霊祭にて

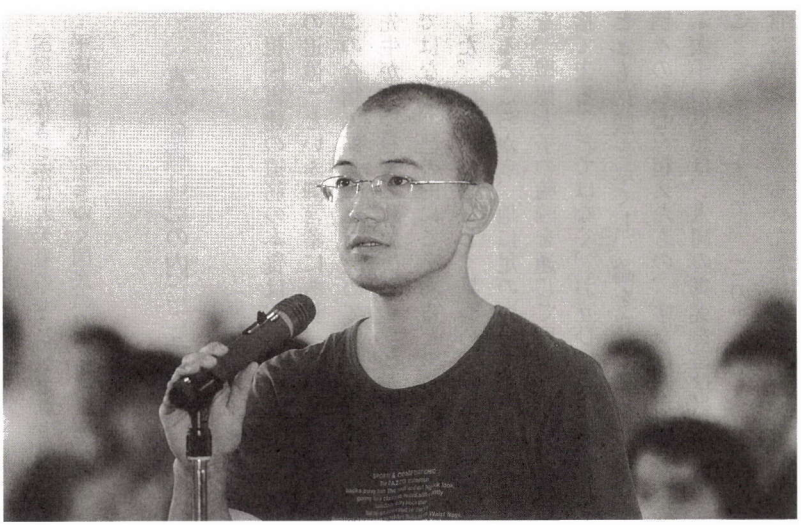
日の暮れていと静かなる草原に警蹕の聲響き渡りぬ
頭たれ聲を聞きつつあまたなるゆきし人の名思はれて来ぬ

上下一つに力を合わせてきたのが日本の国柄

（長崎大学　教育　二年　廣中　渉）

日本の国柄を学んで行く中で印象的だったのは、天皇陛下御即位十年奉祝式典のビデオだった。陛下が被災地に急ぎ見

カメラ・レポート8



質疑応答の一コマ。

舞われる姿に、昭和天皇の「喜びも悲しみも民と共にして…」の御製が思われた。また昭和天皇とマッカーサーの会見に、孝明天皇の「すましえぬ水に吾が身は沈むとも…」の御製が思い起こされた。民と共にあろうとされる姿、日本の危機に身を顧みずに立たれる姿を歴代天皇が示し続けて来られたのは本当に凄いと思った。天皇なくして日本は一つに纏まることなく、国難を打開できなかったであろう。神代より上下一つとなって力を合わせて行こうという心が日本にはある。国民祭典で日本各地から集まった人々が陛下をお祝いする様は一つの日本を彷彿とさせた。

言葉が豊かになれば心が豊かになることを実感した

（崇城大学　工　二年　石橋徳一）

短歌相互批評の時、私達の班に小柳先生が来られ、「言葉が豊かになれば心が豊かになる」とおっしゃった。私達が黙って、自分の心情をありのままに見つめ、三十一文字に表そうとする営みが如何に大切かが感じられた。更に、「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の歌に、三井甲之先生の悠久なる日本を守らんとの思いが偲ばれた。作者の心情をより身近なものとして感じ、心が豊かになったような気がした。私達の目は、日本国憲法や南京問題等の歴史観に拘束され、狭い世界でしか物を見れなくなっている。その狭い世界から解放され、広い視野で物を見るようになることが大切だと思った。

ビデオ『奉祝の灯』を見し折に

国民の体きづかはれ天皇の心こめ下されし御言葉ありがたし
平成の御代を生きゆく国民の君の祈りに連なりゆきたし

真の危機は己の内にこそある

（班付　日本青年協議会　大葉勢清英）

祖国再建の道筋の本質は、小田村先生の「悠久の国家理念の追憶」といふ御言葉にあり、その追憶する力を鍛へるのがこの合宿であることを改めて実感しました。小柳先生や宝辺先生がおっしゃられたごとく、真の日本の危機は外にあるのではなく、己の内にこそあるとのご指摘が強く迫って参りました。己の内心を厳しく見つめ、真実をあるがままに受け入れるところから、地に足のついた力を日本人は得てきたことを、聖徳太子の輪読を通じて思ひました。『和』とは私心を捨て去ることではなく、お互ひに私心あるものなればこそ衆とともに議を尽くし、論を究めることによって、わづかに個々の私心を超えたもの、すなはち事理が実現される」といふ太子の思想は、人間の真実を言ひ当てた生きた思想であることを実感しました。このご姿勢は、「おろかなる身」と、常に自らを省みられた歴代天皇の御姿勢にもつながってゐます。歴代天皇の御歌、また先達の御言葉をもう一度初心に帰り勉強して参りたく存じます。

小柳先生の御講義をお聴きして

朗々と太子のみ文読みたまふ師の声高く響きわたれり
友の心揺さぶるごとく声高く文読みませと師はのたまひぬ
輪読は一人づつ読み間違ひはその場で正すべしと師はのたまひぬ
若きらに太子のみ文伝へむと強く訴ふる師のまごころよ

慰霊祭の折に

夜空にはあまたの星のまたたきて祭りにのぞむこころすがしき
文語なる祭文聞けば厳（おごそ）かな思ひ高まりひきしめらるるも
朗々と御歌詠みたまふ師の君の美しきしらべに心すべらる
天皇（すめらぎ）の御歌を拝する国民の豊けき心呼びさますべし
そがためにまづおのれから祖国（おやくに）の美しき言葉に日々迫るべし

第五班―男子学生―

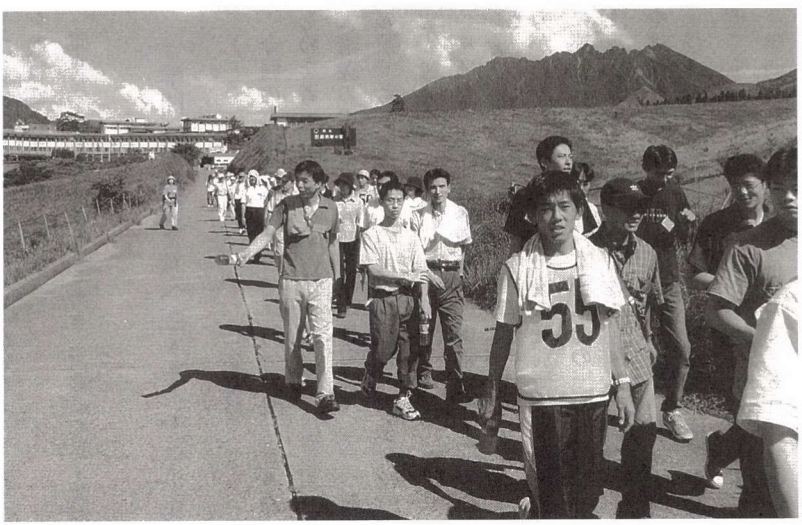
相手を思いやる心、学問に対する態度を学んだ

（神戸大学　国際文化　四年　北村幸一）

この合宿で私が学んだことは大きく分けると二つあります。一つは相手を思いやる心で、もう一つは学問に対する態度でした。

まず、相手を思いやる心についてですが、短歌相互批評の時、「もっと作った人の気持ちを考えて」と班付の茅野さんに言われ、私はこれまで団体生活を経験する機会も少なく、相手の気持ちを深く考えることが非常に少なかったことに気付き

カメラ・レポート9



レクリエーション。大自然の中を歩けば見知らぬどうしの間にも自然と会話が弾む。

ました。短歌相互批評を通して、ただ短歌を作ることのみならず、相手の気持ちをよく考えることをも学ぶことができ、私にとっては、むしろ後者の方が大きな収穫となりました。

また、学問に対する態度ですが、小柳先生が私達の班の班別討論に参加され、「いろんな所でいろんな意見を聞いても、結局何が正しいかわからない。やはり自分でコツコツ文献を読むなりして、事実を追求していくことが学問である」とおっしゃられた言葉が心に残っています。私も日頃から地道に勉強していくよう心掛けてはいますが、安易な道に流されかねない甘さもあります。これからも安易な道に流されてしまっていないか確認しながら、学問に励んでいこうと思います。

閉会式の国家斉唱の折り

合宿を過ごしゆく毎に君が代の声増しゆけり我も友らも

合宿後も努力を重ねていきたい

（亜細亜大学　国際関係　一年　澤田将志）

日本の文化や歴史については、大学の講義で普段習っていることと同じようなことをこの合宿でも学んだが、班員と深夜まで短歌相互批評をする様なことは普段の生活では経験のできない貴重なものであった。

講義や討論の内容はほぼ理解できたが、四泊五日の間にどんなに良い講義で啓発されたり感動しても、普段の生活の中で勉強を積み重ねなければ殆ど意味を成さない。この四泊五日で経験したことを無駄にしないために、日々少しずつ努力を重ねていきたいと思う。

電車にて二日もかけて辿り着きし阿蘇にて思ふ故郷のこと

学問への姿勢を考へ直すきっかけになった

（京都大学　文　二年　服部源憲）

今回の合宿は私にとって学問への取り組み方、姿勢といふものを考へ直すきっかけになったやうに思ふ。布瀬先生が導入講義の中で言はれてゐた「事実を一つ一つ積み重ね、自分の頭で考へること」の大切さと難しさを合宿の中で感じることができた。

中でも、東中野修道先生の御講義をお聞きしたことが印象に残った。東中野先生の御講義は非常に分かりやすく、説得力があった。また、その後の班別研修に先生が入られて我々に述べられた言葉は、本当にその一つ一つに重みがあるやうに感じられた。先生の言葉に重みがあると感じられたのは、やはり先生がこの十年、南京事件といふ一つのことについて一つ一つ着実に事実を検証し、真実を見据ゑようと誠実な態度で取り組んでこられたからではないかと思った。

学問への取り組み方について、もう一つ心に残ったのは、小柳先生がおっしゃってゐた古典に対する姿勢といふことであった。先生がおっしゃってゐたやうに、古来から多くの先

人により大切に読み継がれてきた古典を前にしては、安易な解釈を避け、一語一語を虚心坦懐に丁寧に読むことこそ、古典に対する誠実な態度であると私も思った。

その他、深夜までの和歌の相互批評をしたことなども貴重な体験となった。今回の合宿で感じたことを糧として、今後も己の学問に対する姿勢を磨いていきたい。

学問をすることは楽しい

（亜細亜大学　国際関係　一年　野村　亮）

講義の内容は全てノートにとりましたので、後日復習してもっと掘り下げて勉強していきます。班での活動はどの班よりも一番楽しい班だったと自負しています。この場へ来た目的は学ぶこと、勉強することです。小柳先生のお話をうかがって、自分の目指す学問への道が間違っていないのだと確信することができました。先生の学問への姿勢は東中野先生と同じものであり、自分にはより深い勉強が必要であると感じました。学問することは楽しい。僕は多くの先生方から教えを受けるとともに、先生方の努力に負けぬよう勉強を続けていきます。「学問の大禁忌は作輟（さくてつ）なり」という言葉を胸に、怠らず自分自身を常に見続けて生きていけるよう、がんばりたいと考えています。

講堂に阿蘇の思ひ出つづりたる友は誰しも充実の顔で
師や先輩（とも）の妻子・仕事を置き来るみ国愛する心を思ふ

カメラ・レポート10

レクリエーション。ゴールまでもうあと少し、疲れも忘れ思はずポーズ。

日本は素晴らしい国だ

（九州工業大学　情報工　二年　萬　雄飛）

「きつかった」というのが正直な感想です。講義の内容は難しく、班別討論後も吸収できたのはほんの少しでした。そんな中で私の心に一番残ったのは、大東亜戦争において、日本が占領地台湾に対して行なったことです。欧米は占領地を植民地化し、その土地から搾取するなどしましたが、日本はそれとは逆に、自国の資金の半分を使ってダムを建設し、灌漑設備を整えて穀倉地帯にした。日本はそういう国なのだということを知り、深く感動しました。自分の身を削ってでも人のために尽すということは、とても素晴らしい事だと思います。そのようなことのできる日本人、日本はとても素晴らしい、素敵な国だと思いました。

今後、この合宿で学んだ、何事も偏見なく、多方面から正確に見ていくということを、常に心がけていこうと思います。

この合宿に来て、本当に良かったです！

合宿で心に残ることさはに出で来て文にまとめ難けり

来年はもっと大きくなって参加したい

（近畿大学　九州工　四年　和田周作）

今回初めて合宿教室に参加して、高校の時に軽く流すくらいに学んだ歴史や、成績のために勉強した和歌など、今になってこんなにも意味があったものかと感じます。

まだまだ勉強不足な点を痛感していますが、次回の合宿にも必ず参加したいと感じますし、その時までにはもっと多くの知識と広い価値観を見につけて臨みたいと思いました。まず帰ったら、輪読を皆とやりながら、聖徳太子について学んでいこうと思います。短い合宿でしたが今後の多くの課題が明確に出てきました。来年はもっと大きくなって、合宿教室に臨もうと思います。

あるがままに内なる思ひ表すは意外に深きことと思ひし

天皇陛下と国民の深い絆を確認した

（福岡教育大学　教育　三年　小林国平）

私がこの四泊五日で最も印象に残ったのは、天皇陛下の御即位十年の奉祝式典を記録した「奉祝の灯」のビデオ上映で、昨年の熊本での光景でした。夜、真っ暗な中で天皇皇后両陛下が仲睦まじく提灯を持って宿の窓よりお迎え下さっている姿、また両陛下をお慕い申し上げる多くの方々の提灯が、遠くに揺れている光景を見て、本当に自然と涙が込み上げてきて、鳥肌が立つ思いでした。遠くに見える二つの提灯を、数え切れないほどの提灯が囲み歓迎申し上げている、あの何とも言えない光景は、まさに聖徳太子十七条憲法第一条「…上和ぎ下睦びて」という太子の思いが、目の前で表現されているように私は感じました。合宿を終え実生活に戻ると、やは

り国柄を失いつつある日本という現状を目の当たりにすると思うのですが、それを吹き飛ばす元気を頂いたような気がします。天皇陛下と国民との深い結びつきは今の時代にもしっかり存在して、自分の見えない所で、日本の国柄を受け継いでおられる方は、この日本中にたくさんいるということを確信し、頼もしく思いました。今後帰ってから自らの学問への活力としたいと思います。

十七条憲法を輪読して

太子より学びしことは人としてのつつしむ心決して忘れじ

＊

合宿にて学びしことを師らのごといつか伝へん教師となりて

自分の言葉を磨いていきたい

（日本会議　事務総局　茅野輝章）

班別の短歌相互批評の時間が一番印象に残ってゐる。五班は五人の学生が合宿初参加で、短歌相互批評も夜遅くまでかかってしまった。しかし、班員みな疲れたと思ふが、短歌をとほして友達の感動を正確に理解し、その感動を正確に言葉に表現していくといふことが経験できたと思ふ。班員一人一人が妥協せずに自分の感動を正確に表現した歌ができ、清々しい思ひがした。

合宿が終はり、それぞれの地区、大学に戻って行くわけだが、この合宿で学んだことを深めていって欲しい。特に言葉

カメラ・レポート11

二日目の夜。昭和音楽大学講師・國武忠彦先生による古典輪読導入講義が行はれた。先生はユーモアあふれる語り口で、生き生きと「古事記」の神々の生成のくだりを紹介された。

を大切にするといふこと、読書や先生・友人との話でもその人の思ひを正確に深く理解しようとつとめていって欲しいと思ふ。私も自分の言葉を磨いていきたいと思ってゐる。

班別感想発表を終へて

「ありがたうございました」とふ班員（とも）みなの言葉うれしもつかれ忘るる

ここ阿蘇に共に学びしを胸に刻み共に励まむ離れをりても

第六班―男子学生―

日本人代表の真の国際人になりたい

（米国リンドン・インスティテュート　石村慎悟）

今回、父から日本に命を懸けている方々を見て来いと言われ、この合宿に参加することになった。最初は本当に行くのが嫌で嫌で仕方なかった。そして、自分がそんな中に入ってやっていけるわけないと、最初からあきらめるようなことを思っていたが、自己紹介では感激したことがあった。自分とは全く違うタイプの人達が集い、何故かわからないが胸を熱くさせるような人たちだと感じた。御講義が進むにつれ、理解できる話、そうでない話とあったが、それは自分にとって初めての経験であり、又確実に自分にプラスになっていっていると思わされた。

この合宿で一つ、自分自身に驚いてしまったことがある。それは、特攻隊で戦死された植村さんの遺書を読んだ時である。普通なら涙など流さない私が泣いているのである。多分理由は、様々な事を学んでいくうちに心が清く色々な事を受け入れられる心になっていたからではなかっただろうか。

これから国際人の一人として生きていこうとする私だが、英語を話せるだけで日本の事を知らないでは、ただの国際人である。歴史を深く掘り下げ、そして真実をきちんと認識することが大切だと思う。私は日本人代表の真の国際人になりたい。

古への賢人達の学にふれ事論（あげつら）ひ今宵ふけゆく

日本人に生まれてよかった

（志學館大学　法　一年　近藤将勝）

今までは漠然としてしか知らなかった歴史や古典に触れ、自分の存在はどこに原点があるのか分かり、国民祭典のビデオを見て、我が国にはあらゆる利害を超越した次元でただただ国民の安寧を祈られてゐる陛下の御存在があり、私たちの精神的な支へとなってゐるのだと感じ、本当に私は日本人に生まれてよかったと思はれました。

また、いつも「俺が、俺が」と口にし、じっくり人の話を聴き、相手が何を思ひながら言ったのか考へることはありませんでした。しかし、聖徳太子は「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず」と十七条憲法で言ってをられます。太

子は自らの経験で、人には心があるがため自らの持論に執着し、結果として争ひごとを生むことの愚かさを一番よく分かってをられたのではなかろうかと思はれました。それは、「かうあるべきだ」といふよりは「かうしたら良いのではないですか」と諭されるやうにおっしゃられてゐると感じました。

今回私が恵まれてゐたと思はれるのは、同じ班員の支へでした。十七条憲法を輪読したいと提案しましたら、外村さんをはじめ皆さんが賛同され、眠い目をこすりながらもお付き合ひいただいたことが何よりもうれしく、初めて会った仲とは思へなかったです。私自身にある心の枠を解きほぐしていくのは、正直なところつらいですが、今回の合宿に参加し、少しづつ努力してゆきたいと思ひます。

来年も又参加したいです。

白濱裕先生と出会ひて

阿蘇の地で出会ひし仲間は多かれど憧れし師を見てうれしかりけり

別れを惜しんで

友どちと別るることはつらかれど笑顔を見せて我は手を振る

大変充実した五日間だった

（亜細亜大学　国際関係　一年　寺岡正史）

この合宿で、いかに自分が日本に対して無知であるかとい

カメラ・レポート12

班別研修、御講義の後は各班に戻り、講義のポイントを確かめ合ひながら、感想や疑問を出し合ひ、理解を深めてゆく。

うことを思い知らされたように思います。それまでは日本を他人事のように思っていました。しかし、天皇即位十年のビデオ、特攻隊のプリント、そして初めての体験の慰霊祭を通じて、日本の先人の想いを感じ、今の自分というものを振り返り、多々心を改めるところがありました。そして、なんだか心強い感じを受けました。

多くの先人達の、守るべきもののために散らした命とその想いによって、今自分が生かされているのだと思うと、今までのように自国のことを知らないわけにはいかないなという気持ちでいっぱいです。もし、戦争で亡くなった先人が今の私を見たらどう思われるかと思うと、これからは気を引き締めていかなければならないと感じました。日本の連続した歴史の中に今、私がいるのだなということを実感しました。そして、今まで見えなかった先人あっての豊かな日本が見えてきて、大変充実した五日間だったと思います。

先人の犠牲の上に生きる我歴史を知りて心改む

受け身の勉強をしていた自分に気付いた

（九州大学　医　二年　中島健太郎）

今回の合宿の御講義の中で最も印象に残ったのは、東中野修道先生の御講義でした。先生は大変分かりやすく丁寧で論理的な御講義をされ、感銘を受けました。元来、南京事件がどのような事件で、どんな時代背景のもとに起こったのか、ほとんど知りませんでした。知っていたのは起こった年くらいなものです。中・高と学んできた歴史の勉強の仕方がいかに浅かったのかは、ここでも思い知らされたわけですが、予備知識に邪魔されない分、御講義の内容がいともスムーズに私の中に入ってきました。しかし、いざ班別討論に臨んでみたら、班付の先生から鋭いご指摘を受けました。「先生の言わんとしていたことは、そういうことではないのではないか」と。学問をするに当たって大切なことは、師について教えをあおぐこと、そして自ら興味を持って学びを深めようとする姿勢、この二点だと思います。確かに学習意欲があったからこそ、この合宿に参加したわけですが、まだまだ受け身の勉強をしていた自分に気付きました。過剰な受験教育の弊害と言ってしまえばそれまでですが、大学に入学して一年以上たち、それを打破していたつもりになっていたような気がします。合宿で学んだことは、本当に多岐にわたり充実していました。これらを自分のものとしていくために、これから先も一つ一つじっくりと深めていく努力をしていこうと思います。

緊張し演壇に立つも我が想ひ伝へし後はすがすがしきかな
合宿で学びし事を深めんと決意新たに阿蘇の地を去る
班員と共に過ごしし合宿は楽しきものになりにけるかな
班付の有村先生へ
先生と山道行きつ語りしは楽しかりけりまた語りたし
合宿運営委員長である父へ
一年の苦労を偲び我が父に「お疲れ様」と伝へたきかな

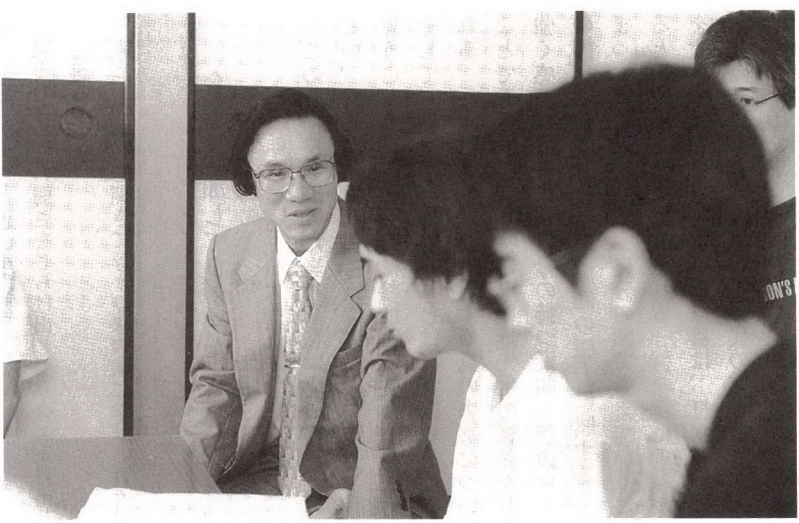
聖徳太子のご姿勢を見る思いがした

（長崎大学　教育　四年　外村聖典）

今回の合宿で最も心に残りましたのは、小柳先生が「外だけでなく心の中にも枠がある」と言われた言葉でした。聖徳太子はそのような人の心の問題をしっかりと見定めて、十七条憲法を作られたように思いました。「人皆黨あり…」という言葉や「人皆心有り…」という言葉に、太子のご姿勢を見る思いがしました。和というものを考えていく中で、それは心の姿勢をも説かれていることがわかってきました。蘇我馬子が天皇の位をおびやかすほどの状況の中で、人の心をしっかりと見つめられ、人と人とが和をなしていく心の姿勢を説かれたことに感動しました。

また、そのような太子の姿勢を、この国文研の先生方はつらぬかれておられるのだと思わされました。長内先生が和歌や手紙を合宿参加者におくられたことや、小田村四郎先生が松吉基順先生を偲んで和歌を詠まれている姿に、和をなしていこうとするお心が感じられてきました。班の中で、「人皆黨あり…」ということと「上和ぎ、下睦びて…」ということとは相反するのではという意見が問題となりましたが、班友のためにその疑問を考えようと、第十条を夜中の十二時から輪読し、皆で頑張ったことが、和というものを示しているように思いました。

カメラ・レポート13



御講義の後、東中野先生は、班別研修に参加されて、学生の疑問に丁寧に答へられた。

夜中十二時に十七条憲法を輪読して
友がため目をこすりつつ輪読をなさんと努むる姿尊し

自分の頭で考える学問に取り組んでゆきたい

（九州工業大学　情報工　四年　桑木康宏）

私の心に強く残ったことは、東中野修道先生の御講義を受けての班別研修での出来事です。私は「先生のお話は理詰めで理解し易く、南京大虐殺が無い事が分かった」という旨の感想を出しました。そして、他の班員もまた順に同じような感想を出してゆきました。みんな同じような感想であったので、盛り上がって話しはじめたところ、班付の有村さんが口を開かれ、問題提起して下さいました。内容は「今日この話を聞いたから、これを信じるの？　最大の問題は、自分で考えなくなってしまったことだと思う」というものでした。私は、このお言葉で目が開かされました。そして、東中野先生のお話を聞いただけで成長したつもりになっていたことが、とても危うい感覚であることを知りました。論理的な話を聞いて分かったつもりになるのだったら、論理的な反対意見を聞いたらまたもとの意見にもどってしまいます。自分の浅はかな考えが恥ずかしくなると同時に、歴史を学んでゆくことを通して、国柄を感覚的に理解できるようになってゆくことの重要性を知りました。この合宿を新たなスタートとして、論理的な話で分かったつもりになる勉強ではなく、もっと歴史の事実にしっかり目を向け、自分の頭で考える学問に取り組んでゆきたいと思います。

腹をわり自分の弱さをさらけ出し語り合ふ友見出しにけり
感想発表にて
友どちの語るを聞きて浮かび来ぬ共に学びし日々のことごと

合宿に参加して良かった

（九州大学大学院　工　修士二年　野口寿人）

この合宿に参加した当初、私は場の慣れない雰囲気にとまどい、辞退しようかと考えていた。しかし、合宿を終えて今思うことは、この合宿に参加して良かったということである。そして、良かったということは、大きく二つのことが挙げられる。一点目は、学問に対する真の姿勢について教えられたことである。これは特に東中野先生の講義をお聞きした時に強く感じたのだが、自分の持つ疑問・課題に対しては今までの偏見や観念を捨て、周囲の圧力に屈することなく真実をまっすぐに受けとめ、自分の頭で考えていくことが大切であると思った。先生が話される一言一言に重みがあったし、胸を大きく揺さぶられた。二点目は、日本という国について真剣に考え語り合っている同年代の友人と出会えたことである。彼らの祖国を思う熱い気持ちが伝わってきたのと同時に多くの刺激を受けたことは、私にとって非常に大きな経験であるように思う。以上のことから、私にとっては充実した合宿で

あった。最後に、この合宿に携わった全ての方々に感謝したいと思う。ありがとうございました。

日の本につきて語らふ友どちの言の葉熱く胸に響く

何物にも代え難い経験であった

（鹿児島市役所　有村浩明）

合宿四日目、十七条憲法の輪読の折には班員が心を合せて太子の御言葉に迫ってゆくことができたと思ふ。人の心の中にある「忤ふ」心を厳然たる事実として見据ゑ、その中でいかにして人と人とが心を通はせ合ふことができるのかといふ切実な問ひを、班員それぞれが太子の御言葉にそひつつ己自身の胸中に発する時間を持つことができたと思ふ。

また、小柳陽太郎先生が輪読導入講義の中でふれられたやうに、「上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ」といふ御言葉を短歌相互批評の経験に即して偲ぶことができた。私心を離れ友の言葉に迫ってゆくことの難しさ、またそれゆゑにこそ心が通じ合った時の喜びが大きいことを自らの経験として学ぶことができたことは、何物にも代え難い経験であったと思ふ。

限られた時間の中で十七条憲法の御言葉を皆で味はふことができたのは、それまでの合宿日程で講義、輪読、短歌創作に班員が一致して真摯に取り組んだ、その積み重ねの成果であると思ふ。よき学友に巡り会へたことを感謝したい。

カメラ・レポート14

久留米大学附設高等学校教諭・名和長泰先生による「創作短歌全体批評」。先生は二百三十五首からなる歌稿のうち約四十首を取り上げ、一首一首丁寧に作者の気持ちを推し量りながら、鑑賞及び批評をしてゆかれた。

閉会式にて

黙祷の静寂の中に草原をわたる風音聞こえきにけり
風音に耳を澄ましつ去年の春逝きましし師の御顔浮かびく
心地よき風の吹きくる丘の上の御宅に伺ひお話聞きぬ
御病ひの御身体おして吾がどちに語りたまへる御姿偲ばゆ
若き日に参加されたる菅平の合宿の思ひ出語りたまひぬ
我が道は菅平合宿に始まりしと語りたまへる御顔忘れじ

第七班—女子学生—

國學院での学びの有難さを知った

（家庭教師　有本和香子）

私は、國のあるべき姿を学びたいと欲し、國學院大学に入学しました。しかし、私の学びの欲求を満たしてくれる教へはなかなか得られず、まわりくどいことばかりを学ばされてゐるやうな気がしてゐました。

しかし、國文研の正大寮での輪読、今回の阿蘇合宿によって、國學院の学びの有難さ、私の想ひをはるかに凌駕する学問の道の大海の如き世界、奥深さに気付くことができました。

國のことを想ひ初めて、心細く迷ひながら歩みを進めた自分の学びの道が、霧のはれたやうにくっきりと確かなものになりました。

これからは、豊かなる全ての恵みに感謝しつつ、学びの道を歩ゆんでゆくことを心に誓ひました。

國學の学びの教へに手をひかれここまで来たる喜びをしる
阿蘇の地で母校の教へ有難く尊かりしをはじめて知れり

皇室の連続の不思議さ

（佐賀大学　教育　四年　橋本さつき）

印象に残っていることの一つは、小堀先生のご講義の後の班別討論で、「先生が〝不思議だ〟〝不思議だ〟とおっしゃられたことが印象的だった」とある人が発言しました。私も先生はなぜそうおっしゃったのだろうと考えました。その時、國武先生が「『古事記』が今でも残っているのは、稗田阿礼と太安万侶の奇跡的な出会いがあったからではないか」とおっしゃいました。私も本当にそうだと思いました。天皇を戴き、連綿と続いてきた日本の歴史は、本当に不思議なことではありますが、これも私たちの祖先が歴代の天皇を中心に一つになって苦難を乗り越えてきたからではないかと思います。ならば、ここで学んだ日本の国柄・国体を私たちが守っていかなければならないと思いました。

『古事記』をじっくり読みたい

（東北女子短期大学　生活　二年　葛西恵美）

今回初めて合宿に参加して、最初は不安でいっぱいでした。

しかし、班員の皆さんと話をしていくなかで皆んなが打ちとけていくことが感じられ、今では別れるのがとてもつらくなっています。

講義内容は、私が今まで学校で学んできた歴史をより深く掘り下げたものや、全く違った視点からの展開がみられとても興味深いものでした。特に私が興味を持ったのは、國武先生の『古事記』です。第一印象が「おもしろい」と感じました。地元に帰り、『古事記』をじっくりと読みたいと思います。最後に、長内俊平先生に直接お会いしご挨拶ができなかったことをお詫びし、また、参加をすすめて下さった大学の理事長今村城太郎先生に感謝申し上げたいと思います。

「日本ていい国だな」と心の底から思えた

（慶応義塾大学　文　二年　山口蝶子）

私が合宿を通して感じたことは、日本の国柄は他のどんな国ともちがうユニークな点があり、またそれを好きになることができたと思う。それは日本を愛するたくさんの先生方のご講義を通して感じた。特に班付の先生のこの国を愛する気持ち、またそれを若い私たちに知ってもらいたいと思う願いは、その話し方やお顔を見ていて、私は「日本ていい国だな」とはじめて心の底から思うことができた。人間は教育者に多大な影響を受けるため、本当に正しい教育を受ける事の大切さを実感した。現在の未成年の異常な行動の原因にも、まち

カメラ・レポート15

班別短歌相互批評。作者の気持ちを確かめながら、歌の表現がより的確になるやう班員皆で心傾けて添削してゆく。

がった教育の影響が考えられる。私は、これからの世界に生きていく人間の一人として、このことを自覚し、人によき影響を与えることのできる人になりたいと強く思った。

国のことあつく語りし師の君に我にも何かできるかと思ふ

教育の荒廃も歴史の喪失か

（東北女子大学　家政　二年　髙嶋純子）

青森から阿蘇の地に来て、大自然のすばらしさに感動しました。参加する前は不安でしたが、班の皆さんや先生方の熱意により、充実した日々を過ごすことができました。

最近、教育の荒廃といわれますが、私はその背景には歴史の喪失があるのではないかと、このセミナーで感じました。将来、教育者をめざす私には、この問題について一から学ぶ必要があると思いました。このセミナーで学んだことを生かし、さらに人間性を高めて行きたいと思います。

合宿で初めて会ひしみ友らと過ぎ来しことを忘れじと思ふ

真の日本人に近づくことができた

（熊本大学　教育　一年　田中彩子）

合宿に参加するまでは大変不安でした。ちゃんと意見が言えるだろうか。しかし、班員の皆さまのお陰で、稚拙な意見であり感想ではありましたが、自分なりの気持ちを話すことができて嬉しく思いました。

合宿参加によって、人と人のふれあい、日本人としての意識の確認、未来への関心など、今までの自分に欠けていた大切な気持ちが芽生えてきました。古典に触れ、歴代天皇の御製に耳を傾け、私は形だけの日本人から真の日本人に近づくことができたように感じます。

この合宿に満足することなく、この合宿からという気持ちで、学問や精神の向上に努めていきたいと思います。

大阿蘇の緑はるかに連らなれりその大きさに立ちつくすなり

日本がどんなに素晴らしい国か

（西南学院大学　法　一年　丸山万紀子）

日程表を見て驚いたのは、短歌創作の数の多さです。苦手な私は、そんなに多く短歌ができるのか心配でした。さらに驚いたことは相互批評でした。短歌は、自分の気持ちを素直に詠めばそれで良いと思っていたので、衝撃を受けました。しかし、実際やってみるとおもしろいものだとわかりました。

合宿に参加して一番良かったのは、やはり先生方の講義を聞けたことです。今まで疑問に思っていたことが解消されたり、真実を知って驚いたり、日本がどんなに素晴らしい国なのかを再認識しました。班員や國武先生と話し合えたことが、私にとって何よりの収穫だったと思います。今後も、自分から積極的に勉強し、日本の素晴らしさを学んでいきたいと思います。

日本の歴史を再認識

（明治大学短大　経済　一年　浜田真理子）

今日、愛国心を失いかけている日本人が多いなか、ご講義の先生方や国文研の皆様の日本を想う気持ちに感動しました。ご講義はもちろん、短歌相互批評のときに班に来て適切な助言をしてくださったり、また國武先生から、慰霊祭の祭壇を作られたり、重いお供えものを運ばれた年輩の方々のお心には、戦争で逝った友人たちのみ霊をご自分の手でお祭りしたいという気持が強くおありのことと思うと伺い、戦後生まれの私は日本の歴史を改めて再確認しなければならないし、すばらしい日本の文化・伝統を消滅させてはならないと強く思いました。

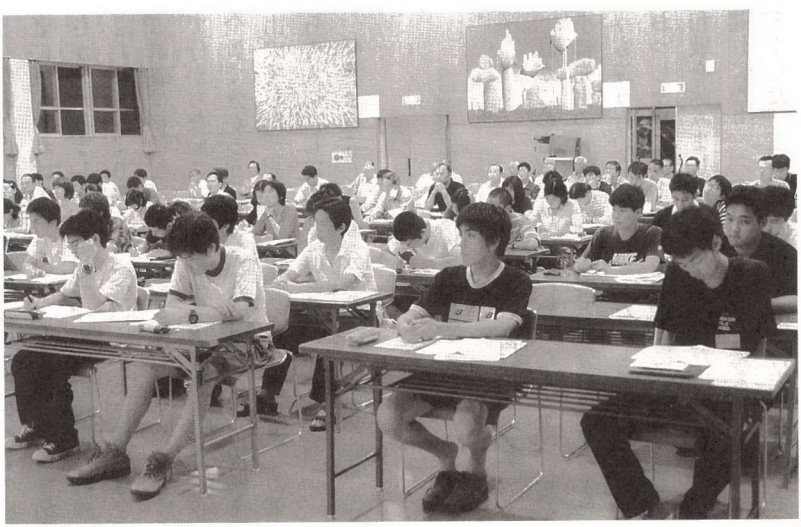
日の本に生まれしことの喜びを学びの道に深めゆきたし

第八班―女子学生―

過去の連続性の中に生きている

（福岡教育大学　教育　四年　相浦佐知子）

私たちは過去の連続性の中に生きているということが心に残りました。山内先生のご講義で歴代天皇の御製が紹介されました。何代も前からの天皇陛下が、国民に思いをいたし、自らの身を省みつつ天皇という立場はどうあるべきかと問い



講義室にて。先生方のご講義に熱心に耳を傾ける。

つづけ、祈り続けてこられたお心を偲ぶことができました。

天皇陛下が常にそのお心を継承されて心を砕かれていることを思うとき、私たちも先人の心や姿を継承すべきであるし、そうしていきたいという思いがより芽生えてきたように思います。導入講義で、布瀬先生は「日本はこれまで様々な危機に対面してきたが、今、一つの国として続いているのは、各時代の日本人が国を一つにまとめよう、独立国家にしようとの気概があったからではないか。」と話されました。私はこの気概をもった日本人になりたいと思いました。先祖、先人が育んでこられたこの国柄に生きていることを自覚し、感謝の念を忘れず、天皇陛下や多くの先人のような気概を培っていきたいと思います。そして、自己の姿から伝えていける教育者になりたいと思います。最後に、先人の願い、日本人としての心を私たちに真に伝えようとして下さった国文研の先生方、そして、共に五日間楽しく学び合ってきた班員の皆さんありがとうございました。

吾もまた日の本守り来し先人の気概うけつぎ師につづきたし

みともらと語り合うごと日一日心近まることぞうれしき

不安だった短歌創作

（福岡女学院短期大学卒　重松佐知子）

私はこの合宿は初めての参加でしたが、いろいろなことを体験できました。特に印象に残ったことは短歌創作です。合宿へ来る前は短歌が創れるかどうかとても不安でした。しかし、短歌とは上手に創ろうとせず、見たもの感じたことを素直に表現すればよいということを知り、短歌創作のおもしろさが分かりました。そして、班別短歌相互批評で自分が創作した和歌がよりよくなっていくことに嬉しさを感じました。ご講義は私にとって、とても難しかったのですが、班別研修で分からないことを班付の先生が助言して下さったり、班員全員で分かろうとするなかで自分なりに理解を深めることが出来ました。そして、親しくなれた友達との思い出はこれからも大切にしていきたいと思います。

仲良しになりし友らと分かり合ひさりゆく時のさびしさ感ず

言葉が生きている和歌

（麻生工科専門学校　建築　一年　小野実里）

私がこの合宿で一番心に残ったことは、短歌相互批評です。小柳先生の御講義で「先輩と自分の〝ものを見る目〟が、こうも違うものなのかと思ったことと思います。」ということをおっしゃっていましたが、本当にそう感じました。私は蝶の和歌を詠みました。最初は一首だけだったのですが、二首の連作になり、一首目に蝶を見た驚き、二首目には蝶の姿を詠みました。二首目の和歌を小田村先生が作って下さいました。小田村先生に作っていただいた和歌は、本当にその時の状況がありありと伝わってくるようで、言葉が生きているように

思いました。これからは、そういう和歌を詠んでみたいと思いました。

また、そういう和歌や古典などにもふれたいと思いました。

小田村先生の作り下さりし和歌にふれ言の葉生きてゐるやうに思ふ

生き方を導く十七条憲法

（中村学園大学　科目等履修生　野口純子）

今回は小柳先生の十七条の憲法の御講義が心に残った。現憲法は武力をなくす事で平和としている。武力がなければよしとし、持つことが悪だと一方的に決めつけている。物質的な価値観だけで判断し、本質的な心の平和は無視しているような気がする。その中で「自分たちは心の中に枠をつくって縛られているのではないか。」との小柳先生の御指摘で、確かに私の中でも思ったことをありのままに語れない自分、諦めてしまう自分、自分自身を規制しているところがある。しかし、太子の十七条の憲法はそういったできない自分、我や私心を捨てきれない自分もありそれを認めつつ乗り越えようとする中で、よりよい生き方ができることを示し導いて下さる憲法だと思った。一条の終わりに「何事か成らざらむ」という強い確信のある言葉「自ら」という本を正していけば自然とよくなっていくという言葉、一つ一つの言葉、調べの中にある確信めいた言葉は人間という限られた知識から生み出された言葉ではなく、人間という枠を超越したものから生ま

カメラ・レポート17

「慰霊祭」。戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げられた方々の御霊を、屋外に設営された祭壇で心を込めてお慰めした。

れる言葉だと思った。信じるというのは限界もなく無限だと思った。その時に、山内先生がおっしゃられた「祈りや願いは無限である」と言われたことが思い出され、それは人間を超え神という無限に通ずるものなのだと思った。以前「神の国」発言が問題になったが、宗教に嫌悪感をもつ人もいると思うが宗教という固定観念で物を見るのではなく、信じること、前向きな思想こそが、たどっていけば神に通じ、日本の国柄にも通ずる道ではないかと思った。

人にある私心も認めつつ必ず成さむと強くのたまふ
限られし思想ある中いかにして神を信ずることの難かし
できないと諦めしことありつつも国柄みつめ信じゆきたし

短歌の素晴らしさと出会いの素晴らしさ

（東北女子短期大学　被服科　二年　工藤康世）

私は初めてこの合宿教室に参加し、何を学ぶのかよく分かりませんでした。先生方のご講義は難しく感じましたが、熱心に、楽しそうに話されるお姿を見て、自国のことを学ばなければならないという思いでいっぱいになりました。学びたいという思いを持てたことを先生方に感謝いたします。

また、私は和歌については、乏しい知識しかもっていませんが、先生方のご講義や、班付の先生方、班員などの助言からその心得、素晴らしさを感じることができ嬉しく思っています。私は青森県からの参加でしたが、全国から集まってこられた皆様と阿蘇という大自然に囲まれ貴重な体験をさせていただいたことを深く感謝いたします。この合宿を勧めて下さり、行かせて下さった今村城太郎先生をはじめ、諸先生方両親に感謝の思いでいっぱいです。初めは青森に帰りたいとただそれだけでした。しかし、私はこの合宿で、人と語り合うことの大切さ、また、人との出会いの素晴らしさを感じました。この合宿を通して感じたことを忘れず、私が理想とする日本人に近づきたいと思います。

五日間ありがとうございました。長内先生にぜひお会いしたかったです。余談ですが、私の大好きな津軽弁の楽しさを少しでもお伝えできたことをうれしく思います。

涙ぬぐふ永遠の別れとは違へども（たが）ほほを伝ひて思ひあふるる

過去があってこその今

（東北女子大学　家政　二年　林　恵美）

私は初めてこの合宿に参加させていただきました。先生方の御講義の内容は難しく全てを理解するということはとうてい無理でした。しかし、どの先生方も日本人、そして日本国について熱く、深く語られているお姿に感動しました。私がこの合宿で先生方の御講義を聞き自分なりに感じたことは、「過去があってこその今、そして未来である。」ということです。『古事記』にしても『十七条の憲法』にしても、私たちの先祖が作り上げたものです。自ら進んで本を読むことを

しなかった自分を恥ずかしく思いました。書物には、私たちの先祖の願い、教えがたくさん詰まっていることを学びました。今後はこの合宿でいただいた資料（『古事記』『十七条の憲法』）を一日五分でも声を出して読みたいと思っています。

その他、短歌創作も私にとって初めての経験でしたのでとても苦労しました。おそらく上手く詠もうという気持ちが先にたってしまい自分の気持ちをそのまま詠むということを忘れていたのかもしれません。しかし、班別相互批評のとき班員の方々が私の気持ちを真剣に聞いて短歌を直して下さり、すばらしい短歌に出来上がったときには、言葉では言い表わせないほどの感動を覚えました。

この合宿に参加し、私は人の意見や話を聞くことにより、一つの物事に対していろいろな方向から考えることができるようになったと感じています。この合宿への参加を勧めてくださった大学の先生方、そして学長である今村城太郎先生に感謝いたしたいと思います。この合宿での友との思い出、先生方の教えを忘れないよう今後もがんばっていきたいと思います。貴重な経験ありがとうございました。

みともらと共に学びし師の教え帰りしのちも吾の中生きむ

日常生活の中に日本人としての認識を

（熊本市立西原中学校　教諭　山方富美子）

今回の合宿の御講義においては、日本人としての認識と自

カメラ・レポート18

四日目の午前。神奈川県立厚木南高校教諭・山内健生先生による講義“太古から一貫する「国の姿」―連綿と続く「祈り」の系譜―”。先生は歴代天皇の御製を次々と読み味はひながら、「祈りと内省が天皇方に継承されてゐます」と感動深く話された。

覚を心に刻みつつ、日常生活に生かすことが大切だということが一貫して感じられました。十七条の憲法をじっくり思索することにより、現代にも十分その精神やめざすところは通じ、精神面の支えであることが自覚できました。また、『古事記』の輪読を通して、文章を皆で一つ一つ読み上げていくことにより、古典の美しい言葉のひびき、文章に対する深い味わいを体験することができました。班員の皆さんとは全国各地から集まった初対面の方々と日を追うごとにうちとけ、班別懇談での深まりが感じられ、大変和やかな気持ちにひたることができました。この合宿で知り合えた方々、合宿を支えて下さった方々に、心より感謝いたします。

全国ゆつどひし友と各々の方言使ひて語らひはずむ

もっと本を読みたい

（山口大学　人文　一年　橋本文絵）

この合宿は、小野吉宣先生に誘われました。高校の時から勉強したい事ばかりの内容だったので、とても楽しみでした。大学では管弦楽団に所属し、ファゴットというマイナーな楽器を吹いています。大学生になったら勉強しようという初心は音楽をしているうちに徐々に薄れていきました。この合宿で考えを取り戻そうと思いました。しかし、直前に私用が重なり本当に行ってもいいのだろうかと迷いました。そのせいか合宿中は全てにおいて集中力がありませんでした。自分でもとても悔しく感じました。仲良くなった班員やお世話になった先生方と別れることは辛いけれど、早く帰りたいという気持ちもあります。これからの私の課題はもっと本を読む事です。

小野先生再会うれし然れども吸収できずにごめんなさい

短歌相互批評の難しさを痛感した

（班付　新潟工科大学教授　大岡　弘）

短歌を添削し合ふ（互に批評し合ふ）ことのむづかしさを痛感した。創った班員の気持ちがわかっても、ピッタリとした言葉が湧き上って来ない。第一回の班別短歌相互批評の時は、小田村先生が来て下さり、懇切ていねいに一人ひとりの短歌を各班員が満足するやうに直して下さった。ありがたかった。

み霊（たま）まつるゆにはさやけし夜空にはあまたの星かげしるく見ゆるも
ひもろぎも笹もとよみぬみ霊（たま）近き気配（けはい）を覚ゆ何とはなしに
みちのくの師の君ゐまさず朗詠を聞きえぬ今日は淋しかりけり
若き日に師の吟じます吟詠をめづらしと聞きしことの偲ばゆ

真剣な姿勢をみんなから教へられた

（班付　三菱自動車工業㈱　山口花子）

三年ぶりの合宿に、初めて班付といふ立場で参加しました。

三日目の体験発表では、日本を誇りに思ふことの大切さを自分の言葉で話したいと思ひながら発表を行ひました。つたない話でしたが、貴重な経験をさせていただき良かったです。

班別研修では、学生の皆さんがお互ひの話を一生懸命聞き、自分の気持ちを言葉にしようとがんばってゐる姿に以前の自分を重ね、なつかしく思ふと同時に、少し忘れかけてゐた勉強に対する真剣な姿勢をみんなから教へてもらふことができました。あまり班付の役目を果たせなかったことを申しわけなく感じると同時に、大学生にもどったやうな気持ちで一緒に楽しませていただいたことに感謝してゐます。

久しぶりに先生方の熱のこもったご講義を聞けたこと、旧友たちと再会し、語り合へたこと等、きりがないですが、この合宿で国文研の良さを再認識できました。

若き友の思ひ伝へむと語る姿に学生のをりの我思ひ出す

体験発表の前

一歩一歩長き通路を進みつつ講義室へ向かふ我が胸高なる

亡き祖母のみ霊よどうか安かれと輝ける天の川見つつ願ふ

第九班—女子学生—

参加できて良かった

（東北女子短期大学　二年　芳賀麻衣子）

今回初めて参加したこの合宿では短歌を創る楽しさを学び

食事風景。各班毎に食事を囲み、おいしい料理に舌つづみを打つ。

ました。短歌を詠むことが今までなかったため、短歌創作の時間は何を詠もうかと悩みました。自分で創った短歌は納得のいかないものでしたが、班別での相互批評で班員の皆さんや先生からご指導いただき、よい歌ができました。また講義は難しく完全に理解することはできませんでしたが今まで学んできた日本についての知識とは別のことだったので、驚きと同時に日本についての知らなさすぎる自分に気づき、知識を深めていくべきと感じました。語り合える友人ともめぐり逢うことができ、この合宿に参加できて本当に良かったと思います。

合宿で学びしことは何事もやればできるといふ心なり

『古事記』が面白かった

（東北女子短期大学　二年　大柳圭子）

短大の先生方に勧められ、内容もよく知らないまま参加しましたがたくさんの御講義を聞くことができて本当に勉強になりました。特に印象に残ったのは『古事記』の御講義でした。私は初めて『古事記』を読みましたがとても内容が面白く先生の解説もわかりやすくて楽しいものでした。その後行われた班別輪読でさらに内容を深めることができ、勉強になりました。これからもっと『古事記』を読んでいこうと思いました。この合宿で自分の勉強不足を改めて感じましたがその分たくさん学ぶことがあったので良かったと思っています。これからは、自分自身が日本人であるということを自覚し、誇りを持って日本の良さをたくさんの人に理解してもらえるよう努力したいと思います。

阿蘇の地で学びしことを胸に抱き日本の心皆に伝へたし

生まれ育った国日本

（亜細亜大学　国際関係　一年　長田里香）

私は高校卒業後十一年間社会に出て働き、この四月から大学で学び始めました。特に中国の問題について興味を持ち、日中関係について勉強しているところです。この合宿へは日本の歴史や文化について学び、日本という国を自分の中に強く刻み込むことにより、日本の立場に立って日中関係また諸外国との関係を学ぶ基礎になるのではないかと期待し参加致しました。五日間の日程を終えて日本という国が私が生まれ育った国だという事を本当に嬉しく感じました。そして祖先への感謝の気持ちを持つことができるようになりました。今まで日本で生きてきたのにもかかわらずこんな大切な思いを持ってこなかったことが情なくも思います。そして諸先生方の日本の良さを継承すべく熱弁をふるって下さったことには大変心打たれました。これから更なる知識を得ねばならぬことを強く思うことができ大変有意義な合宿でした。

子孫に伝える努力をしよう

（加藤絵里）

私は日程表を見て、講義や勉強会と短歌の創作など、異質なものを組み合わせてやるものだなあと不思議に思った。講義の後の班別研修や短歌相互批評は時間がいくらあっても足りなく、講義と短歌創作は別々の合宿をした方がいいような気がするぐらいだ。けれども、なぜ両方するのかおぼろげながらわかった感じがする。人間は感情と理性があって生きているものでどちらかが未熟であれば、人から共感を得られることがないだろう。班別研修の時に数学の先生である方が感情的にしっくりこない論文は論理的に合っていても納得できないという話をされた。日本人としての感性と理論は一生かけても本当はわからないと思うが先祖の思いと考えを理解し、子孫に伝えていく努力はしようと決心した。

大阿蘇に共につどひし友どちと思ひを語り打ち解けにけり

新たな意欲が湧いた

（早稲田大学　一年　多久青奈）

私はこの合宿に参加して特に感じたことが二点あります。まず最初は短歌を創作するにあたって言葉一つ一つの大切さを感じたことです。合宿に参加する前は短歌が作れるか不安でたまらなかった私は短歌ができあがって嬉しさで一杯でし

カメラ・レポート20

国民文化研究会副理事長・元九州造形短期大学教授・小柳陽太郎先生による輪読導入講義「聖徳太子憲法十七条を中心に」。先生は「輪読とは己の心を裸にし、友と心を通はせながら、共に古典の文章に立ち向かっていくことである。先人の言葉を『胸中の温気』で溶かしていかうとする熱い思ひが班室に充満するやうであって欲しい」と述べられた。

た。ですが自分の思いを言葉に表すのは単純なようで難しいものだとも思いました。一つの言葉で少しずつ意味や雰囲気が違ってくるからです。一語一語、言葉の重みを感じました。自分が感じたままを適切な言葉で相手に伝えられるように努めなければならないと感じました。

次に日本の国柄、歴史について考えるきっかけになったということです。「日本の文化を知り、伝えていかなければならない」としばしば聞きますが、そういう時私はしきたりや茶道などの表面的なものしか頭に浮かんできませんでした。しかし合宿の講義を聞いて、日本の古代の人々の思想・歴史をまず知ることが重要で、それを背景として表面的な文化を理解するのがいいのではないかと思いました。また班別研修では班員の人々や国文研の先生方の豊富な知識と体験のお話を多く聞くことができ、大変勉強になりました。

自分がいかに日本について知らないかを改めて感じ、これからの大学生活に新たな意欲が湧きました。

全体感想自由発表のときに

友どちの感想述べる姿見て今日で別れと淋しく思ふ

学問の道筋を示して頂いた

（明星大学　二年　村田奈央子）

今回初めて合宿に参加させて頂いて、四泊五日という長い日程に不安がありましたが無事受講することができてほっとしています。小柳陽太郎先生の御講義の中で「古典を学ぶことでその文章から歴史の命を感じ、自分の日本人としての命が本当の日本人として甦る」という御言葉を聞き、学問の方向に対する道筋を示して頂けたと思いました。今迄古典を勉強しなくてはいけないと思っていながら、何の為に学ぶのかと常に疑問を抱いていました。しかし、古典に込められた御先祖の日本を想う心が受け継がれてきた中、自らも心を働かし、古典を学ぶことで、今迄受けてきた戦後教育の覆いを取り去り、本当の日本人として生まれかわることができ、また生きることができるということが判り、心の底から感動しました。私自身もこれからそのような学びをしていきたいと思いました。そして古典を学ぶ時は作者の心、時代に心を寄せ、古典の前に慎しみを持つことが必要であるという先生の言葉も忘れずにいたいと思います。また導入講義の中で「日本が幾度の敗戦を乗り越える度に相手の良い所を吸収し自立して来たのは、国民の中に神武天皇様の建国の詔の中の建国の理想が生きていたからだ」というお話を聞き、この建国の理想を実現する為に、日本人として生まれてきたことを常に胸中に留めておきたいと思いました。

アイデンティティーとは文化に対する信頼だ

（長崎大学　薬　三年　日高秀子）

今回の合宿で考えさせられたのは日本のナショナルアイデ

ンティティーについてでした。導入講義の資料でペリー書翰の「天理にそむくの至罪」という箇所を見て、天理って何の天理だろう、どんな天理だろうと不思議に思っていました。東中野先生の講義でそれが何なのかわかりました。孫平化の「三〇万虐殺は政治的に決まっている事実だ」というのを聞いて、政治的にという所で、歴史的・学問的でないことに疑問を持ちました。よく考えてみると、政治的とは中国の政治なんだということに気づき、そうするとペリー書翰の天理もアメリカの天理なんだとわかりました。幕末、アメリカの天理を要求された日本は混乱しながらも自らのアイデンティティーを確立して開国していきました。今、中国との情報戦においてもアイデンティティーが必要ではないかと思えてきました。アイデンティティーとは文化に対する信頼だと思います。理論武装と共に日本をもっと知らないといけないなと思いました。

『古事記』を聞かせてあげよう

（ギャラリー喫茶はえゆ　星野有佳子）

今年で六度目の参加になります。毎年合宿に参加する以外何ら勉強もしていませんが、夏が来てこの合宿に参加する度に少しずつ考え方が変わってきました。今年は特に自分の気持ちの変化の大きさに気づかされました。今まで私は合宿で学ぶことが良いことだとは思っていましたが、それについて

「夜の集ひ」。屋外でキャンプファイヤーを囲みながら、班や大学別に楽しい寸劇や歌が次々と披露された。

話をすることを意識的に避けてきました。しかし他の国に誇るべき素晴らしい日本の文化を後世に伝えるのが、今の日本の状態では非常に難しいと気づき、私にも何かできることはないかと思うようになりました。ですから私は合宿から戻ったら、口語訳でも『古事記』を読み、その物語を誰かに聞かせてあげようと決心しました。今の私にはそれくらいしか思いつかないのでとりあえずとりくんでみたいです。

感性を鍛へてくれた短歌相互批評

（班付　戸田建設㈱　青山直幸）

班長の気さくな人格や、社会経験のある方が二人ゐたこともあって、最初からうちとけた雰囲気の中で、合宿生活ができてゐたと思ふ。班別研修では、講義の内容を皆で復習することによって、班員の理解度をできるだけ合はせようとしたのは良かったと思ふ。一人一人が自分なりに講義の中でつかみとったことを率直に語ってくれたと思ふ。『古事記』の班別輪読は本当に楽しかった。班員のほとんどが、『古事記』の原文を読んだのは初めてといふことであったが、明るくのびやかでおほらかな文体にふれて、日本文化の源流を垣間見た喜びに溢れてゐた。短歌創作と相互批評は、初めての人が多かったせゐか時間を要した。自分の思ひを正確に表現することが、いかに難しいか痛感したことであらう。皆で添削をしてやうやく思ふやうな歌ができ、皆が拍手してくれたときの作者の晴れやかな顔が忘れられない。相互批評は本当に〝感性〟を鍛へてくれるものだと痛感した。班付として行き届かなかった点、多々あったことをお詫びしたい。

「天皇陛下御即位十年奉祝式典」ビデオを見て

悲しみや困難に耐へて生きる民の上を思はるる御心畏し
災害にうちひしがれし人々に心を込めて励ましたまふ
めぐまれぬ人々の中にひざまづきやさしく御手をさしのべたまふ
ちゃうちんや小旗打ちふり両陛下迎ふる民の姿たのもし

第十班―社会人―

国文研の役割は大きい

（鹿児島信用金庫　月野木勝彦）

慰霊祭の儀式は、事前の説明で特攻隊員の遺書のお話しも聞いていたので、おごそかで感動いたしました。また、祭文の辞が練られていて、言葉を選び、大切にしていくことは難しいことであるけれども、思いを深めていくためにも心を鍛えるためにも重要なことだなと思いました。

日本の文化を伝えていこうとする国文研の役割は大きいと思います。各種団体がありますが、それぞれの団体がそれぞれの役割を果たしつつ、お互いに連携して行けば活動に幅が出て大きな影響を行使していくことが可能になると思います。ありがとうございました。

阿蘇の朝宿舎の庭に佇めば山はみどりに真近く見ゆる
降り来し御霊ら前へに誓ひたる世のため人に分を尽くすと

約三十年ぶりに参加して

（鹿児島県信用保証協会　野間口俊行）

約三十年ぶりに合宿に参加しました。参加者名簿の先生方の年齢を拝見して三十年の歳月の長さを改めて感じました。

鹿児島では川井修治先生の遺稿集を出版したのを機に月一回の輪読会が始まりました。この輪読会の輪を広げ、深めていくことがこれからの我々の勤めだと思っています。

東中野先生のご講義をお聞きして

ひがごとがまことのごとく通（とほ）れるは聞くにつけてもおぞましきことなり

三十数年ぶり合宿に参加して

改めて名簿を見れば七十（ななとせ）をすぎし師らの御名なつかしき
阿蘇の地に若き等導き励まさむみ姿みれば頭下りぬ

事態はそこまで来ているのか

（福岡・浜の町病院医師　安藤洋志）

東中野先生の御講義で「外国に行った時、南京大虐殺はなかったなどと言へば、その人は周りから孤立してしまふ」と言はれたのを聞き、事態はそこまで来てゐるのかと暗澹たる

「津軽弁クイズ」に楽しく盛りあがる夜の集ひ。

思ひがした。

私の長男の学級が世にいふ「学級崩壊」の状態で、この二年間考へることが多かった。このことを班別討論で話した所、班付で来られてゐた加藤善之先生が、「問題の根は深い。簡単には良い方向に向かはないと、胆をくくって根気よく、気長にやって下さい」と言はれた。この御言葉によって自分の気持ちがスーッと落ちつくのを感じた。

小堀先生の御指摘の如く、日本の国柄の喪失が、今日の日本の社会に混乱と不安をもたらしてゐると私も思ふ。気持ちを新たに、合宿で得たことを指針とし、覚悟を決めてやっていかうと思ってゐる。

帰る国に見守る親もなかりせば子等の苦しみいかばかりらむ

すばらしい日々を送ることができた

（兵庫県高砂市立滝山中学校教諭　貴伝名真一）

初めてこの合宿に参加させて頂いた。不安もあったが色々な人と出会えることも楽しみにしていた。特に短歌創作はおそらく初めての試みで、どのように作ったらよいのか最初はわからず駄作になってしまっていた。しかし、班の方々に直して頂いていい歌になった。とてもありがたく思った。

東中野先生のお話は印象に残った。一月に左翼達の反対に負けず大阪で開いた「真実を語る会」でのお話も印象的であったが、今回も資料を丹念に調べられ「南京事件」の虚構を見事に論破された。そして先生の祖国を誇りに思うお気持ちがひしひしと伝わってきた。慰霊祭も今まで経験したことがなく、感慨を深くした。

様々な人にお世話になり、多くの人と出会い、すばらしい日々を送ることが出来た。今年から「社会人特別コース」が新設され参加しやすくなってよかったと思う。本当にありがとうございました。

しかし、よりよい合宿のために提案があります。一つは社会人、学生、と分けずに男女、社会人、学生混合でいろいろな世代の交流の場を設けてほしい。もう一つはもう少し日程を減らした方がより多くの人が参加出来るのではないでしょうか。

すばらしき人に出会ひし阿蘇合宿来年もまた来ようとぞ思ふ

人生の指針たるものを数多くいただいた

（司法書士　井上勝己）

素晴らしい機会を与えていただきありがとうございました。この国の将来を担う若人がつぎつぎと国文研より出られんことを心より願うものです。

私も、もっと早くご縁をいただいておれば己の生き方も相当変わっていたのではないかと感ぜられる次第です。合宿運営にたずさわっていただいた会員の皆様に心より御礼申し上げます。またこの会をご紹介いただきました折田・白浜両先

「全体感想自由発表」参加者は次々と登壇して思ひの丈（たけ）を述べていった。

生には今後のご指導をさらによろしくお願い致します。
同宿同席の参加者の方々にも今後の人生の指針たるものを数多くいただき、生業の許す限りまたこの会に参加したいと考えております。意を尽くせませんが本当に有り難うございました。
皆さま方のご健康と国文研のさらなるご発展を心より祈念申し上げます。

慰霊祭にて〝海ゆかば〟を歌ふ
〝大君の辺にこそ死なめ〟と歌ひつつ古へしのべば胸せまりくる
最終講義を終へて
後髪ひかれて帰る無念さよ夜の集ひで〝元寇〟歌はん

身の廻りの小さなことから「行動すること」

（㈱経営管理センター福岡本部　稲田健二）

四十年振りに参加したこの合宿教室で私は青年の日に感じた懐かしさと緊張感を呼び起こされた。
社会人特別コースだったので問題意識が共有されているうえ、同信の方々だったので、結構突っこんだ話が出来たのではないかと思う。色々なことが話題になった。実社会で経験したことだから非常に具体的であった。
最後に班の全員が納得したことは「行動すること」であった。身の廻りの小さなことからでもよい。また、おかしいと思ったことには勇気をもって立ち向かい、発言していこう。そして、生活（家庭・職場）の中で「型」を大事にしていこう、等々のことであった。
そしてまた、私にとって国文研は「心のふるさと」であるなという思いがこみ上げて来ました。諸先生のご講義及び合宿運営にあたられた皆様、真にありがとうございました。

東中野先生の御講義を聞きて決意す
おかしいと何か変だと気づくときただちに迫る精神（こころ）鍛へむ

心動かされ勇気を与へられた

（㈱講談社　磯貝保博）

今回、初めて社会人コースが設けられました。忙しい社会人のための三泊四日の合宿です。班員の皆さんがそれぞれ社会体験も豊富で、しかも政治・経済・社会・教育など様々な今日の問題に対し、実体験をふまへて合宿にのぞまれてゐました。それがため、班別討論も、発言する人、聞く人、共に勉強になりました。班長の私自身も本当に参考になり、心動かされ、勇気を与へられました。班員の皆さんに心から御礼を申し上げます。
合宿の諸講義もそれぞれ重要な指摘をいただき勉強になりました。あとは身近なところから問題に対し、具体的な形でかかはるやうにしていきたいと思ひます。
社会人の方々が合宿に参加することは大変ですが、来年もかうしたコースを設定して実施してほしいと思ひました。

慰霊祭にて

ちりばめる宝石のごと輝やける星のかなたに父母はゐるらむ
警蹕の声にさそはれ亡き父母も我が辺の近く降りたちゐらむ

心身一新する覚悟です

（九州電力㈱　林　俊明）

初めての合宿参加であり、講義の一つ一つに驚嘆し、感銘を受けることばかりでした。特に『古事記』の論読や短歌創作は今まで一度も体験したことのないものであり、我々日本人の奥底に脈々と受け継がれている文化というものを感じました。

私は、戦後教育の自虐史観的教育をまともに受けた人間です。そこでは「軍国主義教育の排除」「思想の自由の確立」を叫びながらも、教育手法は「押しつけ」であり、教師の考えに合わぬものは「悪」と排除されました。教育とは恐ろしいものです。「間違っているんではないか」という疑問を持ちつつ何か測り知れない強い力で引っ張られ、頭が混迷してしまいます。今回の合宿においてもその状態は残念ながら続きました。様々な型で新風を注ぎ込む御講義を受けても、何か曖昧なものが心の中に残っております。

しかしながら、国文研の皆様がどれだけ今日の日本の状況を憂慮し、その再建のために如何に純粋に尽力されているかは、はっきりと分かりました。これからは自分自身新たな出

カメラ・レポート24

閉会式で学生を代表して、亜細亜大学修士一年・清田直紀君が、自分の短歌を紹介しながら、参加のきっかけと感想を述べた。

発として、心身一新する覚悟です。そして今一歩はっきりしなかった事柄について一つずつ自分なりに勉強していきたいと思います。ありがとうございました。

阿蘇山の集ひに初めて連なりてただひたすらに勉励努めん

第十一班―社会人―

輪読と短歌創作でお互ひの殻が取れた

（防衛庁調達実施本部長崎支部　鎹　信弘）

社会人班の班長をさせていただき大変ありがたうございました。合宿導入講義と小堀先生のお話は大変レベルが高く、内容が豊富であり、当初の班別討論では未消化に終わった。しかし、輪読と短歌創作・相互批評により、お互ひの殻が取れてきた。早目に、輪読と短歌創作を行ったことは大変良かったと思ふ。また、短歌の内容も一回目よりも二回目が大変素直で良い歌になってをり、二回創作・相互批評することも大事だと思った。

長崎に帰って、最低月一回の例会を持つこと、学生とのつながりを持つこと、自分自身の勉強を深めていくことを努めていきたい。

慰霊祭の折に

友の声に空見上ぐれば天の川さやかに見えて星輝けり

友の教ふる星座の姿思ひつつ夜空に輝く「さそり座」を見つ

日本の行末を真剣に話し合うべき時が来た

（㈱はせがわ　福本　明）

初めてこの教室に参加させて頂きましたが、当初考えていた以上に講義内容が科学的であり学問的であることに驚かされました。一つの考え方やイデオロギーに枠をはめるのではなく、枠を取り去るための勉強会であることに大いに賛同します。しかし、一人一人の経験や環境が違うように、ある言葉や事象に対して一人一人が受ける印象、イメージが異なることにもご配慮頂ければと考えます。学生の皆さんには、今後一つの事柄に対して各々賛成意見、反対意見を聞いて、自己の考え方を持ってもらいたいと思います。

この教室で多くのことを学びましたが、その中で今強く思うことは、日本も日本の行く末について本格的に論議を始める時機が来たということです。政治家やジャーナリストや国民が、選挙のための発言やただ反対するためだけの記事に踊らされるのでなく、全てを公にし、論議を尽くし、互いに痛みを分かち合い、どういう日本を今後作っていくか、真剣に話し合うべきです。その時この教室が中心的な役割を担って行くことを期待し、私も微力ながら尽力したいと考えます。

阿蘇に来て学びし国の成り立ちを伝へていかむ我子等のため

日本の伝統、文化を守る責任を感じた

（㈳福岡県中小企業経営者協会　橋本欣也）

私は常日頃から、学校教育に高い関心を持ち、特に日の丸、国歌の問題には、心を痛めています。我々、日本人が誇りを持ち、日本人であることに感謝する気持ちは、だんだんと薄れてきているのではないか。今回、国文研の合宿に参加し色々な講義をうけていくうちに、今日本人に欠如しているものがここにはある気がします。日本の伝統、文化を守りつづけることは、先輩から我々に課せられた責任であると感じました。今後の自分の人生に反省を生かし、精進していきたいと思います。ただ、歴史認識については、守るべきものと、捨てるべきもの、そして、率直に反省するべきものがあるのではないか。ただし、我々の先輩のおかげで、今の我々があることは感謝し、自分の子供達にも教え伝えたいと思っています。

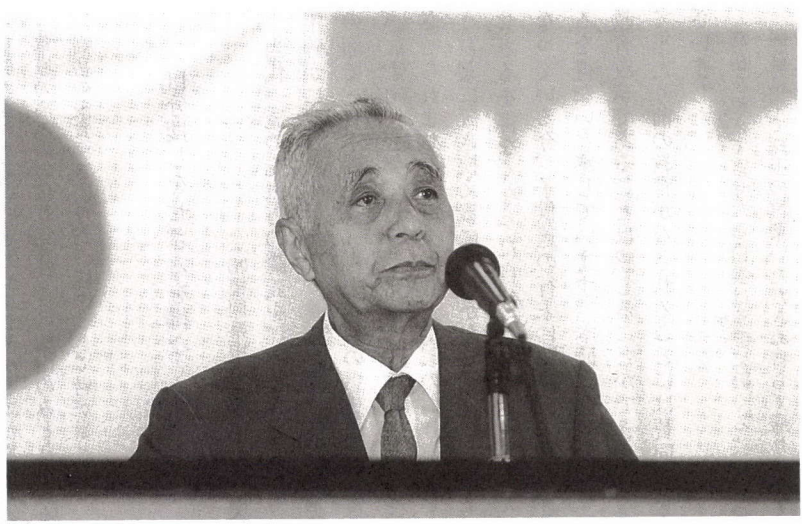
研修を終へるにあたり

大阿蘇の緑まぶしく日に映へて我等（われら）のあゆみはげますごとし
家族とも今の幸せは先人のおかげなることをかみしめ合はむ

短歌創作で日本語の深みと重さを知った

（渕上勝彦）

今回、初めてこの合宿に参加させて頂きました。参加理由は、会社を退職し、ゆっくり考へる時間ができた事と、この



主催者を代表し国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生が、慰霊祭の御製を拝誦され、国柄の特色を強調されて「ここで学んだことを味はって勉強してほしい」と挨拶された。

合宿の主旨である「本音で語り合う」ことにチャレンジしたいという気持ちからでした。ただ、日頃の勉強不足も手伝ってか、自分の発言内容ばかりを気にして、十分チャレンジ精神を発揮できなかったが、ようやくスタートラインに立てたような気がします。

人と人とのつながり、意見交換、その基となる思いと言葉など、短歌創作の講義で、日本語の深みと重さを学ばされたが、言葉一つ一つの重みを尊重し、人と人とのコミュニケーションをより豊かなものに育む努力を継続する決意です。

歌作らむと言葉探しつつ行きづまりふと浮かび来る言葉書き留む
歌詠まむと言葉求めて行きづまりふと浮びくる言葉に止まる

新聞、テレビの歌壇にも投稿しよう

（久留米大学附設高等学校　名和長泰）

中島繁樹運営委員長はじめ運営本部、指揮班、事務局各位に心より感謝いたします。八月五日（土）「創作短歌全体批評」を担当。十分な準備もできずに本番を迎へてしまったが、宝辺矢太郎氏のご助言を頂き何とか終へることができた。事前に自分の力量を高めるべく新聞、テレビの歌壇に投稿した。現代短歌の世界は独特の広がりをもち、国文研の志向ともかけ離れてゐるが、我々が投稿することで、世の関心を個我執着でない広い世界に向はせる一助にもなる気がする。NHK歌壇のテキストには、短歌入門者用の適当な読み物、小中学校での実践事例紹介などもあるのでご一読をおすすめしたい。

草原の中の木立にひとむれの日暮鳴きて涼風吹きぬ
草原の高みにのぼり見渡せば外輪山のみどり連なる
高岳の浸食深き山ひだの緑のつきて岩が嶺となる

自分捜しをせざるを得なくなった

（㈳福岡県中小企業経営者協会　脇坂幸樹）

当代一流の先生方の講義を拝聴するにつれて、戦後五十五年確かに我々壮年世代は、義務教育や社会的素養、家庭生活の面で、日本の伝統、古来からの思想が、異常に排除され過ぎており、思考のバランスをくずす原因になっていると感じさせられました。古来より天皇家のありかたを「国体」という言葉に置き換えるには、かなり抵抗があるが、自分捜しをせざるを得なくなった自分を感じております。自身が親となっている今、子供達の行末に関連しても、答えを見つけざるを得ないと感じています。本研究会の大きな目的の一つが教育改革であることは感じることができたが、普通の国として当たり前の教育がなされることには賛同します。有難うございました。

高岳を越えて寄せたる白雲は荒磯（ありそ）に砕くる波のごとしも
阿蘇に来て珠玉の言葉いただきぬ持ちて帰りてよくかみしめむ

もう一度『古事記』を読み直したい

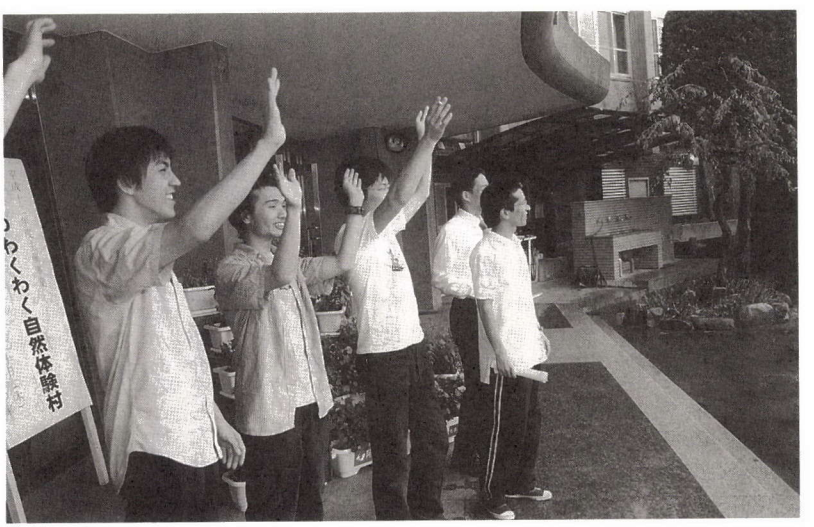
（大牟田市立勝立中学校　教諭　西原正博）

開会式前、中島運営委員長より、「参加人数は少ないが、これから合宿が始まることを大変嬉しく思ひます。」と言はれた言葉が印象的で、自分の気持ちを合宿に集中させる事が出来ました。今回、初めての社会人班の班付でした。殆どの方が企業からの研修派遣での参加でしたが、真剣に学ばうとする姿勢が見受けられました。中でも渕上さんは、謙虚に物事を受け止められ、自分の言葉で素直に語られてゐたのが心に残ってゐます。講義の中では、國武先生の『古事記』の説明が解り易く、しかも、楽しくリズミカルに話され、もう一度、『古事記』を読み直してみようかといふ気持ちになりました。私の担当した「慰霊祭の説明」は、慰霊祭の意義を十分説明出来なかったのではないかと反省してをります。

全体感想自由発表を聞きて

合宿に来てよかりしと語りたる学生（とも）の面輪はいきいきとしつ
和を以って貴しと為すてふ御言葉がよく解りしと語り給へり
御言葉を心にとめていま一度喧嘩別れし友に会ひたしといふ

カメラ・レポート26



わかれ。「お元気で、また来年会ひませう」、再会を期してわかれを惜しむ。

第十二班―社会人―

古典を読む面白さに気づかされた

（札幌西陵高校　教諭　本田　格）

連続して四回目の参加になりますが、緊張や構えも少しずつ取れ、自然体に近付いて来たと思います。

短歌創作に慣れず、今回自分の作った歌は今までで一番まずいものでした。作り方を言葉で理解しているだけで、何も分かっていないことに気付きました。歌会始の応募歌に参加することを、自分では重要なことと思っていますが、良い詠進歌のできるヒントが与えられたと思います。

諸先生のご講義の中で、特に國武忠彦先生、小柳陽太郎先生の古典講義が印象に残りました。古典を読む面白さ、素晴らしさに改めて気付かされました。

お世話になり有難うございました。

先人のつみかさね守る言の葉のひとつひとつを味はむと思ふ

『自分自身を語れるか』を考える機会を得た

（㈱山口銀行　人事部　村野哲郎）

本セミナーに参加するまでは「国際社会における日本」とは、ただ漠然としか捉えていなかった。特に歴史の中で日本は何をして来たのか、今、教科書に書かれているのは果たして真実なのか、など考えたことも無かった。人種平等を掲げ、ユダヤ人排斥に激しく抵抗したこと、南京事件は証拠が無く中国による情報戦に踊らされた可能性がある等、歴史をもう一度振り返り、先入観を排して先人の遺したことを真摯に受け止め、主体的に考える必要があると痛感した。また、参加途上の学生同士が互いに自己紹介をしたり、講義の前と後の挨拶の声や質疑応答への参加、キャンプファイヤーでの出し物等を見て、学生ならではのバイタリティーを感じた。何年も前、自分が学生であった頃を思い出し胸が熱くなった。

合宿教室閉会式を前に

先生と友等と共に学びしも今日で終わりぬさびしかりけり

地道な勉強の大切さを思った

（福岡市立大原小学校　事務主査　奈田明憲）

前々回の阿蘇合宿で小田村先生の開会のご挨拶をお聴きしてもう二年経ったのだ。そう思いながら合宿に参加しました。

合宿では、ご講義による感銘も然ることながら、共に過ごすことによって学ぶ事も大切な体験と、今さらながら思いました。講義をお聴きし、やはり地道な勉強の大切さを思いました。それから、短歌創作及び相互批評では、自分の感性を磨くこと、他の人の心を思いやるという、苦しいが楽しく充実した気持ちを経験するのも、改めてすばらしいことだと感ぜられました。

小田村寅二郎先生の御姿をお偲びして
師の君の国思はるる言の葉のそのほとばしる言の葉偲びぬ

日本人であることの意義を深く考えたい

（㈱はせがわ　沢辺龍司）

今回初めて合宿に参加させて頂きました。自然や御先祖に対する敬いの心、慎みの心が消えてしまわないように、心を形に表したものがお仏壇であるという認識を元に、日本の文化、慣習を次の世代に伝承して行くことを使命として、商いをさせて頂いています。自分自身を見失うことが、イコール自国の歴史、文化を失う事という考え方は正に真実であると考えます。講義では、知っている事もありましたが、まだまだ知らない事が多く、メモが追いつかない時もあり、吸収すべき内容ばかりでした。日本の文化、歴史を探求して行くと、行きつく所は天皇の御存在ではないかと強く思います。現在の商いを通して、またもっと幅広く物事を吸収し、日本人であることの意義を深く考えて行きます。

阿蘇合宿先祖の思ひ受け留めて学び続ける礎とせむ

非常に貴重な時を過ごした

（福岡県中小企業経営者協会　田代誠士）

合宿の班別懇談で一番強く感じたことは、〝真実〟とは一体何なのか、果して三十年生きて学び得たものは、半分以上は真実ではなかったのではないのかということだ。

短歌創作で雄大な阿蘇の自然の中で、日本の伝統である和歌を作成したことは、自分自身非常に貴重な時を過ごしたように思う。また、いろいろな言葉を学び得たようにも思える。日本の文化であるものは今後も大切にして行きたいし、心〝穏やか〟にし、〝考え〟〝創る〟部分を職場の仲間に伝えたいと感じた。

ふり向けば緑の草原一面にまなこにはえて心落ち着く

世界に向けて堂々と平和を唱えていくべきでは

（福岡県中小企業経営者協会　山本純也）

合宿では、学校で教えられなかった内容ばかりで違和感、不信感を抱いた。班別研修で、いかに今の学校教育が間違っているかという話を聞いても、子の親として心配ですが、それを信用する気持ちにはなれません。日本の将来に向けて何が正しいか全く解りませんが、教育については皆が納得できるものでないと何も知らない子供がかわいそうですし、大人達の思想のぶつかり合いに子供を巻き込んではいけないと思います。軍事力が必要といわれる方もありましたが、軍事力をもたずとも正面から平和を唱えて行きたい。命をかけて国を守ることは立派ですが、一人の死によって他の人が悲しみます。特攻隊の遺書はとても悲しく受け止めました。二度と

悲しみは繰り返したくない、だから戦争に反対します。
何事も素直に聞きてよく語らひ事実を見つめる目を養はむ

ここで学んだことを弛まなく語り続けたい

（班付　熊本県立教育センター指導主事　白濱　裕）

我が国の「ナショナル・アイデンティティの回復」といふ一貫した基調で貫かれた合宿であった。それにしても、班別討論等を通して痛感したのは、今日のマスコミ報道、小学校からの学校における歴史教育の偏向等が、いかに大きく物を見る際の呪縛となってゐるかといふことであった。まさに山内先生が言はれた様に「金魚鉢」から飛び出て、自由に清流を泳ぐ鱒や山女となることが学問の出発点である。短歌相互批評は、お互ひの歌を添削する中で、各自の作歌時の心情にピタッと来たときの解脱感を班員皆が味はった様に思ふ。日程の早い時期に設定されたのは良かった。社会人として、職場でここで学んだことを直接活すことは困難を伴ふことであるが、同僚も又同じ様に心の深いところでは、今日の日本の状況に危機感を有し、心の充実を求めてゐると信じる。あきらめず弛まなく語り続けてゆきたい。

井上勝己兄へ

かねてより共に学びし友達の参加しくれしがうれしかりけり
演壇を真すぐに見つめ講義聴く君の姿の尊かりける
斯の道につながりを得しよろこびを語るみ言葉心に刻みぬ

自国の国柄を自覚的にとらへる大切さ

（班付　神奈川県立厚木南高校教諭　山内健生）

自分の息子の世代の人達と語り合ったが全く違和感がなかった。もちろんわが国の「自己喪失」的な日常のマスコミからの情報（価値感）から見れば、日本人たる自分自身を取り戻さうとする合宿の趣旨との落差があるから、その点で足並みが全くそろふはずもない。しかし、同じひとりの人間として向き合った際には、別次元の内的交流がはかられるものである。それは合宿のたびに実感することだが、今回もあらためて感じた次第である。

自国の「国柄」「国体」を自覚的に把握することは、国際交流の拡大する時代になって、ますます必要性が高まってゐる。どこの国も、自国の個性を次世代に教育してゐるのだから、いまの「自己喪失」的な状況では、国際社会から取り残されるのではないか。世界の国々に伍して交流していくためにも自国の特質（国柄）を自覚的にとらへることはますます大切なこととなってゐる。その意味で各講義が、「国柄」の探求といふテーマが底流に一貫して流れてゐたやうに思はれてよかった。初めて参加された人達も、新しい問題意識を持ったはずと思ふ。

全体感想自由発表

若きらの語る言葉を聞きをれば思はず亡き師の面輪の浮かぶ
ふたとせ前に師の立ちたまふ壇上に若きら立ちて思ひ述べ行く

師の君のいまさばいかにか聞きたまふ若きら述ぶるすぐなることばを
若きらの言の葉しかと隠り世にとどくを我はゆめ疑はじ

合宿終りて

このむとせのわが身のことどもあらためてかへりみるなり集ひのをりをり
六年の月日をことなく重ね来てつねと変らずまた集ひ来ぬ
この夏は六年ぶりに講義する務めを抱へてわれは集ひぬ
日頃から思ひめぐらすことどものいくつか述べんと務め担ひぬ
いたらざるわが身なれども「これだけは」とおもひしことを述べんと思ひぬ
半年の準備ながらも伝へんと思ひしことを語り終へたり
ともかくもわぎものみたまよ合宿のつとめ果たせしをよみしたまへや

第十三班―社会人―

いい発表を聴かせて頂いた

（山口県立下松高校教諭　寶邉矢太郎）

一、浜田班長の年齢を感じさせないパワフルなエネルギーに感服しつつ、久し振りの社会人班で気持良い研修をさせて頂き、感謝申し上げます。

一、東中野先生はお若い頃『短歌のすすめ』を声を出して幾度読んだことだらうと言はれたことがあるが、峻烈な学問の世界で孤独な戦ひを続けられる先生の言葉に心打たれるのは先生が詩人でもあられるからであらう。

一、名和先生の創作短歌全体批評は、穏やかな口ぶりに聞く者の心は却って集中し、飽きさせなかった。時折の一刺しに思はず笑ってしまふ。見事なものであった。

一、全体感想自由発表の挙手の多さはどうであろう。少ない参加者は残念なことではあったが、いい発表を聴かせて頂き大変有り難く思った。

第二回短歌創作

特攻に行きたる人を班員の二人も詠むとはありがたきかも
切実の気持あふるるこれが歌見違へるがごと歌とはなれり

全日程参加出来て幸ひであった

（富士通㈱　浜田　實）

今年は仕事が多忙でしたが、何とか全日程参加出来て幸ひでした。また良い思ひ出が出来ました。例年の通り、合宿教室の素晴らしさは実際に参加し、体験しないと分りません。新しい方をお誘ひするのにも半年、一年に亙り、紹介者の全人格を以って当ることが求められ、従って合宿案内は会員にとって、一つの修練と思ひます。今回の合宿は布瀬先生の御講義に始まり、四日目の小柳先生の御講義に至るまで内容的にバランスあるものと思ひました。運営に当られた方々の事

前準備等ご苦労様でした。当班に於ける宝辺さん外の会員の短歌指導も見事でした。今後の要望として、オリエンテーション時に講義のテーマが全て分る様にして戴きたいといふ事と、雲仙普賢岳のビデオを紹介されては如何でせうか。

合宿最終日、小田村会長、中島運営委員長の御挨拶を聞きて

師の君の語らるる言葉の端々をしかとメモとりうなづく我は

全体感想自由発表

若きらのまことの言葉に聞き入りて我の心も晴れゆく思ひす

真実に出会えた

（㈱はせがわ　杉本保範）

今回、会社や上司の勧めにより初めてこの伝統ある全国学生青年合宿教室に大変興味を持って参加させて頂きました。班別による『古事記』の輪読、和歌の創作、創作和歌の相互批評、そして多くの先生方の御講義は正に真実に出会えた貴重な時間となりました。今後も美しいものを美しいと思ふ心、真理を探求する姿勢を持ち続けたいと思います。同班で御指導頂きました皆様と御準備頂きました国文研の皆様、そして御講義頂きました先生方に心より感謝いたしております。

真実を求め出会ひし阿蘇の地で胸にきざまむ民族の誇り

古人が培った豊かな精神に触れた

（㈱肥後銀行　桝田武治）

最近の景気低迷や少年犯罪増加の問題はここ十年で表面化しているが、根源は更に二十年遡ると思う。即ち戦後教育のみで育った世代が社会で増加し、戦前教育を受け、戦争を乗り越えて経済国家日本を形成していった世代が社会の第一線から退いていったことに原因がある。先人が造りあげた経済システムに胡坐をかき、バブルを生み、崩壊させてしまった。又、君が代・国旗問題等、表面的部分のみで騒ぎたてる世論と戦後教育。その様な未完成な精神が少年犯罪等を生み出していったのだろう。本合宿教室で触れ得た『古事記』や『十七条憲法』は古人が培った豊かな精神育成の教えに思えた。今後増々社会のデジタル化が加速してゆくであろうが、その様な時代だからこそ先人の教えに立ち返るべきと思う。

現代の病める心を思ひても今立ち返れ古人の心に

故郷に帰った様な思ひがした

（広島防衛施設局　山根　清）

日本の歴史・國柄について学ぶところ多き合宿であった。日本といふ故郷に久し振りに帰った様な合宿であった。國武先生の『古事記』の御講義は大変分り易く、日本建國の物語がよく理解出来た。どこの國にも自らの國の誕生・建國の物

語・神話があるが、残念乍ら現在の我國の学校教育では殆んど教へられることがない。小学生の我子も須佐之男命や大國主命の物語を知らぬといふ。家庭教育で施すしかないと思った。又、小柳先生の輪読導入講義では聖徳太子の憲法拾七条を分り易く御教へ戴いたが、大陸文化が滔々と入って来た推古朝に於て、太子が如何に日本文化を守られつつ外来文化を導入されてゆかれたか分った気がした。自らのアイデンティティーを学ぶ上でこの合宿は非常に有益であった。

朝の集ひにて

のぼりゆく御旗(みはた)の後(しりへ)緑なす阿蘇高岳は鎮まりゐますも

君が代の演奏と共にのぼりゆく日の丸すがしく仰ぎ見るかも

いや増して吹く風すがしも大阿蘇に映ゆる日の丸仰ぎて見れば

新鮮なものを胸に感じた

（㈳福岡県中小企業経営者協会　津末大輔）

私はこの国民文化研究会の合宿に初参加しました。始めはどの様な合宿に参加するんだという不安で一杯でした。しかし、この阿蘇の地で、戸惑いながらも日本の文化を学び、日々勉強することができました。内容的にはとても難しく、理解出来なかったものもありましたが、何か新鮮なものを胸に感じ、優しさが伝わって来た気がしました。この合宿で出会った大学生とも仲良くなれ、色々な話をしている内に、こういう角度からも物事を見れるんだと勉強になりました。私にとってこの合宿はとても意味があったと思っております。いい体験をありがとうございました。

阿蘇の地で初めて感ぜしこの気持忘るることなく未来(あす)へつなげむ

合宿中に創作された「短歌詠草」

―しきしまのみち―

短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまってをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行った様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。祖先の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に祖先の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく祖先とつながりをもった日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同志の相互批評によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人間性を取り戻さうとする

試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、寶邉矢太郎氏（山口県立下松高校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌しい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となって参加者全員に配付されました。この歌稿をもとに名和長泰氏（久留米大学附設高校教諭）によって、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもって偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ短歌の表現を通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合って来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

特に今年も合宿期間中に短歌の創作を二回体験していただき班員の心の交流がさらに深まりました。かうした短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。ここに載せた短歌はかうした営みの中で作られたものであり、合宿教室での生き生きとした肉声が聞こえてきます。また心と心の架け橋としての歌がまさしく参加者に実現されてゐることを、御読み取り下さればと念ずる次第です。

第一班

岡山県立精研高校講師　横畑雄基

小野先生と歩む

汗かきてぬれし服にも草原の風ふきぬけてさはやかなりけり

（二回目の作品）

班討で言葉少なき班員を目の前にして不安のよぎる

お互ひが会話の中で友どちとなりゆく様を見れば嬉しき

全員で班員のつくりし和歌に向かふ姿は真剣になり

言の葉を見いだせし瞬間班員の顔におのづとほほゑみの浮かぶ

和歌を共につくりて班員の心はここに一つになりける

日の本の歴史の中で詠まれたる和歌を偲べば国民まとまらん

慶應義塾大商四　斎藤一佐

生ひ茂る草木の間を通り抜け突如目に入る広き草原

立ち止まり強き風受け見晴らせば疲れし我が身癒さるるなり

（二回目の作品）

歌かこみ友らと悩み語らへば心かよはす喜びぞ知る

東京大文Ⅲ二　石村善之亮

はるばると見わたす限りの阿蘇の峰青空を背に雄々しくそびゆ

（二回目の作品）

小柳陽太郎先生を壇上に仰ぐ

壇上で若き友らに語らるるそのお姿は今も変はらず

時忘れ語り給へる御すがたに教へを乞ひし日々の去来す

国学院大法一　古川貫祐

旅の車中より

大阿蘇の緑の前に立ちたればよみかくる本とぢてうちみる

（二回目の作品）

野の風によせる緑の波見ればすがしと感ず我が心地は

芝浦工業大工一　安東克明

山肌を覆ひし緑はてしなく化粧のごとき阿蘇の夏山

草原を進みし影は青空の真白き雲の流れなるかな

（二回目の作品）

慰霊祭にて

淡く消ゆ光の筋を残せしは夜空を射ぬく夏の流星

早稲田大政経一　伊藤大二郎

そびえ立つ阿蘇の山々見上ぐれば日の光受け緑ぞ映ゆれ

（二回目の作品）

波の音とまがふばかりに草なでる山の息吹きの身にぞ迫りく

亜細亜大国際関係一　大橋広和

ただ一人阿蘇の山々見上ぐれば我が心地も澄みわたるなり

（二回目の作品）

暗き道ふと見上ぐれば美しき夜空をまたぐ天の川見ゆ

第二班

早稲田大政経五　伊藤俊介

眼の前にそびゆる阿蘇の山肌は起伏激しく雄々しく見ゆる

（二回目の作品）

夜の集ひにて

友どちのをかしげなる様眺むれば腹抱へつつ

声あげて笑ふ

大正大大学院二　青　野　英　海

散策のをはりしのちに友達と言葉交はすはたのしかりけり

（二回目の作品）

十七条憲法の班別輪読

友達と文読みゆくにこめられし深き意味知りうれしかりけり

亜細亜大大学院一　清　田　直　紀

虫の音や鳥のさへづり聞きながら草原の道友らと歩む

（二回目の作品）

さはやかな青空を背にあがりゆく日の丸の旗美しかりけり

帝京大経済四　河　見　仁　朗

布瀬先生の御講義をお聞きして

一流の日本人のあり方をお聞きし心晴るる思ひす

（二回目の作品）

聖徳太子の十七条憲法について私が思ったこと

和の心私も彼も凡夫にて互ひを思ふ心つくさん

島根大法文四　那　須　　参

散策の折に

今こそは照る日を浴びて肌を焼き健康な肌にならむと思ふ

（二回目の作品）

小柳先生の講義を聞きて

自らの思ひのたけを語らるる師の御言葉に引き込まれゆく

立教大観光二　山　本　享　央

合宿も二日目にしてはや疲れ残る三日をながしと思ふ

（二回目の作品）

感動を素直に書くのが短歌なら今の僕には歌は詠めない

東京大文Ⅰ一　坂　口　　洸

レクリエーションの折に

新しき友と語らふ楽しさに夏の暑さもしばし忘れぬ

（二回目の作品）

朝の集ひにて子らが阿蘇登山せしことをききて

我もまた彼の子らのごと阿蘇山に登りしことを懐しく思ふ

第三班

九州大経四　石　井　英　俊

丘の上に枝葉広げし一つ松その木の陰はすずしからなむ

ともどちと草に座りて木の陰にたたずみをれば風のふきくる

ふと見ると幹をおほへるつたの間にしめ縄ありぬ神木にぞある

見わたせばただに広がる平原のこれが一つ松われら守るごとし

明星大人文二　久　田　広　光

谷を過ぎこもれ陽の中軽快に山道登る友らに続く

生ひ繁る森の山道登りゆけば陽に照らされし草原広がる

（二回目の作品）

忤ふこと心にあるをそがままに認められたる御言葉かしこし

佐賀大理工二　片　岡　正　憲

目の前に雄々しくそびゆる高岳に思はず声をあげけり吾は

（二回目の作品）

流れゆく雲の行く手を防ぐごとそびえ立ちたる阿蘇高岳は

同志社大法二　石　井　一　賢

広場を見おろせる草泊まりの地にて国旗降納式のまさに始まらんとするに

おのおのも松の木陰に集ひゐて指ををりつつ和歌詠まむとす

君が代の流れむとせばひとみなの威儀を正して静かに待ちぬ

（二回目の作品）

国柄をただ一筋に守り来し先人の道を我も歩まん

福岡教育大教育一　石　山　靖　哲

山道で危ない所を行かうとして

先輩が我を案じてかけくれし「危いよ」の声

忘れざりけり

（二回目の作品）

慰霊祭の降神の儀で

空に満つる星に宿りし祖国のあまたの御霊天降りますらん

愛媛大工一　森　垣　慎　治

部屋の友と語り合ひつつ我が思ひややひらけゆくうれしかりけり

八紘を掩いて宇にせむことをすめらみことはのたまひにけり

建国の理想を体し先人はユダヤの民も救いたまひき

（二回目の作品）

建國の詔より続き来し思ひを我も受け継ぎ伝へむ

第四班

九州大法五　星　原　大　輔

上村理事長の挨拶をお聞きしながら

壇上で思ひ込めてかたられし師の君の姿思ひ起こされぬ

語られし一語一語に思ひはせ師の君の願い心に留めむ

（二回目の作品）

國武先生の御講義にて

いと古き文の言の葉リズムよく高らかな聲にて語りゆく師は

天つ神一つ一つに先人の御名に込めたる思ひ知られり

古典輪讀にて

驚きに口から發する言の葉もそのまゝ天つ神と成りましぬ

次々と神の生れましゝ文讀めば生命幸ふ國柄感ず

長崎大教育四　益　冨　孝　重

楽しみに待ちたるけふのレクリエーション空晴れわたりうれしかりけり

「藤波くん」と声をかければ驚きていかで知りしかと返事の返れり

（二日目の作品）

慰霊祭を受けて

今年は松吉先生のお声をば聞けずを思ひて始まりを待ちぬ

頭たれ耳をすませば明治天皇の「夢」といふ御歌の聞こえて来たり

「今の世にあらばと思ふ人」といふしらべに先生の姿の浮べり

昨年の八月末に九段にて話しくれしを思ひ出したり

若人と話をできるは有難しと語らるる先生の姿を忘れじ

お話を聞きたるはただ一度なれど先生の姿強く残れり

吾のごとき見知らぬ者にもかけくれしあたたかき思ひに応へゆきなむ

熊本大教育三　米　田　匡　彦

大葉勢さんとお話しして

お釈迦様の形をしたる山あると聞きてどこかと辺り見渡す

目の前の山の稜線はお釈迦様の仰向けに寝たるお顔のごとし

（二日目の作品）

小柳先生の御講義を聞きて

十七条憲法の中に込めたまふ太子の御心学び

ゆきなむ

崇城大工二　石橋徳一

道中列車に乗りて

広大なる阿蘇の山々眺むれば旅の疲れも癒さるるなり

（二回目の作品）

慰霊祭の折

御祭のにはにのぞめば夜空にはあまたの星の輝きてあり

長崎大教育二　廣中渉

大阿蘇の外輪山は延々と壁のごとくに遠く連なる

（二回目の作品）

床に就く時間とはなれど蝉の声の窓の外にて高く響けり

そのうちに窓の閉まりて響きける蝉の鳴き声ピタリとやみぬ

もうすでに聞こえぬはずが耳の奥に鳴き声いかで残りてあるか

東京農工大工二　藤波和寛

木の幹にしめなは結びまつりこし美しき心に胸をうたるる

（二回目の作品）

慰霊祭の御製拝誦聞きし折に

朗々と御歌よまれし師の君の高きしらべに心安らぐ

第五班

福岡教育大教育三　小林国平

詠みたしと思ふことごと様々に自づと浮かびく阿蘇に来しより

しかれども想ひ伝ふる言の葉の今だ出でこずただもどかしく

宝辺先生の御講義をお聞きして

教へ子の短歌詠まるる師の君は顔ほころばせ語りかけらる

（二回目の作品）

興島先生に短歌を頂きて

吾がことを詠まるる短歌ありがたく涙こらへて耳を傾く

神戸大国際文化四　北村幸一

ソファーにてうたたねしたる父をみて感謝の思ひふとわき起こる

（二回目の作品）

留学を終へ帰国時機内にて

機内よりただ見えたるは漢字のみ未だ平仮名の触れたくはなし

近畿大九州工四　和田周作

阿蘇散策のをり高台にて

雄大な阿蘇の自然を見渡せばただ立ちつくしつつまるる思ひす

（二回目の作品）

みそ汁に牛乳入れたら妙な味変はらぬおかず変へるべく立つ

京都大文二　服部源憲

合宿地へ向かふ途中にて

友らとの再会に心弾ませて一人列車で阿蘇へゆくなり

車窓より青き山々見えくればいよいよ胸の高鳴りてきぬ

（二回目の作品）

東中野先生が班討に入られし折に

語気強め「誰かがやらねばならない」と語る御姿我が胸を打つ

九州工業大情報工二　萬雄飛

阿蘇散策にて

草原に立ちて野風に身をまかせ雲眺むれば心安らぐ

彼の女と共にこの風感じたしいつかこようと心に決めぬ

（二回目の作品）

「台湾人と日本精神―日本人よ胸を張りなさい」のタイトルをみて

御国をば誇る心を持てぬ我をはげます人の心うれしき

亜細亜大国際関係一　野　村　　亮

阿蘇へ向かふ途中広島にて

夜もふけて人気とだえし稲荷橋友と歩けどふともものさびし

（二回目の作品）

輪読後聖徳太子の御文読み頭悩ませ空を見上げる

亜細亜大国際関係一　澤　田　将　志

見はるかす山並ながめ歩き行けばしたたる汗もしばし忘るる

青々と照り輝ける牧草の風にそよげりさざ波のごと

山道を登りて頂を見上ぐれば澄み渡る空に心洗はるる

（二回目の作品）

陽が落ちて闇に沈みし山並の上にまたたく銀の星々

第六班

九州工業大情報工四　桑　木　康　宏

日の本について学びし阿蘇の地に二年を経てもどり来たりぬ

（二回目の作品）

吹く風にてふはあらがひ飛びつづけ花にとまれどとく飛び立ちぬ

長崎大教育四　外　村　聖　典

松の木の下に座りて和歌よめば頭上に鳥の声の聞ゆる

見上ぐれば松の枝先にとまりたる鳥は鳴きたる山に向ひて

（二回目の作品）

長内先生の手紙を読まれるのを聞きて

我々に思ひこめたる御言葉に心あらはれ朝すがすがし

人心うるはしからむと教へらるる師の御姿を思ひかへしぬ

九州大大学院二　野　口　寿　人

真剣に歌を詠まんとする友の瞳（め）は生き生きと輝きてをり

（二回目の作品）

阿蘇の地の学びもわづかになりし時体疲るれど心満ちゆく

九州大医二　中　島　健太郎

我々を見守るごとくそびえ立つ外輪山の雄々しき姿

（二回目の作品）

天皇（すめらぎ）はただひたすらに日の本の民やすかれと願はるるかな

亜細亜大国際関係一　寺　岡　正　史

様々な意見交はして語り合ふ友に出会へて嬉しかりけり

（二回目の作品）

はるかなる夜空の星のきらめきよ幾年月を経て届きしか

志学館大法一　近　藤　将　勝

国旗掲揚を見て

君が代の流るるなかに昇りゆく日の丸あふぎ胸あつくなる

（二回目の作品）

ひたすらに民やすかれと祈らるる君をいただきうれしく思ふ

これからも友らと心を一つにし我が国柄を学びゆきたし

米国リンドンインスティテュート

石　村　慎　悟

友達（ともだち）みな緊張すれど身の上を語る度（たび）ごと笑みの増しゆく

合宿に不安あれどもみともらと初の講義にのぞまんと思ふ

（二回目の作品）

日の本に命を懸ける丈夫と共に学べと父の言はるる

異国に恥ぢぬ国柄示さんと学び励みし友に出会ひぬ

第七班

家庭教師　有　本　和香子

大阿蘇の空より舞ひくる霧雨は薄絹のごとくやはらかにして

（二回目の作品）

ぎこちなき鎮魂の儀ぞありがたし御國を想ふ心溢れり

佐賀大教育四　橋　本　さつき

松陰の熱き生き様語られし師のみ言葉に心打たるる

（二回目の作品）

阿蘇山の澄みわたりたる大空に星瞬きて流るるがごとし

保谷市役所　今　林　素　子

雄大な阿蘇の自然を眺むれば日々の疲れも癒されてゆく

東北女子大家政二　高　嶋　純　子

大阿蘇に初めて会へしみともらと語りあへたることのうれしさ

（二回目の作品）

夏の空のさはやかな風にふかれつつ真珠のごとき星をながむる

大阿蘇にちりばめられたる星空を札幌の友に見せたく思ふ

東北女子短大生活二　葛　西　恵　美

頬なでる涼やかな風心地良く阿蘇の草原素晴らしきかな

（二回目の作品）

星空のした学びの友とあひ集ひ先祖の霊を敬ひ祀る

慶應義塾大文学二　山　口　蝶　子

草原の青き山道歩みゆけば涼しき風の吹き来るうれしさ

（二回目の作品）

あざやかな昼の青空名残りなく今は一面輝く星空

星影を眺めゐたれば思はるる国に捧げし若きいのちの

熊本大教一　田　中　彩　子

草原の萌ゆる青葉はやはらかく空の青さにまばゆく映ゆる

（二回目の作品）

かぎりなき星の輝き数ふれば去りにし御霊の在りし日を偲ぶ

明治大短大経済一　浜　田　真理子

大阿蘇の広がる空に思ふかな幼き友と駆けた日のこと

（二回目の作品）

見はるかす阿蘇に広がる草原は夕立ちうけていよよ輝く

西南学院大法一　丸　山　万紀子

緑濃き阿蘇外輪山に囲まれて友と学ぶはおもしろきかな

（二回目の作品）

大阿蘇の夜空に輝く星みれば国に尽くせし祖先の偲ばる

第八班

熊本市立西原中学校教諭　山　方　富美子

緑濃くすがしき草原歩きつつ声にぎはしく友と語らふ

（二回目の作品）

難しき古事記を皆で輪読し一語一語を深めゆくなり

福岡教育大教育四　相　浦　佐知子

生ひ茂る草々揺らし吹く風のうち寄する波の音のごと聞こゆ

（二回目の作品）

慰霊祭の和歌朗詠の折

ろうろうと歌ひ給へる御声聞き御声違ふが気にかかりけり

長内先生にお変はりなしと便りにて告げられしとき心晴れゆく

東北女子短大被服二　工　藤　康　世

父母に見せたしと思ふまなかひにそびえたちたる阿蘇の高岳

（二回目の作品）

君恋ひしただ逢ひたしと一時も忘れぬ想ひ捧げまほしき

東北女子大家政二　林　　絵　美

雲もなく澄みわたりたる青空は手のとどくごと間近におぼゆ

（二回目の作品）

北の地を離れて会ひしみともらと絆深まり別れ悲しき

麻生工科専建築一　小　野　実　里

大いなる黒き蝶々目にとまりめづらしき姿しばし見入れり

黒蝶はやがてとびゆき桃色の花にとまりて蜜をすひけり

（二回目の作品）

国民祭典のことを詠まれし御製を読みて

国民とともに聞き入ると詠み給ひし御心知りてうれしくなりぬ

中村学園大履習生　野　口　純　子

うす暗き険しき道下り見上ぐれば木々の間ゆ光さしこむ

（二回目の作品）

小柳先生の御講義を聞きて

豊かなる生き方示す十七条憲法の調べを聞けば元気湧きいづ

言の葉のはづむ調べにじみでる力強さに勇気湧きいづ

福岡女学院短大卒　重　松　佐知子

立ち止まりながむる緑の山々を吹きくる風にすがしさ覚ゆ

（二回目の作品）

みともらとともに語りし志今後の我の糧になしたし

山口大人文一　橋　本　文　絵

レクリエーション

難しき御講義の後待ちに待ちしレクリエーションの時は来たれり

ウキウキと歩き行きつつ見上げたる空の青さに心はづみぬ

（二回目の作品）

食事のみ楽しみにしつつ終はりゆく合宿思へばさびしかりけり

第九班

ギャラリー喫茶はえゆ　星　野　有佳子

六度目の参加になりぬこの合宿共に語りし友らを思ふ

夕方に会へると聞きし友のこと明日は来るかと心待ちにす

（二回目の作品）

師の言葉素直な気持ちで受け入れる我の心の変化に気づく

合宿で学びしことを父母に初めて此度話したく思ふ

長崎大薬三　日　高　秀　子

お互ひの班は違へどうちとけて語らひし事の嬉しかりけり

（二回目の作品）

おもてより大太鼓の音聞こえきて驚きてすぐ外を眺むる

窓の外つどひの広場に子供らの応援団の姿見えけり

ともどちの昔通ひし幼稚園の子供らと聞き親しみのわく
小さき身大きく使ひて演技する園児らの様愛しかりけり

加　藤　絵　里

うっそうと茂る山道歩き抜きまばゆき陽光この身に浴びぬ

（二回目の作品）

宝石のやうに輝く星々は我等のまつる御魂なるらむ

明星大人文二　村　田　奈央子

久々に会ひ語りたき友どちの姿見つけて心踊りぬ

（二回目の作品）

小柳陽太郎先生の御講義を受けて

師は熱く語り給ひぬ汝の内に日の本の命甦らせなむと

いにしへの文学びゆき吾が内に日の本の命甦らせん

東北女子短大生活二　大　柳　圭　子

みともらと陽の照りつくる道ゆけばあまりの暑さに汗の流るる

（二回目の作品）

小夜ふけて布団の上で友どちと時を忘れて語り笑ひぬ

東北女子短大被服二　芳　賀　麻衣子

日本の南に位置するこの地では雪少なしと聞きて驚く

（二回目の作品）

おおとり幼稚園の応援団をみて

夏空の下で団員先導す小さな団長たのもしきかな

亜細亜大国際関係一　長　田　里　香

ゆったりと雲の流るる様みつつ心穏やかな時を過ごしぬ

（二回目の作品）

全国学生青年合宿教室に参加して

講義聞き我の心に日の本の文化を受け継ぐ使命感わく

早稲田大政経一　多　久　青　奈

各々の郷土の方言語り合へばただめづらしく会話はづみぬ

（二回目の作品）

ばんざいと陛下を思ふ国民の叫ぶ声聞き胸あつくなる

第十班

講談社資料センター室長　磯　貝　保　博

レクリエーションにて

きらきらと輝くばかり晴れ渡り日射しは強し阿蘇の夏空

草原をくだりてゆけば夏空に久住の山並みさやかに見ゆる

㈱経営管理センター福岡本部

稲　田　健　二

小堀先生のご講義を聞きて

ひたむきに国柄語る師の君のみことば聞けば心うたるる

レクリエーション

牛どめの柵のほとりの草むらにカハラナデシコひそやかに咲く

井上勝己司法書士事務所所長

井　上　勝　己

幼なき日父母と歩みし阿蘇の山今なつかしく思ひ出さるる

根子岳を眺め歩きつ友がらと語り合ひたし心ゆくまで

本意なくも子供を家に残しおきバッタ見るたひ子ら思ひ出す

碧空に積雲高くのぼり立ち真夏日和を楽しむ

我は

鹿児島信用保証協会業務部　野間口　俊　行

すがすがし鳥のなき声聞こえきて窓の外見れど姿は見えず

友と行く阿蘇の山路の道の辺にカハラナデシコすがしく咲けり

鹿児島信用金庫融資管理部　月野木　勝　彦

学生の折の合宿を忘れ得ず今日阿蘇の辺に思ひ立ち来ぬ

愛弟子の講義する姿に今は亡き師の君さぞや喜ばるるらむ

浜の町病院内科　安　藤　洋　志

幼き日美し阿蘇の山見つつ遊びしことの偲ばゆ

高砂市立滝山中学校教諭　貴伝名　真　一

陽の光輝く空を仰ぎ見つ阿蘇の山道行くはすがしも

九州電力㈱熊本支店総務部　林　俊　明

阿蘇五岳仰ぎて見れば天地の始めのときを思ほゆるかな

第十一班

防衛庁調達実施本部長崎支部　鎹　信　弘

高原に登れば草葉をそよがせて吹きくる風の心地よきかな

たたずみて遠く聞こえ来るウグイスの鳴く音聞きつつ心安らぐ

にぎはしく鳴く虫の音に交りつつ繁れる木の間ゆひぐらし聞こゆ

（二回目の作品）

夕方に牛を見に行きて

高岳の方に向ひて手を合はせ祈りて立てる老夫ありけり

祈り終へ荷物を持ちて歩まるる後姿をしばし拝がむ

水桶を手に持ち帰る老夫はも牛の世話終へし農夫なるらし

この阿蘇のみ山は今もこの土地に住む人々の神にてありき

夕光に襞の影濃くなりゆきて阿蘇高岳はそそり立ちたり

白雲の湧き上がりてはそそり立つ山の峰々を覆はむとする

久留米大学附設高校教諭　名　和　長　泰

高岳をまぢかにあふぐ草原にうすくれなゐの撫子の咲く

（二回目の作品）

慰霊祭にて

黒々とたつ高岳にさそり座といて座の星のまたたきさゆる

小田村寅二郎先生を偲びて

空あふぎよろこばしげに「霊まつる夜には星の見ゆ」とのりたまひぬ

㈳福岡県中小企業経営者協会　脇　坂　幸　樹

阿蘇に来て初めて集ふはらからと国の行く末語らひをりぬ

（二回目の作品）

見上ぐればそびえる青き高岳に白雲めぐり長くたなびく

㈳福岡県中小企業経営者協会　橋　本　欣　也

阿蘇の地に未来を背負ふ学生とともにはげみて我も学ばん

（二回目の作品）

国のため命ささげしますらおのみたまも今夜まひ降りるらん

渕　上　勝　彦

わけいれる深き緑の山道をただひたすらに歩き続ける

（二回目の作品）

講義聞き休みてをれば心地良き涼風吹きて汗乾きたり

㈱はせがわ　福　本　明

緑なす水田の広がり堰止むる外輪山に雲湧きあがる

（二回目の作品）

慰霊祭にて

元気かと亡き父の声聞く思ひして頭あげれば星輝きぬ

亡き父も天の川から降りたまひ語らふここちする慰霊祭かな

第十二班

福岡市立大原小学校事務主査　奈　田　明　憲

照りつける日射しの中を友だちと牧場の道を語らひ歩む

（二回目の作品）

熱帯びしみ声のひびき切切と語る話にこころ動きぬ

札幌西陵高校教諭　本　田　格

黒き蝶花から花へ飛び移り羽震はせて蜜を吸ひ居り

（二回目の作品）

子供らの明るき声を聞きをれば国の行く末たのもしく思ふ

憲法をみ声さやかによみたまふ師の君のみ姿すがしと仰ぐ

聴講の人らの背にもおのづから求むる意欲のみなぎる覚ゆ

㈳福岡県中小企業経営者協会　山　本　純　也

指を折り言の葉さがしいにしへの人にならひて歌詠まんとす

（二回目の作品）

日の本の歴史をかへりみ思ひたり事実を求めこれより学ばむと

㈱山口銀行人事部　村　野　哲　郎

夏空にそびゆる高岳うつくしく映ゆる緑の我が目にしむる

（二回目の作品）

映画「奉祝のともしび」を観て

いならびしひとりひとりにへだてなくみ声をたまはる姿拝しぬ

思はずもすめらみことのみこころのやさしさせまりて涙湧きくる

㈳福岡県中小企業経営者協会　田　代　誠　士

七年ぶりに研修のため阿蘇青年の家を訪れて

久々に来たりし阿蘇の山々の深き緑は今もかはらず

緑こき草原の中友どちと語らひ歩めば時を忘るる

（二回目の作品）

夕暮れの風のささやきここちよく我若人と時をたはむる

㈱はせがわ　沢　辺　龍　司

草原を吹き渡る風は草の香を含みて我が身にここちよきかな

（二回目の作品）

阿蘇合宿規則正しき生活を続けてみたしここ離るとも

第十三班

富士通マーケティング本部　浜　田　實

ひさびさに会ひたる友のひと声に過ぎし日の語らひ今よみがへりきぬ

合宿二日目の朝山々を望みて

澄みわたる阿蘇のおほぞら群れなして飛び行く鳥のかなたに消ゆるも

（二回目の作品）

阿蘇高原にて

まなかひに見上ぐる五岳の雄々しさに阿蘇に来たりたる喜びつのる

高岳に被るかさ雲悠々と朝日に映えて進み行くなり

疾風に押さるるがごとく雲の群阿蘇高原の空を飛び過ぐ

慰霊祭に思ふ

師の君らのみ霊しのばむと集まれる若きらの思ひわれは聞きたし

山口県立下松高校教諭　宝　辺　矢太郎

慰霊祭にて

たままつるゆにはにこよひはいつになくはげしき風の吹きぬくるかも

はげしかる風にかがり火ゆれもだえ舞ひ上がる火の粉あやにあやしも

祭文をよまるる先輩（とも）はこころこめ足をはこびぬ祭壇上を

亡きみたまの大前へすすみかたちただしふかき礼さるる姿をみつむ

つよき風祭文の紙をうちならしひもろぎ竹の葉音たててゆする

㈳福岡県中小企業経営者協会　津　末　大　輔

くもにのる幼きころにみた夢をあそのくもみて今おもいだす

（二回目の作品）

迷はずに前に進めとふ亡き父の声聞えくるこの阿蘇の地で

㈱肥後銀行福岡支店　桝　田　武　治

果しなく続く緑を目にすれども疲れし体に感もよほさず

（二回目の作品）

植村大尉の遺書を読みて

愛児（あいじ）残し散り逝く父の遺書にふれ父なる我も涙零るる

㈱はせがわ　杉　本　保　範

歌を詠む不安抱きて山路を登りて行けばしとど汗かく

（二回目の作品）

植村大尉の遺書を読みて

玉となり砕け散る身と知りつつも残しし手紙の潔ぎよきかな

鹿児島信用金庫　神　野　辰　郎

先輩の声に誘はれひさびさに阿蘇合宿に我は来たりぬ

事務局・写真班

㈳国民文化研究会職員　亀　井　正　弘

講堂の通路に迷ふ赤トンボ不憫に思ひて窓より逃しぬ

㈳国民文化研究会職員　鈴　木　優　子

外国（とつくに）に日の丸を見し喜びを思ひ出しけり広場のポールに

中尾スタジオ　中　尾　国　博

過ぎし日の思ひ出が今甦へる皆と過ごす懐しき阿蘇

国民文化研究会

拓殖大学総長　小田村　四　郎

レクリエーション

眞夏日の空は眞青に澄みわたりみどりの根子岳あざやかに映ゆ

照りつくる日ざし浴びつつ歩む道にひぐらしの声すがしく聞ゆ

見さくれば阿蘇の国原はるばると外輪山につらなりて見ゆ

いくたびか訪ねし阿蘇の山なみは常に変らず懐しきかな

松吉基順兄を偲びて

年毎の夏のつどひを共にせし友いまさぬが淋しきろかも

盃を汲みかはしつつ語らひし君が面影思ひ出さるる

阿蘇の地にいくたび来しか君と共に過せし日々も今は帰らず

慰霊祭

國のためいのち捧げしますらをのみたまをまつる今宵の集ひ

澄みわたる阿蘇の夜空に三ヶ月の光明るく斎庭を照らす

満天の星輝きて天翔けるみたまを仰ぐ思ひするかも

亡き人の数年毎に加はりて一しほ淋し残る我らは

もろともに力あはせて進まむと宣る祭文の言の葉嬉し

外輪山の落陽

西のかた外輪山の山なみに夕日はいまし沈みゆきけり

山の上にかかれる雲を縁どりて赤く輝く光美し

空高く浮べる雲はあざやかに茜の色に染まりゆきけり

夕風の涼しく吹きて阿蘇の地に夜のとばりは訪れんとす

㈱千代田コンサルタント相談役　上村和男

語りつゝ山道をゆけばまなかひに阿蘇の山々ひろやかに見ゆ

ひぐらしの鳴く声すがし夏草の風もそよぎし山道をゆけば

緑なす外輪山の山並の朝日にはえてすみわたりける

逝き給ふ師の君・友等を偲ぶ

こぞの年師の君友等逝き給ひ悲しき思ひいやされぬまゝ

大きなる荷物を背負ひ行く道のけはしき坂を登る今はも

時折は心もくじけ道とほく思ふくるしさつのりくるなり

如何にして遺志をつがむといばら道苦しかるとも進む他なし

斉庭に師の君友ら偲びつゝ御魂をまつる星かげのもと

かゞり火に斉庭は清くおごそかに師の君友ら招くがごとし

阿蘇にて

頂は鋸の歯のごと立ちならふ根子岳いまは雲におほはれ

高岳は緑なすふもとゆ頂に近づきゆけば岩肌あらは

中岳は煙も見えず静かなる山の姿の思はるゝかな

をちこちゆ集ひし友と語らひつ四泊五日をすごし山々

㈱宝辺商店代表取締役会長　宝辺正久

短歌導入講義を聞く

歌作るたのしさ語るを聞きゐつつ晴れたる阿蘇の青山を見る

佐々木四郎いけぐひ共に川渡る歌を聞きつつ根子岳を見る

剣なす岩根根子岳またく晴れ雲むら立てり山の上近く

高原回遊レクリエーション

根子岳と高岳のあはひ遠き空に雲一すぢの見えてさやけし

平らなる外輪山のさらに遠く九重連山夏空に見ゆ

草深き山路を出でて広らなる原野に立てば小さき風吹く

慰霊祭の後

篝火を伏せてみまつり終りたる夜空仰げば星

うつくしき
この国のいのちささげし人あまた星の如くに
空にかがやく
星清き夜の斎庭(ゆには)に立ちならぶ若きらと共に行
かむこの道
合宿に会ひ得ぬ友をこの広き夜空の星を見つ
つしのばむ

元九州造形短期大学教授　小　柳　陽太郎

小田村先生を偲ぶ

すぎし日にかの壇上に獅子吼せし師の君のす
がたいまうつつなる
生涯のおもひひとつに傾けて最後のことば残
したまひき
悠久の国のいのちにたちかへる外にすべなし
国のゆくては
そのことば若きらの胸にうちつけに語りたま
ひしみ心よああ
「ではさようなら」その一ことに万感のおも
ひをこめて去りし師の君
国文研にそゝぐ師の君のかくもあつきそのみ
こころをつがでやむべき

慰霊祭

み祭りを終へてふり仰ぐ大空に満天の星降る
がごとくに
息をのむおもひに仰ぐ大空にきらめきわたる
あまた星屑
亡き友かと思へばうまし星くづの中にかゞや
く一つ星かげ
利鎌(とがま)なす月は西辺に傾きて阿蘇国原の夜は更
けゆく

昭和音楽大学講師　國　武　忠　彦

雲の間に阿蘇の五岳の現はれて神さながらの
姿なるかな
大空にそびえ立ちたる五岳見ゆ絵のごとくか
な美しきかな

新日本製鐵㈱プラント事業部次長　今　林　賢　郁

くだちゆく世のさま見れば日の本のいのちあ
やふしとしみみに思ふ
さはあれど「またひらけゆく道」ありと信じ
て生きる他に術なし
若き友いやつぎつぎにあらはるるときを信じ
て努め果さむ

○

四泊の日々はたちまち過ぎゆきてはやくも最
後の朝となりぬ
つつがなく今年の集ひも終りぬと師のみ霊に
ぞ伝へんと思ふ
壇上に最後の御言葉聞きたるは二年前のここ
にぞありける

神奈川県立厚木南高校教諭　山　内　健　生

合宿地で一夜明けて家に電話す

留守番の娘の声の聞こえ来て「変りはないか」
と思はずたづぬる
わづかきのふ家を出しが火の元のなどか気に
なり電話をかくる
つねの年は電話をかくることなくて合宿終へ
しがなどか気になる
「大丈夫」のみじかきひとこと耳にして気が
かり晴れてほつとするなり

○

かねてより心にかけし合宿の講義の終りてほ
つとするなり
ともかくも気がかりなりし合宿の己が務めを
果たし終へたり
合宿の講義を担ふこととなりこの半年は気が
かりなりき
折にふれ時にふれてぞいかならん内容にせん
かと思案かさねぬ
直接にペンを執りしは間近なれど事にふれて
は合宿思ひし
時間内にほぼ収りてわが講義話し終へるがう
れしかけり
師の君の「ごくらうさん」のひとことに肩の

荷降ろせしここちするなり

全体感想自由発表

若きらの語る言葉を聞きをれば思はず亡き師
（小田村寅二郎先生）の面輪の浮かぶ
ふたとせ前に師の立ちたまふ壇上に若きら立
ちて思ひ述べ行く
師の君のいまさばいかにか聞きたまふ若きら
述ぶるすぐなることばを
若きらの言の葉しかと隠り世にとどくを我は
ゆめ疑はじ

合宿終りて

このむとせのわが身のことどもあらためてか
へりみるなり集ひのをりをり
六年の月日をことなく重ね来てつねと変らず
また集ひ来ぬ
この夏は六年ぶりに講義する務めを抱へてわ
れは集ひぬ
日頃から思ひめぐらすことどものいくつか述
べんと務め担ひぬ
いたらざるわが身なれども「これだけは」と
おもひしことを述べんと思ひぬ
半年の準備ながくも伝へんと思ひしこと語り
終へたり
ともかくもわぎものみたまよ合宿のつとめ果
たせしをよみしたまへや

福岡県立嘉穂高校教諭　小野吉宣

天皇陛下御在位十年のビデオをみて

「国民の心支ふる献身が勤めなる」てふ御言
葉をきく
「献身」が北に南にあらはさる御姿尊し涙あ
ふれ来
罹災者の前に進まれひざまづきみ顔近づけお
声かけらる
励ましの言葉給はるお年寄冥土のみやげと喜
び語る

小柳左門兄が慰霊祭で御製拝誦

神前に二礼せし後東天にまばゆきほどの星流
れたり
心こめ柏は手打てるその刹那たへなる光り天
地の間に
不思議なる感に打たれつ朗々と友の誦みあぐ
御製ききけり

中島法律事務所弁護士　中島繁樹

澄みわたる青きなかぞら高岳の威容みどりに
鎮まり立てり

○

大阿蘇の夜のとばりの高原にみたま迎への警
蹕を聞く
かしこみて身をかたくして祭壇の前に立ちた
り委員長われ

東急建設㈱調達部長　奥冨修一

起き出でて窓より見ゆる高原の緑しるけくし
ばし見入りぬ
炎熱の都会より来て見はるかす緑国原さはや
かにして

㈳国民文化研究会事務局長　山口秀範

阿蘇の夕べ

幼き日見慣れし夏の景色にも寂しさまさる母
しまさねば
遠近に鳴き交しつつ鳥たちも寝所急ぐか母鳥
のもと
稜線の色濃く映えて大気澄む夕べの一時ひぐ
らしの鳴く
沈む陽のまぶしさ避けつつ見上ぐれば白き三
日月中空にあり

慰霊祭終了後

み祭を終へて見上ぐる満天に星きらめきて息
のむばかり
星空を天がけりますみ霊にも親はしさ増すみ
祭のあと
去年今年身まかりましし方々の面輪うつしく
夜空に浮かび来
夏毎に祭り来たりし斎庭べに母のみ霊も今宵
迎へつ

山あひの村の灯遥かに望みつつみ霊送りし名残りにひたる
悠久の時を重ねし皇国にうけしいのちを生きなむ明日も

熊本市役所東部環境工場長補佐　折田豊生

夏草のしげきが中に薄紅のかはらなでしこ凛と咲きたり
まさをなる空あふぎつつすず風に吹かれてあゆめば心放たる
相次ぎてこぞ逝きましし師の君もゐますがごとし想ひ出語れば
なつかしき友らの顔も相見えて若かりし日々想ひ出でくる
見下ろせば阿蘇の国原広野原緑に映えて夏盛りなり

合宿運営本部室にて「天皇陛下御即位十年奉祝式典」ビデオの音声を聴きつつ

大君は神にしませばとうたひたるいにしへ人のことば思はゆ
大君は神にしませばと我もまた心の底ひゆ仰ぎてやまず
大君は神にしませばことごとに人の心をやはらげたまふ

合宿運営本部室にて

合宿の日々のくさぐさ思ひつつ若き友らの発表を聴く
窓の外の阿蘇の山辺は夏陽差ししげれる草の緑目にしむ
麗しきやまとしまねの民として生まれ合ひたる幸をぞ思ふ
国を思ふ若きらのいやつぎつぎに生まれいでなむ集ひのにはゆ

熊本県立教育センター指導主事　白濱裕

合宿初日職場にて

今頃は開会式のさ中ならむ幾度となく時計見やりぬ
我が業務急ぎ果して馳せゆかむみ友ら集ふ学びの庭へ

徳永先生を偲びて

祭文の奏上の声おごそかに響き渡りぬ祭りの庭に
逝きませる師よ聴きたまふか先輩のまごころ込めてつづりし祭文を
見上ぐれば満天の星煌々と輝きてをり真澄める空に
その中にひときは明るき星見れば師と思はれて悲しかりけり

日章工業㈱代表取締役社長　藤新成信

己むえざりし事のありて半日合宿をはなれて戻りし折

一刻も早く宿舎に戻らむと車走らせ山道をゆく
帰り来て湯ぶねにつかりみ友らと語らひ合へは心なごみぬ

班友の皆様へ

大阿蘇のたふとき集ひに縁ありて同班となるありがたきかな
国のためまごころ尽くし学び合ふこれの集ひにまた合はんと思ふ

㈱中央塩ビ製作所取締役会長　星野貢

小堀桂一郎先生の御講義をお聞きして

國柄とほめたたへて語り給ふ師のみコトバ部屋にひびかふ
神のふゆかがふりながら生きつづく國柄貴く仰がるるかな

○

年々の夏合宿はともにせし青森の友まさぬさみしさ
青森の友のみたより讀みくるる若き娘の声朝空にさやか

四日目の此の夕には友ら皆心ひらきて語らふたのしき

舞岡八幡宮宮司　関　正臣

年毎に仰くみやまよ横たはる佛のかほにたぐふ根子岳。

○

わがくにのゆくては遥けく背負ふべき若き友らよ幸くこそあれ

夜をこめて語らひにけるそのかみ（六十年前）を懐かしみ思ふ合宿地にて

長内兄に

「よき友を得て」とふみ歌よむままにじむ涙を止めかねたり

元佐賀県立佐賀商業高教諭　末次祐司

垂れこめし雨雲晴れて澄みわたる朝の空に仰ぐ阿蘇山

澄みわたる朝の空に冴やけくも真近に迫る雄々し高岳

雨晴れて朝日たゞさす高原のそよぐ草原緑目に沁む

見はるかす外輪山の空遠く九重の山に夏雲かゝれり

海ゆかばを歌ひて

澄みとほる高きしらべにおのづから胸内あつく涙こみあぐ

心をば一つにこめて唱ひたるしらべは高く澄み通りたり

阿蘇合宿にて

いにしへゆ神のみ山と仰ぎたるみ祖しのびの高原に立つ

み祖らのいのちは身内によみがへり阿蘇の山々活き活きと見ゆ

今もなほ燃えてやまぬ大阿蘇の神の息吹ぞみ国のいのち

み祖らのひらきし道を守らむと集ひし友と共に進まむ

元サンデン交通㈱取締役　加藤善之

大観望阿蘇外輪山を見渡せば積乱雲の上り立つみゆ

上り立つ積乱雲に夕日かかる外輪山系あかず眺むる

晴れ渡る外輪山の朝ぼらけほととぎす鳴く茜雲かな

乃木神社宮司　松吉宣和

国武先生の班に参加して

班員が心ひとつに語りあふ若者の声まとまりにけり

慰霊祭

慰霊祭御霊の御前に祭文を声高らかにさゝげまつれり

大阿蘇の山を背にして設置る祭壇の御前に御歌さゝげる

○

大阿蘇のけわしき道をのぼりつゝともと語りて心やはらぐ

国立病院九州医療センター　小柳左門

国武先生の講義にかけつけて

わが先輩の講義を早く聞きなむと阿蘇への道をひたに馳せゆく

遅れ来し講堂に見つわが先輩の若き友らに語るみ姿

古事の記よみがへるごと語ります先輩の言葉を聴けば楽しも

慰霊祭のあとに

仰ぎみる阿蘇の夜空はすみわたり星かげあまたきらめきにけり

三日月は高岳の上にかたむきてすみし夜空に清く光れり

わが友は夜空を指して織姫や牽牛星を教へたまひつ

ともどもに夜空を見あげさまざまの星座数ふる時ぞ楽しき

神奈川県立小田原城内高校教諭　原川猛雄

事務局にて

神々の生まれしさまをつぎつぎと語りゆかれる師の声聞こゆ

生き生きと古事記読みゆく師の君のなつかしき声に耳を傾く

戸田建設㈱東京支店開発営業部開発課長　青山直幸

レクリエーションにて

ひさびさに会ひし友らと語りつつ阿蘇の山辺を歩く楽しさ

まなかひに迫り来れる中岳の姿を見れば力湧きくも

切り立てる岩肌見せし根子岳の峯の姿の畏くも見ゆ

吹きわたる風にそよげる夏草に光そそぎて目にもまぶしき

慰霊祭にて

暗やみの中に燃え立つかがり火の赤き炎に心魅かるる

かがり火の炎見つれば亡き大人（うし）の面影しるく浮かびくるかな

祭文を読まるる声は朗々と夜のしじまに響きわたりぬ

お祭を終えて夜空を見上ぐるばあまたの星の輝ける見ゆ

福岡県立太宰府高等学校教諭　占部賢志

燃え上がる篝火ひときは赫（かがや）きて御魂祭りの時し来れり

篝火に映る斎庭に真向へば虫の音あまたすだく今宵は

心地よき風吹きわたるこの野辺に御魂はわれらを守りますらむ

残されしわれらが行く手見そなはし導きたまへとひたぶる祈るなり

大牟田市立勝立中学校教諭　西原正博

「天皇陛下御即位十年奉祝式典」ビデオを見て

思はざる災害受けし人々を親しく見舞はるみ姿尊し

親しくも見舞ひ受けたる人々も涙うかべて喜び語りぬ

心こめ奉祝曲をピアノにて演奏したる若者うれし

鳥栖市役所経済部農林課　西山八郎

慰霊祭の後に

あふぎみる満天の星はまたゝきてうすく帯なす天の川みゆ

南（みんなみ）の空指さして友どちはさそり座の場所教へたまひぬ

み友らと星空見上げつ語らへば集ひの丘にすゞ風のふく

福岡県立朝倉東高校教諭　田中昌道

三男の七夕かざりて大阿蘇の集ひにわれは急ぎ来たりぬ

○

満天の星空見上げて天の川さがせば吾子（あご）のかざりを思ひぬ

火をともし笑顔につつまれ集ひする阿蘇の野原は暖かきけり

北九州市立医療センター放射線科技師　森田仁士

布瀬先生の御講義を聴きて

国際化とは二流のアメリカ人に成ることにけっして非ずと強く語れり

松吉基克兄へ

阿蘇の地へ集ひえずとも録音を案じくれにし友のありがたし

福岡県立筑紫高等学校教諭　黒岩真一

二年ぶり己れを鍛え直さむとこの合宿に我は来にけり

晴れわたる阿蘇の高原草道を先輩と語りて歩

くは楽し
大阿蘇の外輪山を見わたして草道歩けば風心地よし

㈱日立製作所計測技術研究センター　松井哲也

熊本空港よりバスにて合宿地へ向ふ

空港の荷物カウンターの人ごみに友を見つけて声かけにけり

東中野先生の御講義

南京で起こりしことの真実にせまりゆかるる自らの手で
我が国のこころむしばむ難題にいどまるる師のいとなみ尊し
学生の質問に対し懇切に語らるる師の姿胸うつ

熊本製粉㈱住宅事業本部　吉村浩之

徳永先生を偲びて

四年前夏の日差しをあびながら踏切り渡る師の御姿を見つ
合宿の勧誘終へし帰り路の師の御姿と推し量りたり
荒き呼吸を整へるごとゆっくりと歩みを進めし師の御姿は
師の君のその御姿の今もなほ思ひ出されむ夏にしなれば

福岡県立久留米高等学校教諭　與島誠央

小林国平君の開会式における学生代表挨拶を聞きつつ

この阿蘇の集ひに初めて連なりし君の姿のうつつ浮び来
かの日よりふたとせかけて学びたる思ひのたけを語る君はも
日の本に生れしよろこびほのぼのと心にきざすと聞くにうれしき
筑紫なる我が家に集ひ夜ふけまで共に学びし日々思ふかな
かくばかり心豊かに育ちゆく君の姿のなんぞ頼もし
逝きましし国男先生のこの姿みそなはしませと切に祈りぬ

慰霊祭にて

神棚におそなへ捧ぐる役割を与へられたり今年はじめて
海山の幸もゆたかなおそなへをめしあがりませとささげまつりぬ
年ごとにみまかりましし師の君のみ名ふえゆくがかなしかりけり

鹿児島市役所都市再開発課　有村浩明

レクリエーションの折に

友の語る大学生活なつかしく吾が思ひ出も語り出しぬ
友と語り酒くみかはし学びたる日々ありてこそ吾れありと思ふ

神奈川県立厚木東高校教諭　大日方学

古川指揮班長のオリエンテーション

はからずも指揮班長の重責を引き受けましし苦労を思ふ
壇上に立ちたる姿の堂々と前を見据ゑて説明続けぬ
的確に合宿の指示を出してゆく君の姿のたのもしきかな

㈱日本教文社第二編集部　坂本芳明

早朝外出に出て

緑濃き山ながむれば山はだの赤牛の色うましく映ゆる

聖徳太子の資料等を事務局で作成した折に

学生のうへを思ひて資料をば固くつくれと師はのたまへり
師の君の学生思ふ御心に深き祈りの流れてあるかな

熊本地方法務局大津出張所　徳田恒稔

鳥生兄の合宿参加を知りて

寝起きをも友にせし友遥々と愛媛の地より阿蘇に来るとふ

徳永先生をお偲びして

四十五の年を重ねし合宿を支へ給ひし先生をぞ思ふ

第四十三回合宿にて

御病ひを背負ひつ息も苦しげなる師の御姿の忘れかねつる

愛媛県保健福祉部同和対策課　鳥生秀雄

久しぶりに合宿教室に参加して

連絡も途絶えがちなる我をまたよく来てくれと友らは迎ふる

幾年も会はざりしかど心聞き話のできる友ぞ有難き

阿蘇青年の家にて

挨拶を見知らぬ我にする子らの笑みはみかみてかはゆしとぞ思ふ

閉会式にあたって

阿蘇の地で汗をふきつつ過しける合宿教室今日で終りぬ

さわらび塾塾長　北村公一

レクリエーションのハイキングにて

やうやくに夜も明け初めし頃下見にと友らを起こして車で発ちぬ

雨降れば如何になさむと悩みしが陽の輝きて空晴れ渡る

暑き陽の照りつくる中飲み物も配り終へいま出で発たむとす

福岡県労働局総務部労働保険徴収課　古川広治

指揮の合間講堂裏にて

長内先生のことを想ひておれば耳に近く小鳥のさへずりきこへくるなり

きこへくる方に目をやれば小鳥が一羽こずゑにとまりてさへずりにけり

師の君がゐますかのごと思はれてさへずる小鳥をしばし見つめる

大日方先輩の御歌をよみて

我のことを見守りくださりし先輩のみ心しりてありがたし思ふ

日本青年協議会　大葉勢清英

小堀先生の御講義を聴きて

神々をまつる心を今もなほ伝えし国柄守りゆくべし

散策の折に山を眺めて

み仏の横になりたまふごと見ゆるさまを友に語れば驚きにけり

京都大学数理解析研究所研究生　濱地賢太郎

レクリエーションでハイキングに行く

草や木のあひだを歩みぬけゆけば知らずと心やすらかなりけり

小柳先生の御講義を聞いて

輪読は人らの心が輪となりて書を読むことと師はいひにけり

友とまた書を読みたいと思ひけり小柳先生の言葉を聞きて

○

このたびの夏合宿は運営の指揮班として参加するなり

指揮班の仕事は多くありけれど友らのためにひたに働く

熊本市役所建設局管理部監理課　濱口知久

一刻も早く友らに会ひたいとアクセル踏む足力が入る

合宿に遅れし我をあたたかく迎へてくれる友らうれしき

○

合宿に集ふ友らに最高の思ひでつくる支へとならん
汗臭いシャツを脱ぐ時一日の自分がんばり振り返るなり

○

遅くまで研修うちこむ友どもに消灯厳守言ひがたきなり

公務員　喜多村　純

久かたに歌詠みたくも言葉出ずおこたりし日々をうらめしく思ふ
明日からは一日一首を目標に歌詠みゆかんと結意固める

アサヒ飲料㈱　澤部和道

六年振りに班員の中尾先輩に再会して

久方に先輩に会へば懐しく彼の日の面影よみがへりくる
なつかしき友に会へるが楽しみと語る言葉に我もうなづく

○

歴代の天皇の国を思はれる御心の深さ胸にしみ入る

合宿教室に寄せられたお歌

青森市　長内俊平

ひととせに一度の会ひを楽しみに待ち来し集ひに行けずなりけり
大阿蘇の眺めうつつに浮びくる集ふみ友らの姿伴（かげともな）ひて
青砥兄との最後の合宿となりたりし阿蘇はことにも戀しかりけり
よき友を得て帰りませよき友にますものこの世にまたとあらねば
はるかにも集ひのさまをみちのくゆ偲びあげなむ共にある思ひに

北九州市　山田輝彦

大阿蘇の底つ岩根に燃ゆる火のとこしへにあれ国のいのちも

あとがき

吹く風にも秋の深まりが感じられる今日この頃ですが、皆さんにはその後如何お過ごしでせうか。熊本県「国立・阿蘇青年の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早や二ヶ月半が過ぎようとしてをります。このたびやうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来る運びになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に〝走り書き〟していただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第三回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもった文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使ひ、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々しい言葉に心打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

（一）「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文章の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

（二）「短歌」について

合宿では三回にわたって短歌をつくりましたが、第一回及び第二回のものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていただいた第三回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々のご協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきました香川亮二、磯貝保博、小柳志乃夫、坂本芳明、茅野輝章、澤部和道、横畑雄基、斎藤一佐の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は中尾国博さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がった『感想文集』を、ご精読下さるやう切願してやみません。

読み進むにつれて、「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦ってくる事と思ひます。二ヶ月半前に得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈ってをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長や班付の方々、班友に一筆御便りを差し上げていただきたくお願ひ致します。

（原川猛雄記）

〔資料〕
第四十五回〝合宿教室（阿蘇）〟感想文集
非売品
平成十二年十月三十日発行
編集兼発行者
社団法人　国民文化研究会
理事長　上村和男
編集委員　國武忠彦・原川猛雄
青山直幸・北浜道
東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号
〒一五〇―〇〇一一
電話　〇三―五四六八―六二三〇
FAX　〇三―五四六八―一四七〇